

長 沖 古 墳 群 Ⅲ

—村後地区・飯玉地区（C・D地点）—

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 31

児玉町文化財調査報告書 第36集

なが おき こ ふん ぐん
長 沖 古 墳 群 III

むらうしろ ち く いいだま ち く
—村後地区・飯玉地区(C・D地点)—

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 31

2002

埼玉県児玉町教育委員会

序

児玉町は、埼玉県内において古墳の多い町として知られています。古くは大正時代から、多くの考古学者達がこの地を訪れています。

埼玉県古墳詳細分布調査によると、県内の古墳総数4,696基のうち、児玉町に所在する古墳の数は291基を数え、県下第3位となっております。

今日、本報告の長沖古墳群を訪れると、耕作地に点在する古墳の多さに驚かされます。これらの古墳は、この地に暮らしてきた人々が残し、伝えてきたものであり、古人への思いが偲ばれます。このような風景はまた、この地域に暮らす私たちの、慣れ親しんだ日常的な風景の一コマとして身近な存在なのです。

しかしながら、生活環境の充実や地域の発展にしたい、このような歴史的な景観は徐々にその姿を消しつつあります。

本報告も、やむをえない状況から、町民共有の財産である埋蔵文化財を、記録保存という手段を講ずることにより、後世へと伝えることとなりなした。

本報告書が広く活用されるとともに、文化財保護意識の高揚と、児玉町という地域の歴史に対する理解を深めるための一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行にあたり、関係諸機関ならびに関係各位、さらに住民の皆様の多大なるご協力を賜りました。ここに関係各位皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月12日

児玉町教育委員会

教育長 富 丘 文 雄

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字長沖字村後247-3外に所在する長沖古墳群村後地区（県遺跡No.54-300）・同町大字児玉字飯玉412・同字飯玉408-6に各々所在する飯玉地区C・D地点（県遺跡No.54-300）の発掘調査報告書である。
2. 古墳番号については、既報告『長沖古墳群』（菅谷、1985）所載の「第2図 長沖・高柳古墳群分布図」における古墳番号が、一般的に通用されていることから、混乱を避けるために同図番号に統一した。なお、埼玉県遺跡台帳における番号は、長沖第70号墳が第184号墳、第71号墳が第185号墳、第72号墳が第186号墳、第48号墳が第159号墳、第49号墳が第160号墳である。
3. 発掘調査は、3調査区ともに個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施したものである。
4. 発掘調査及び整理・報告書刊行に要した経費は、町費・国庫補助金・県費補助金（埼玉県教育委員会）である。
5. 発掘調査の期間は、村後地区を平成6年7月8日から9月30日に、飯玉地区C地点を平成8年7月23日から8月30日、同D地区を平成10年11月2日から30日まで実施した。
6. 発掘調査の担当は、村後地区を徳山寿樹・大熊季広、飯玉地区C地点を徳山、飯玉地区D地点を大熊が行った。
7. 報告書刊行のための整理作業および報告書作成作業は、整理参加者の協力を得て大熊があたり、平成13年5月1日から平成14年3月25日まで行った。
8. 本書の編集は整理参加者の協力を得て大熊があたり、各執筆分担については第V章を徳山が、第IV章1. 古墳時代の遺構と遺物のうち、鶏形埴輪の観察所見および第VII章を西田親史が、それ以外は大熊が行った。
9. 発掘調査および本書作成にあたって下記の方々や諸機関より御助言・御協力を賜った。して感謝いたします。（順不同、敬称略）
赤熊浩一、石坂圭介、猪股麻紀、江原昌俊、太田博之、岡 稔、岡本幸男
金子彰男、小宮山克巳、坂本和俊、佐藤雅一、佐藤幸恵、篠崎 潔、白崎智隆
新開基史、外尾常人、田村 誠、塚田泰司、永井智教、中沢良一、長瀧歳康
中平 薫、橋本充史、長谷川勇、東野豊秋、平田重之、舟木 聡、逸見恵大
増田一裕、丸山 修、丸山陽一、松本直也、宮島秀夫、宮本直樹、矢内 勲
埼玉県教育局文化財保護課、児玉郡市文化財担当者会、東海大学考古学研究会
10. 本書に関する資料は児玉町教育委員会が管理・保管する。
11. 本書作成の主な分担作業は、次のとおりである。
遺構図面操作他（福島礼子、倉林常子、新井嘉人）
土器接合・復元（福島礼子、倉林常子）
遺物実測（大熊季広、櫻井和哉、田口直美）
トレース（福島礼子、倉林常子、田口直美）
遺物写真（大熊季広）
その他（田口照代）

凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図等の指示は以下のとおりである。

1. 遺跡、全測図等におけるX・Y数値は、平面直角座標第IX系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また矢印の方向はすべて座標北を指す。
2. 調査区におけるグリッドは上記座標に基づき4m×4m方眼で設定している。グリッドの呼称は、X座標をアルファベット、Y座標をアラビア数字とし、呼称する場合X—Yの順で表している。
3. 測量、実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。なお、紙幅の都合により縮尺の異なるものもあるが、それぞれスケールを付した。

遺構平面	1/80（古墳平面）	1/60（その他の遺構）
遺構断面	1/40（古墳セクション）	
遺物 土器	1/4（完形品）	1/3（破片資料）
石器	1/3	

4. 遺構平面図は、原則的に上位が座標北を示し、方位の表記は省略したものがある。なお、この原則から外れるものには、それぞれ方位を示した。
5. 土層断面図およびエレベーション図における水平数値は海拔高度を示し、単位はmである。
6. 等高線図中の数値は、海拔高度を示し、単位はmである。
7. 遺構名は以下の略号で表記した部分がある。

S J…竪穴住居址 S K…土 壙 S D…溝址
S E…井戸址 S X…性格不明遺構

8. 本書に用いた地形図は国土地理院発行の1/50,000・1/25,000、児玉町役場発行の1/2,500および児玉町都市計画図（1/2,500）を改図、転載した。また各々の図に発行元・図幅名・発行年等を添えた。
9. 測量、実測図内の網部等の指示は以下のとおりである。

 …ローム地山  …炉址および焼土  …重複遺構・攪乱
 …礫石等  …須恵器  …繊維土器

10. 遺物出土状況図における記号は以下の遺物を示す。

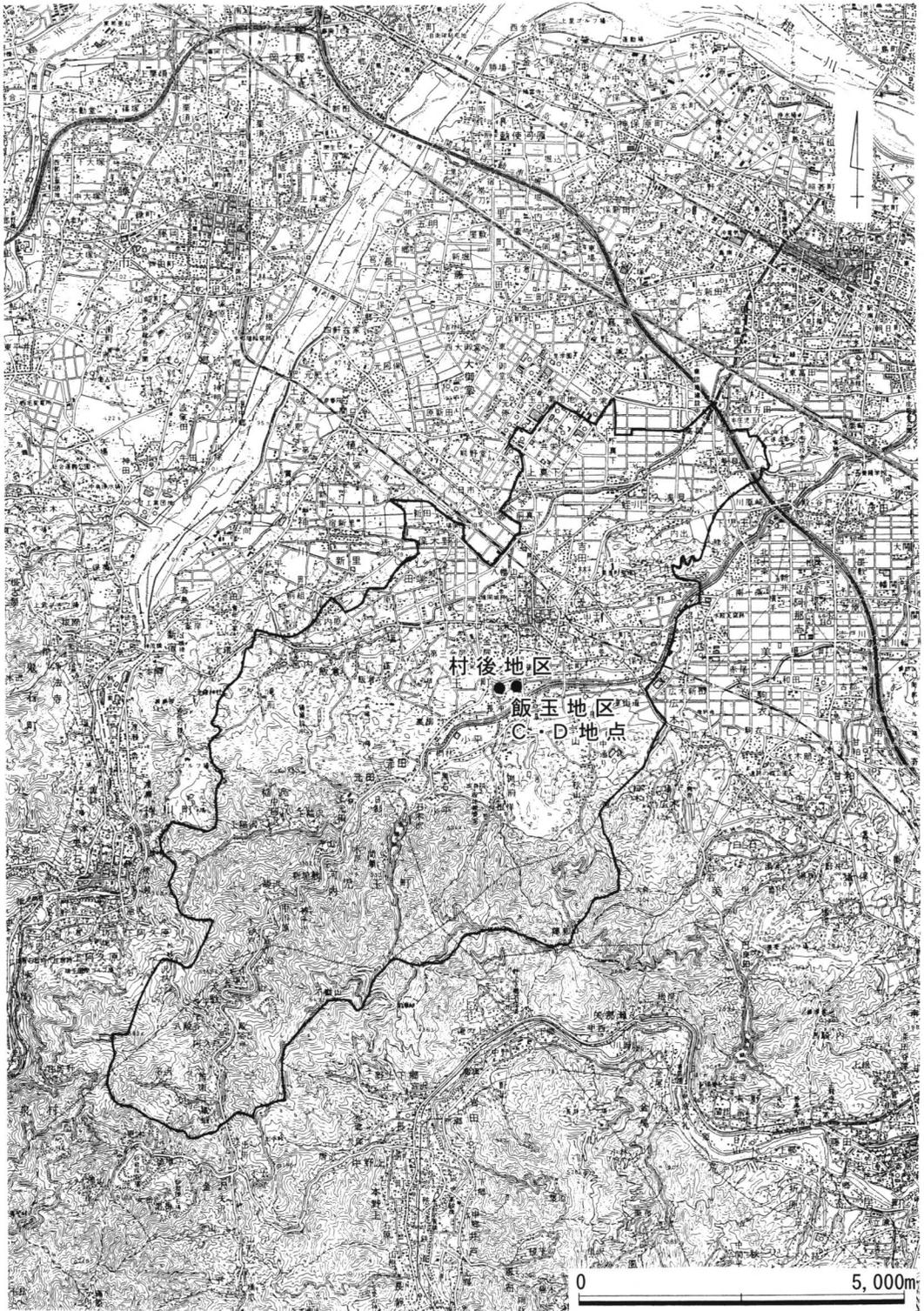
●…土器 ○…石器・礫石

目 次

序
例言
凡例

第 I 章	発掘調査に至る経緯	1
第 II 章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
	1. 地理的環境	3
	2. 歴史的環境	5
第 III 章	各調査地区の概要	6
	1. 遺跡の概要	6
	2. 基本土層	11
第 IV 章	村後地区の発掘調査	14
	1. 古墳時代の遺構と遺物	14
	2. 縄紋時代の遺構	46
	3. 縄紋時代の遺物	49
第 V 章	飯玉地区 C 地点の調査	53
	1. 古墳時代の遺構	53
第 VI 章	飯玉地区 D 地点の発掘調査	59
	1. 古墳時代の遺構	59
第 VII 章	まとめにかえて	62
	北関東地方出土の鶏形埴輪—長沖古墳群村後地区出土の鶏形埴輪をめぐって—	

参 考 文 献
写 真 図 版
報 告 書 抄 録
発掘調査の組織



第1図 児玉町と遺跡の位置

「国土地理院 平成10年発行 高崎」
 「国土地理院 平成4年発行 寄居」
 1/50,000を使用

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

村後地区

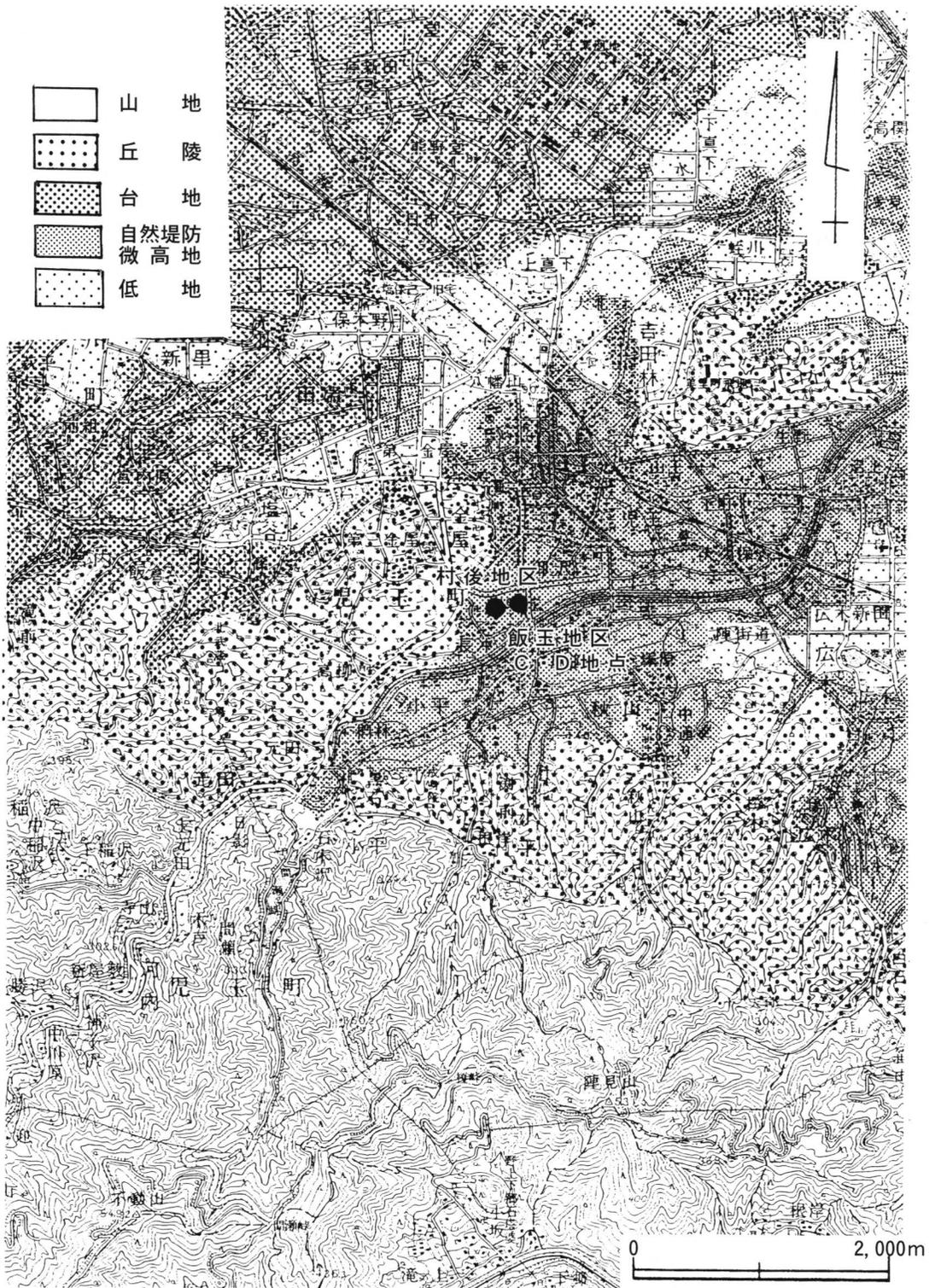
平成5年12月17日、金井保男氏より個人専用住宅建築を予定している児玉町大字長沖字村後247-3番地にかかる埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会文書が児玉町教育委員会に提出された。当該区域は『埼玉県遺跡分布図』No.54-300長沖古墳群の区域に相当しており、試掘調査の結果においても照会区域に隣接する長沖古墳群第71号墳周溝が確認された。この試掘調査の結果を踏まえ、現状で保存できるよう調整を行ったが、住宅建設の計画変更は困難であることから、やむをえず発掘調査を実施し記録保存することとなった。平成6年7月1日付けで、同氏より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会より同日付児教社第260-2号「埋蔵文化財発掘調査の通知について」が、埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出された。平成6年12月28日付教文第3-514号で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知があった。

飯玉地区C地点

平成8年3月12日、秋山友次氏より個人専用自宅を建設する予定の児玉町大字児玉字飯玉412-2にかかる埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会文書が児玉町教育委員会に提出された。当該地は『埼玉県遺跡分布図』No.54-300長沖古墳群に該当し、かつ第48号墳に極めて隣接していることから同古墳の周溝部分に相当していることが推定された。町教育委員会では、このことを踏まえ同年3月28日付け回答するとともに秋山氏と協議したが、住宅の設計変更は困難であるとの結論に達し、発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。同年7月10日付で「埋蔵文化財発掘の届出」が、また同日児玉町教育委員会より「埋蔵文化財発掘調査の通知について」が、埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出された。平成8年7月25日付け教文第3-257号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があった。

飯玉地区D地点

平成9年9月17日、堀口利一氏より児玉町大字児玉字飯玉408-6に個人専用住宅を建設するため、児玉町教育委員会に埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会があった。当該地は『埼玉県遺跡分布図』No.54-300長沖古墳群に該当し、かつ第49号墳に隣接していることから、同古墳の周溝部分に相当していることが推定されたところから、その旨回答するとともに堀口氏と協議したが、設計等の変更を行っても周溝部分については現状変更せざるをえない状況であることが判明し、発掘調査を行って記録保存することとなった。堀口氏より平成10年7月1日付けで「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会より同日付「埋蔵文化財発掘調査の通知について」が、埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出された。平成10年7月1日付教文第1-43号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があった。(事務局)



第2図 遺跡周辺の地形

「国土地理院 平成10年発行 高崎」
 「国土地理院 平成4年発行 寄居」
 1/50,000を使用

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

長沖古墳群が所在する児玉町は、行政区界上児玉郡に所属している。児玉郡は本庄市・児玉町・上里町・美里町・神川町・神泉村の一市四町一村から構成され、関東平野の北西縁辺に位置している。この地域の南西には、関東山地がせまり、平野部と山地部との境界域に相当し、変化に富んだ景観を呈している。

児玉町は東西9.5km、南北12kmにおよび、南西から北東へと展開している。町の地形は、ほぼ中央部を北西から南東へと伸びる「八王子構造線」を境に南西側の山地部と、北東側の平野部とに大別される。

山地 山地部は、上述の関東山地の北部にあたり、一般に秩父山地と呼ばれている。児玉町南東の山地部は、秩父山地北側に相当し、上部山地と呼称されている。

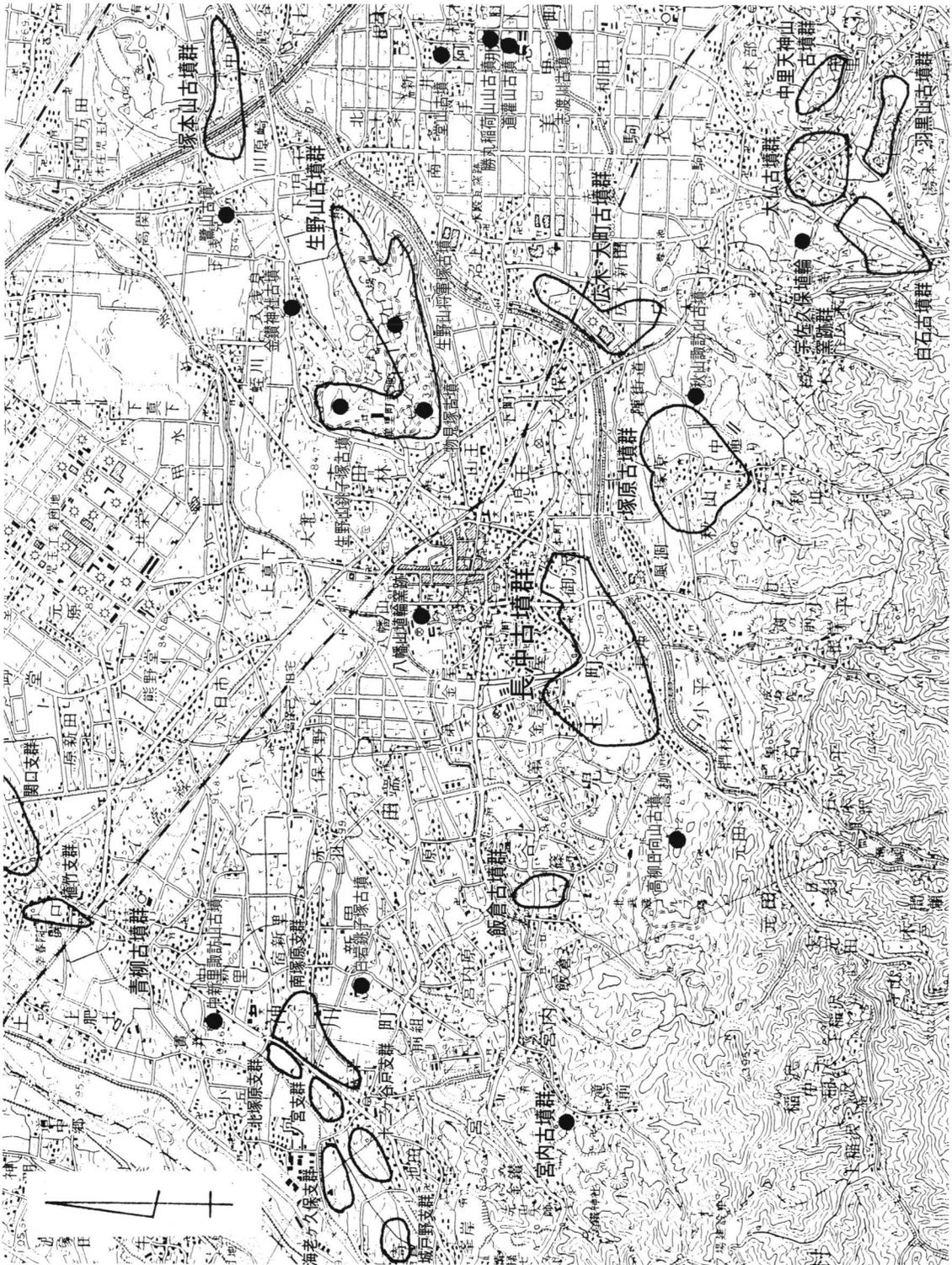
丘陵 平野部は、丘陵・台地・低地の三地形に区分される。児玉町における丘陵部は、児玉丘陵と呼称される。この児玉丘陵は、山地より半島状に突出したものと、その先端部が侵食・分離され、独立した残丘状を呈するものから構成されている点に特色がある。独立残丘の生野山丘陵は、標高約130mを測り、その頂部は平坦面が発達し、多くの古墳が築造された生野山古墳群が所在している。

台地 丘陵より連なる、一段低い平坦面である台地地形は、本庄台地と呼称される。本庄台地は、神流川によって形成された扇状地であり、扇頂部の標高は約120m、扇端部は50mを測り北東方向へ、緩やかに下降している。

低地 この台地面の南東縁辺と生野山丘陵との間は、上武山地を水源とし、南西から北東方向へと流れる女堀川によって解析された帯状の低地となっている。この低地帯には、台地面が解析されずに遺存する微高地と、沖積作用によって形成された自然堤防が、女堀川の沿うように、列点状に並んでいる。

長沖古墳群の地形 長沖古墳群は、児玉町大字高柳、金屋および児玉にわたり、概ね東西方向に分布している。古墳群は、丘陵端部から台地面を主体に分布している。

この地域は、南西から北東へと流下する小山川中流域の左岸に相当している。この小山側対岸の、南東方向約1kmには、塚原古墳群が所在し、長沖古墳群は、小山川以南に及ばないことから、群の南端は、小山川によって画されているといえよう。このことは、人的営為と自然との関係性からは、造墓集団内における墓域の設定の意識が、また、造墓集団相互の関係性からは領域の設定が、地理的条件をその一定の規準としていたと見做すことができよう。領域の設定はまた、長沖古墳群の造墓活動の展開に一定の規制を促し、墓域の拡大は、領域の内側に限定されることとなったであろう。ともあれ、長沖古墳群における造墓活動は、その分布が一定領域を逸脱しないことから、集団内部における一定の規範の存在と、その継続性をも読み取ることが出来よう。



第3図 周辺の古墳群と主要古墳

2. 歴史的環境

ここでは長沖古墳群および発掘資料を中心に、その概略を述べてみたい。

児玉地域における古墳時代の幕開けは、鷲山古墳の築造に始まる。本古墳は、二次に渡る墳形確認調査が行われている（坂本、1986・恋河内、2001）。これらの調査で、鷲山古墳の築造時期は4世紀前半頃であり、全長約60mを測り、前方部は中位から強く開く撥形の、前方後方墳であることが判明している。

鷲山古墳に続く生野山物見塚古墳は、町遺跡調査会により調査が行われ（2001年調査）、造り出しを付帯する、径約40mの規模であることが明らかとなった。また、埴輪は伴わず、出土した土師器から5世紀前半の築造であることが判明している。続く5世紀中葉、埴輪を伴う古墳が築造されるようになる。現在のところ、野焼き焼成、B種横ハケ調整の円筒埴輪が、長沖第157号墳（径32m）において確認されている。同種の埴輪は、美里町志渡川古墳（径40m）で確認されており、本庄市公卿塚（径65m）では、格子目叩きの円筒埴輪と共に、少量のB種横ハケ調整のものが確認されている。格子目叩き技法の埴輪は、金鑽神社古墳（径69m）、生野山將軍塚古墳（径60m）で確認されている。該期は、川西編年Ⅲ期に否定され、児玉地方の造墓に埴輪の樹立が取り入れられた時期といえよう。長沖古墳群では、横ハケ調整の欠落はみるものの、第34号墳および15号墳周溝内側出土の円筒埴輪が、焼成、凸帯形状から、該期に当てられている（菅谷、1980）。両古墳の資料は、直接周溝・墳丘から検出されていないが、第157号墳に続く時期の資料として評価されよう。

5世紀後半になると、古墳に樹立される埴輪は、窰窯焼成のB種横ハケのものとなる。長沖第14号墳・生野山第9号墳をはじめ、児玉地域で広域的に築造されている。該期までの古墳の墳形は、基本的に円墳である点が注目される。

6世紀代に築造された前方後円墳に長沖第137号墳をあげることが出来る。同古墳は1984年の児玉町教育委員会による調査で、前方部の一部が発掘され、埴輪列が検出されている。出土した円筒埴輪のうち一個体は、一次縦刷毛調整の後に、底部器外面板叩き調整が施されるものである。主体部については調査区外のため不明である。同種の埴輪は、長沖第15・22号墳において検出されている。これらの古墳の主体部は竪穴石室であり、その形態は複数確認されている。この後、6世紀中葉に横穴式石室が採用される。長沖第4・13号墳は横穴式石室波及期の古墳として評価される。6世紀後葉には、横穴式石室の形態は多様化し、長沖第21号墳のような、所謂「毛野型胴張り石室」の登場を見る。同種の石室は7世紀前半には、規模が縮小し、埴輪の樹立のなされなくなる。7世紀後半にはさらに石室規模は縮小傾向を見せ、形骸化が進む傾向が指定されている（利根川、1994。増田、1995・1996。大谷、1999）。

第Ⅲ章 各調査地区の概要

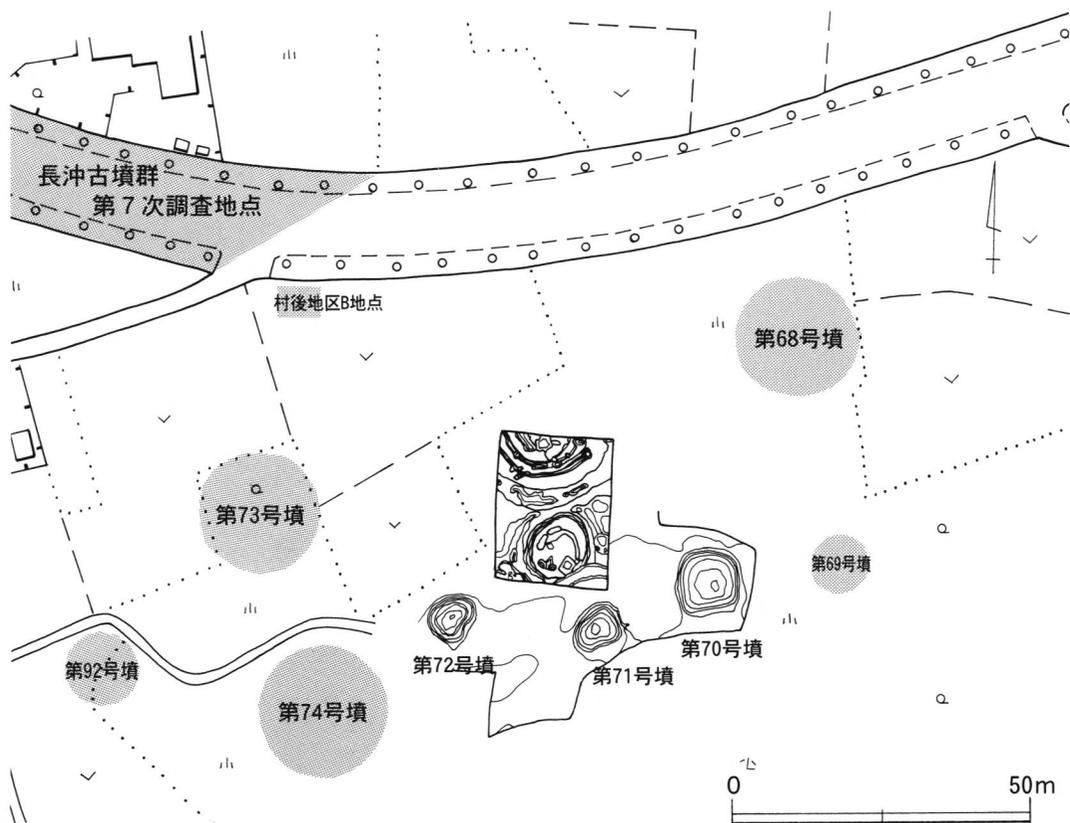
1. 遺跡の概要

村後地区

本書で報告する長沖古墳群村後地区は、『埼玉県遺跡地図』の長沖古墳群に該当し、遺跡番号はNo.54-300である。村後地区は児玉町大谷字長沖字村後247-3外に所在している。調査面積は500㎡である。

村後地区は、児玉市街地の南東に位置し、町南端部、上武山地より北東方向へと流下する小山川の左岸に相当する。調査地点は、標高約117mの台地上に占地している。この台地は、高柳地区の丘陵端部よりつづく台地突端部が、解析谷によって分断され、孤立した微高地状の景観を呈している。

村後地区では、従来未確認であった古墳址が3基確認された(村後地区第1・2号古墳址)。古墳周溝の可能性が考えられる土壌状の掘り込みが検出され、本書において4号古墳址として報告する。また、近接して遺存する長沖古墳群第71・72号墳の周溝の一部を調査した。従来埴輪を持たないものとされていた、第71号墳は埴輪を有する可能性のあることが判明した。また、第2号古墳址の墳丘跡、および第2号古墳址周溝下より、縄文時代竪穴住居址2軒、土壇3基が検出された。



第4図 村後地区と周辺の古墳

『児玉町都市計画図No.14 平成12年修正』
1/25,000を使用

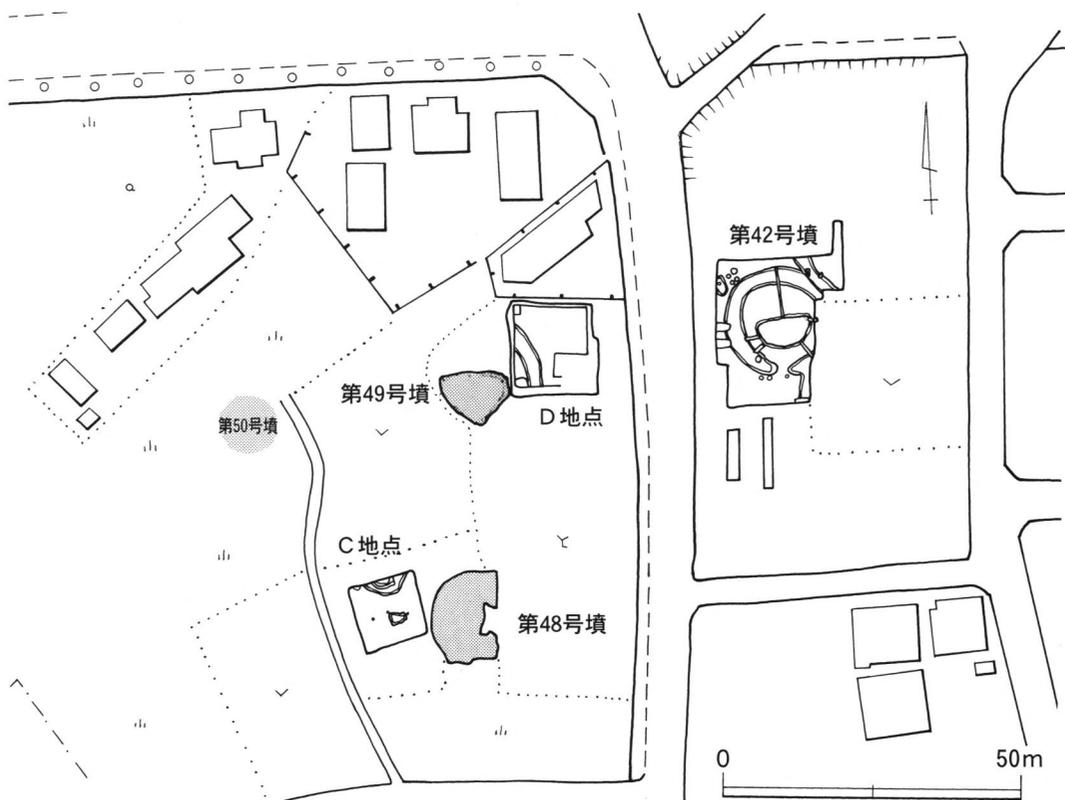
飯玉地区
C・D地点

飯玉地区C・D地点は、『埼玉県遺跡地図』の長沖古墳群に該当し、遺跡番号はNo.54-300である。飯玉地区C地点は児玉町大字児玉字飯玉412に、同D地点は児玉町大字児玉字飯玉408-6に、それぞれ所在している。調査面積は飯玉地区C地点が124㎡、同D地点が226㎡である。

飯玉地区C・D地点は小山川の浸食作用によって形成された河岸段丘上に占地している。周辺の標高は約109mを測る。

飯玉地区C地点では第48号墳の周溝の一部を調査し、本址が埴輪を持たない可能性が高いことが確認された。この第48号墳周溝に重複して、周溝状の遺構が一条検出された。この遺構は、検出範囲が少ないものであるが、覆土から周溝の可能性が高いものであり、近接地に未確認の古墳の存在が予想される。調査区中央南寄りには、土壌が2基検出された。

飯玉地区D地点においては、長沖古墳群第49号墳の周溝の一部の調査を行った。検出された周溝から、第49号墳は、周溝内側立ち上がり部での直径が約28mであったと推定される。本址は従来埴輪を持たないものとされていたが、今回の調査においては、埴輪片是一片も検出されなかった。このことから、周溝の一部のみの調査ではあるが、その蓋然性は高まったものといえよう。



第5図 飯玉地区C・D地点と周辺の古墳

「児玉町都市計画図No.14 平成12年修正」
1/25,000を使用

2. 基本土層

村後地区

第6図は村後地区における基本土層の概略図である。第V層以下は、各周溝の立ち上がり面等からの観察によっている。

第0層は、現代の搬入によってもたらされた客土層である。

第I層には、1783（天明3）年噴出の浅間山系テフラ（As-A）が多量に含まれ、概ね近世後半から現代の土層である。層中のテフラは、均質に混在している。このような状態は、耕作による攪拌行為のために起こるものであろう。

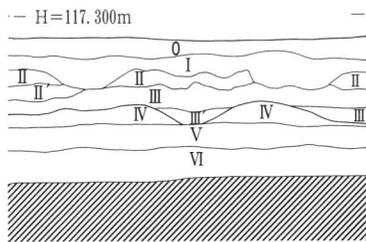
第II層にも（As-A）が含まれるが、その含有率は低いことから、耕作にともなう作物根等によって、二次的に混入したものであろう。したがって1783年以前には、第II層は安定した層位として存在していたものと考えられる。

第III層は、各古墳周溝の掘削をうけていることから、古墳時代以前に形成されたものである。周溝覆土最上層にあたる黒褐色土中には、1108（天仁元）年爆裂時に降灰した、浅間山系B軽石が比較的多く含まれる。このことから、本来は第III層・第II層間に、黒褐色土を主体とする旧表土面が存在したことが推定される。この旧表土起源の土層は、基本土層中に観察されないものである。このような土層の喪失は、自然現象による流失または飛散、あるいは土層の攪拌現象による土質の変化が考えられる。

第IV層は第III層から第V層へと移行する漸移層であり、武蔵野面に相当する層である。暗褐色土とYP粒子を包摂する明褐色土が混在し、層の下位に行くにしたがって、明褐色土の比率が高くなっている。

第V層はローム上層に相当し、約1.3~1.4万年前に噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP）を含む層である。層上面は現地表面より40cm前後を測る。

第VI層は黄褐色を呈するローム層である。層状面は現表土面から60cmを測る。本層下には浅間板鼻褐色軽石（As-BP）が観察される。



長沖古墳群村後地区 基本土層説明

第0層 客土層

第I層 暗灰褐色土

暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石（暗灰色・~2mm）を多量に含む。しまりは硬く、粘性無し。

<現耕作土>

第II層 暗灰褐色土

暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石（暗灰色~2mm）を微量、ローム粒子（~0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。

第II'層 暗灰褐色土

第II層土を主体とし、第III層土を少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。

第II''層 暗灰褐色土

第II層土を主体とし、第III層土を中量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。

第III層 暗褐色土

暗褐色土を主体とし、ローム粒子（~0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。<遺構確認面>

第III'層 暗褐色土

第III層土を主体とし、第II層土を少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。

第IV層 明褐色土

暗褐色土とYP粒子を含む明褐色土が混在する層。

第IV層 明褐色土

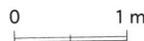
<漸移層>

第V層 暗茶褐色土

YP層

第VI層 黄褐色土

ローム層



第6図 村後地区基本土層概念図

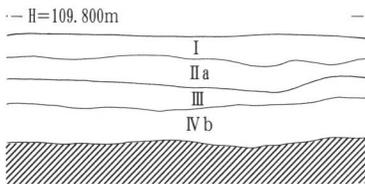
飯玉地区
C・D地点

第7図は飯玉地区C・D地点の基本土層図である。C地点は、調査区東壁と周溝部分において観察された確認面下の土層を合成したものである。D地点は調査区北西コーナーにおいて観察したものである。

飯玉地区は小山川の浸食・氾濫によって形成された河岸段丘低位面に位置している。D地点における遺構確認面は、調査区南側の約1/3の部分は砂礫層、残りの北側の部分は基本土層第Ⅲ層土という変化に富むものであった。C・D両地点間の距離は、約30mであるが、土層の対比は細部において困難である。そのため、やや煩雑ではあるが、両地点の基本土層を掲載する。

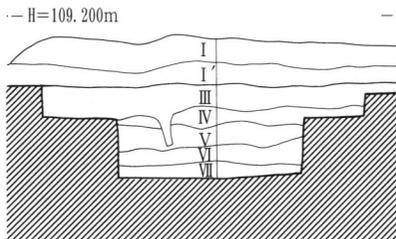
古墳の築造、こと主体部の構築には、材料としての礫石が不可欠である。現在、飯玉地区と同様の土壌環境で、かつ古墳の存在しない地域における耕作地では、一隅にしばしば古墳と誤認される、小山状の礫石集積が複数見受けられる。これらの集積は、耕作に際し、障害となる礫石を意図的に選別・採拾し、集積したものである。このような事例から、当該地も、古墳築造時には相当量の礫石が存在していたことが推定される。周溝の掘削には困難が生じたであろうが、石材調達の観点からは、現小山川流路からも近く、かつ地表の転石や、地中からも石材が確保できる好条件を備えた地域であったと考えられる。

平成7年、本地区南西約600mの地点で、確認された道上1号墳(大谷, 1999)もまた、段丘低位面に所在し、今後この段丘低位面には注意が必要であろう。



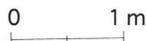
飯玉地区C地点 基本土層説明

- 第Ⅰ層 明灰褐色土 浅間山系A軽石を多量に含み、小砂利を微量含む。しまりは普通で粘性なし。<現耕作土>
- 第Ⅰ'層 明灰褐色土 小砂利、炭化物粒子を微量含む。しまりは普通で、粘性なし。
- 第Ⅱa層 暗灰褐色土 小砂利を多量に含む。しまりは普通で、粘性あり。<旧耕作土>
- 第Ⅱb層 暗灰褐色土 1~20mmの砂礫を多量に含む。しまりは普通で、粘性なし。(古墳出土の礫を古墳の周囲に巡らし、埋め戻したものであろう)
- 第Ⅲ層 黒色土 炭化物粒子(1~5mm)を多量に含む。しまりは普通で、粘性あり。<古墳時代以降の旧表土・炭化物粒子が均質に勝つ多量に混入することから耕作された可能性が考えられる。>
- 第Ⅳa層 明黄褐色土 砂利を中量含む。黄色味が強く、砂質である。しまりは普通で、粘性あり。<ローム二次堆積土に成因が似ていると思われる。層上面に縄文時代前期から中期の土器片を微量含む。>
- 第Ⅳb層 明褐色土 砂利を多量に含む。河川氾濫起因の堆積層と思われる。

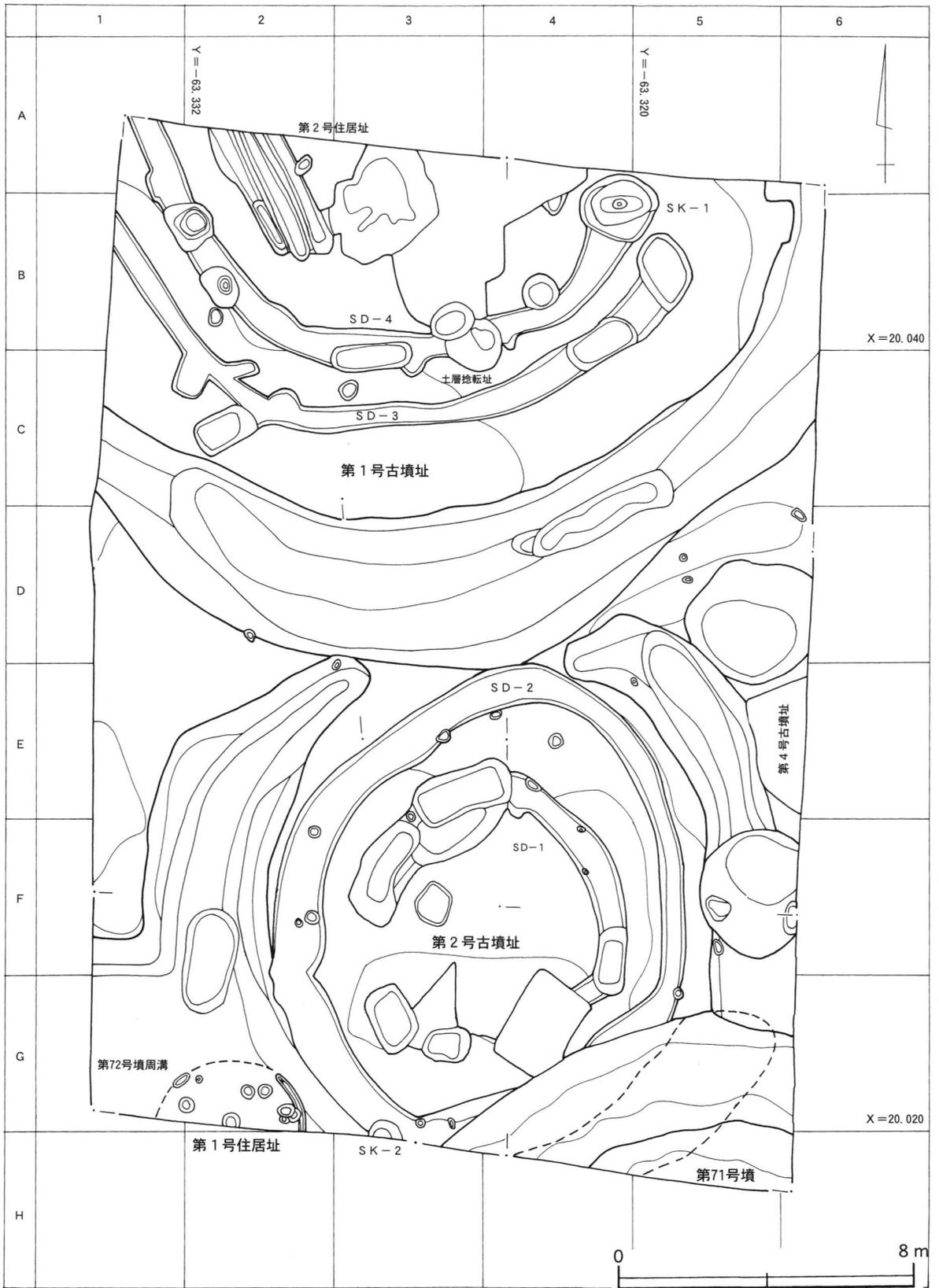


飯玉地区D地点 基本土層説明

- 第Ⅰ層 暗灰褐色土 暗灰褐色土を主体とし、片岩小礫(~2cm)、同小粒(~8mm)を多量、浅間山系A軽石(~2mm)を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はなし。<現耕作土>
- 第Ⅰ'層 暗灰褐色土 第Ⅰ層に準ずるが、しまりが硬い。
- 第Ⅱ層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、片岩小礫(~3cm)を少量、同小粒(~5mm)を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。<古墳時代以降の旧表土>
- 第Ⅲ層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、片岩小礫(~2cm)を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第Ⅳ層 暗褐色粘質土 第Ⅲ層主体土層の暗褐色土に似ているが粘性が高い。また片岩小礫・同小粒といった夾雑物は、ほとんど含まれない。しまりはやや高く、粘性は高い。
- 第Ⅴ層 明黄褐色砂質土 明黄褐色砂質土を主体とし、片岩砂粒(~2mm)を中量含む。しまりはやや硬く、粘性は低い。
- 第Ⅵ層 明黄褐色砂質土 明黄褐色砂質土を主体とし、片岩砂粒を含まない均質な砂層である。しまりはやや硬く、粘性なし。
- 第Ⅶ層 暗茶褐色粘土層 暗茶褐色粘土を主体とする層。粒子は微細均質である。しまりはやや硬く、粘性は高い。



第7図 飯玉地区C・D地点基本土層図



第8図 村後地区全測図

第Ⅳ章 村後地区の発掘調査

1. 古墳時代の遺構と遺物

第1号古墳址（第9～12図 図版1-1、2-1・2、3-1・2）

本調査区の発掘調査前の状況は、かつては畑として利用されていたと思われ、完全な平坦地であった。本古墳址は、従来その存在がまったく知られていなかったものである。周辺には、長沖古墳群第68・70・71・72・73号墳が本調査区を取り囲むように所在している。1980年に刊行された「長沖古墳群」（菅谷）所載の長沖・高柳古墳群分布図において、やや集中的に分布する、これらの古墳の北側にあたる当該地は、古墳の存在しない空地となっている。

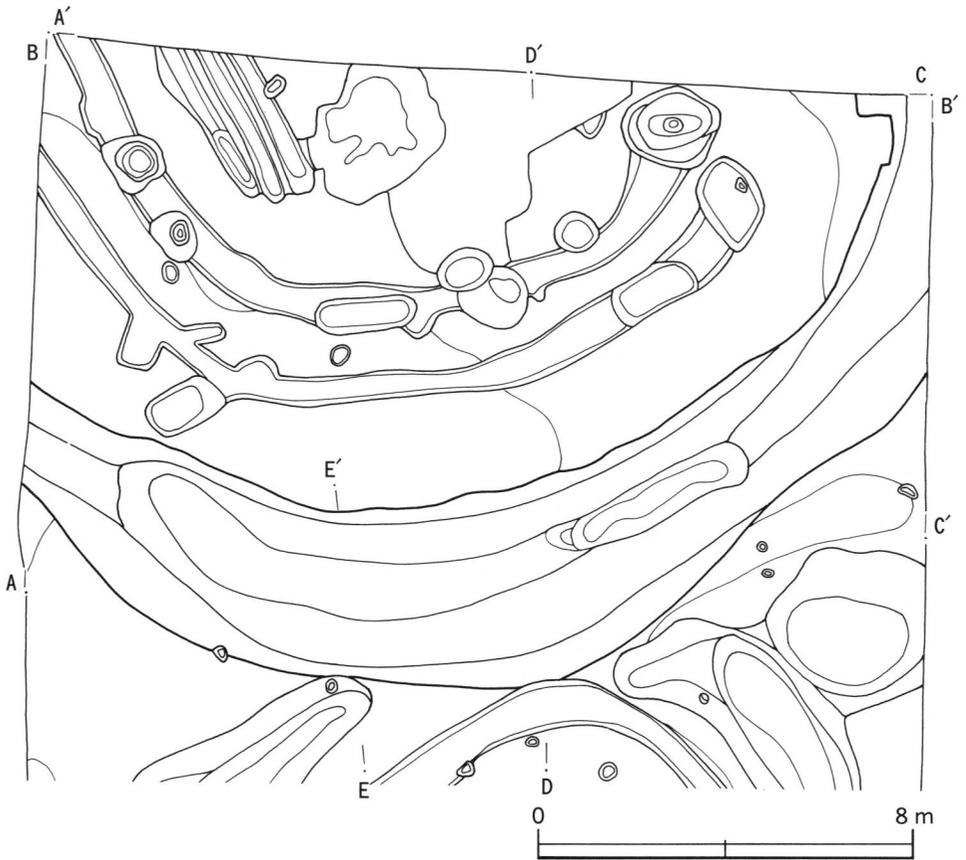
本址は、表土除去の後、本地域の古墳周溝覆土に見受けられる、浅間山系B軽石を含む黒褐色土を覆土とする、弧状を描く遺構プランが確認され、古墳址であることが判明した。

本址周溝部は調査区の中央付近から、北側に検出された。墳丘に相当する部分は完全に削平されており、中央部の攪乱はローム層にまで達するものであった。この攪乱部分はきわめて新しいものである。攪乱の土層中には20cm前後の円礫が多量に含まれており、かつて石室が存在したことを示していた。地元住民の話では、小山川の河川改修時（昭和35年以降）に周辺の複数の古墳の土を持っていったことがあるらしいが、この攪乱が該当するかは、時期比定の可能な混在物が検出されなかったため判然としない。

この中央攪乱部と周溝との間には、周溝に沿うかたちの同心円状の溝址が2条巡っている。内側を巡る第3号溝址の覆土は、浅間山系A軽石を多量に含む暗灰褐色土であり基本土層第I層に対応するものであった。もう1条の、さらに外側に巡る第4号溝址覆土もまた、浅間山系A軽石が観察され、覆土の主体土は第3号溝址と同様であった。これら2条の溝址には、それぞれより新しい時期に掘削された複数の土壌が重複して存在するという共通の特徴を備えている。これらの土壌は、平面プランが長方形を呈するものであり、壁面および底面には平面を基調とし、側面が直線上の工具痕が観察されることから、鋤による掘削であったと推定されるものである。いずれの土壌にも多量の礫石が含まれ、あたかも充填されるようであった。

これらのことから、古墳と2条の溝址との関係は、墳丘開削にともなって掘削された、溝址および土壌群であり、古墳址よりも新しいものと判断された。

周溝覆土上層には、天仁元（1108）年噴出の浅間山系B軽石が混在することから、少なくとも該期頃には、周溝はおおかた埋没を完了していたものと思われる。外側の第4号溝址にA軽石が観察されているが、純層状の堆積でなく均

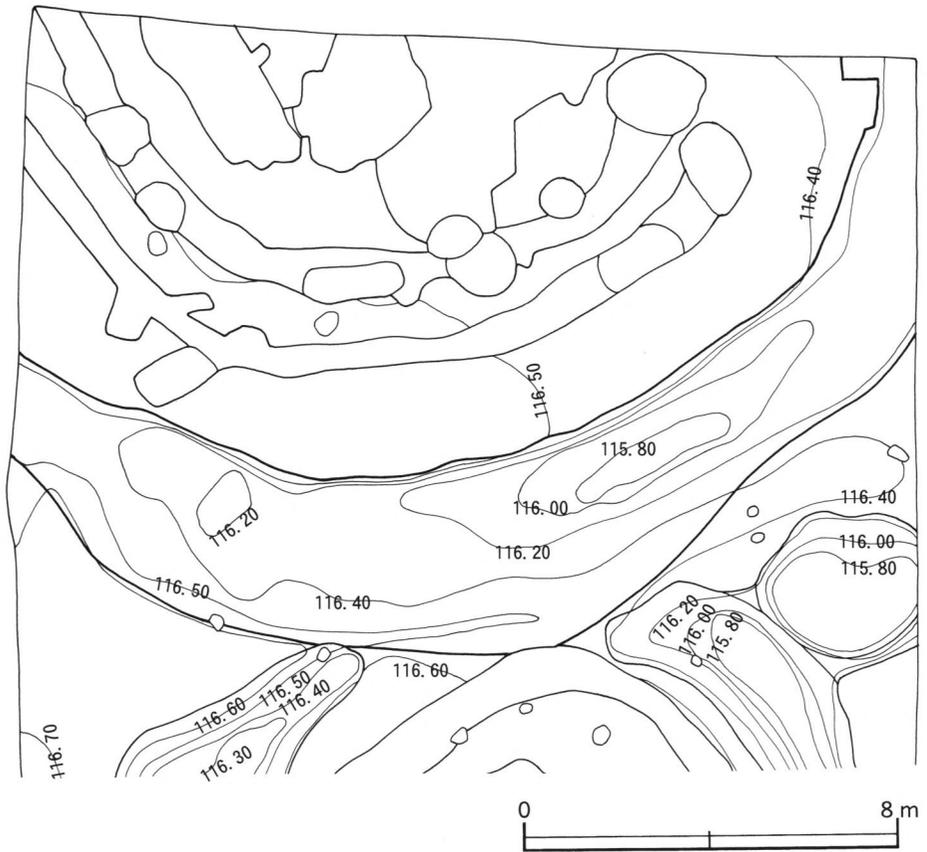


第9図 村後地区第1号古墳址平面図

質に混在することから、天明3（1781）年の爆裂降灰後、一定期間の後に掘削されたものと思われる。このことから、第4号溝址から内側の墳丘部分は、天明3年以降一定期間存在していたものと推定される。この2つのテフラの降灰の時期差はおよそ600年である。周溝内側立ち上がりから第4号溝址までの距離は約4mを測る。この部分に盛土が存在したか、あるいはテラス状であったかは明らかにしえないが、盛土が存在した場合、墳丘は約600年の長きにわたり、徐々に減じていった状況が推定され、この間は比較的安定していた環境下にあったことが予想される。

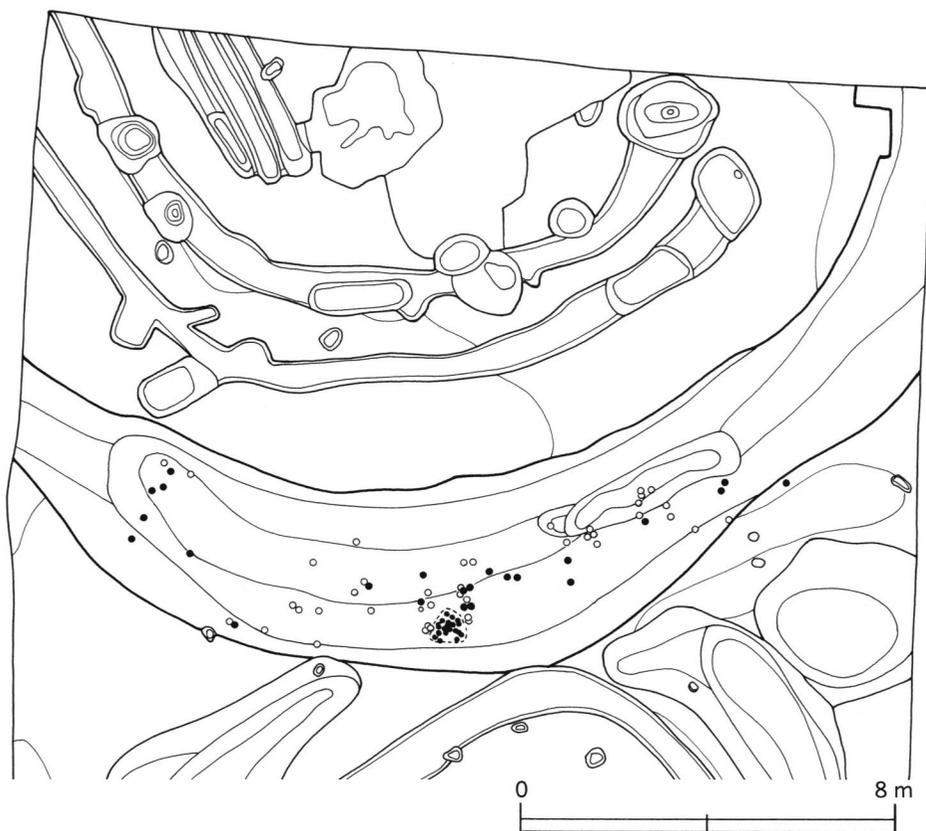
墳丘部分はすでに述べたような状態であり、石室・羨道および前庭部、葺石等の企画を示す根石等のもとより、墳丘下に存在していたと思われる、古墳時代代表土層も遺存しなかった。

検出された周溝は、土層観察の結果、掘り形埋め戻しによる底面が存在する部分があることが判明した。SPD—D'ラインにおける土層観察では、覆土下層のロームブロックを主体とする土層中に黒褐色土と明茶褐色土が確認された。主体土であるロームブロックは、大きなもので6cm前後であり、かつ未風化の



第10図 村後地区第1号古墳址等高線図

状態であった。また、この層の底面は面状をなすものではなく、層の厚さは、A-A'ラインは25cm、C-C'ラインは24cm、D-D'ラインは30cm、E-E'ラインは15cmと不均質なものであった。これらの各観察位置における、層の上面での標高は、A-A'ラインは116.50m前後、C-C'ラインは116.20m前後、D-D'ラインは116.30m前後、E-E'ラインは116.40m前後となる。確認面における標高は、西側壁、D-1グリッドで116.60m、調査区北東のB-2グリッドで116.40mを測り、南西から北東へと約20cmの比高さをもって緩やかに傾斜している。この傾斜方向にあわせ、セクションラインを高位から低位に並べ替えると、A-A'E-E'D-D'C-C'の順となる。同様にローム主体土層上面の標高を示すと、116.50m、116.40m、116.30m、116.20mとなり、自然傾斜に同調するように傾斜を取ることがわかる。これらのことから、この土層は一度掘削されたものが自然地形にそった形になるように、おそらく古墳時代地表面から一定の深さになるように埋め戻されたものと判断される。また、ロームを主体とする土層は、他土層の混在が極めて少ないことから、掘削され



第11図 村後地区第1号古墳址遺物出土状況図

た土層が周溝外に掘り揚げられたと仮定した場合、他の土層と混ざらないような状況にあったと推定される。本址では墳丘盛土や側壁裏込め土との検討は、墳丘部分喪失のため行うことが出来ない。しかし、墳丘部分の構築と周溝掘削といった作業工程や構築材料としての土層、また空間的な作業域や構築材料の管理を考える上で示唆的であるといえよう。

なお、C-4・5、D-4・5グリッドにわたる周溝底面には、他に比較して顕著に深い部位が認められた。この部分の落ち込みは、周溝に平行し、長さ4.5 m、幅約1 mの規模であり、周溝内土壌の可能性が考慮された。しかし、覆土は周辺部分と同様に、ロームブロックを主体とするものであり、その他の土層の顕著な混入が見られないこと、該期の遺物が検出されなかったことから、掘り形であると判断された。このような落ち込み状の掘削部位や、掘り形の深さの不規則性から、周溝掘削における掘削単位が看取され、複数人員による個別の掘削、あるいは複数小集団による従事が推定される。

周溝覆土は、下位の埋め戻し土を除き、自然堆積土であった。D-D'、E-E'ラインにおける土層観察では、周溝立ち上がり部分の崩落土の他は、周溝

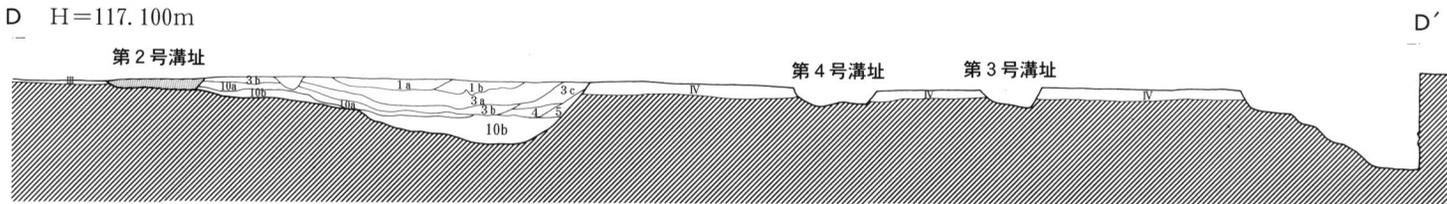
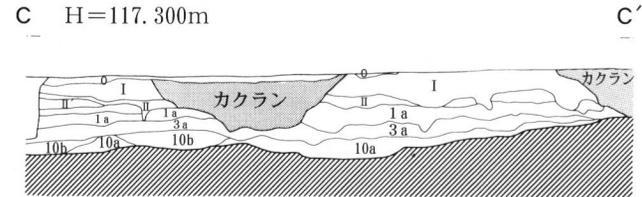
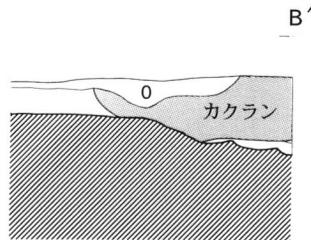
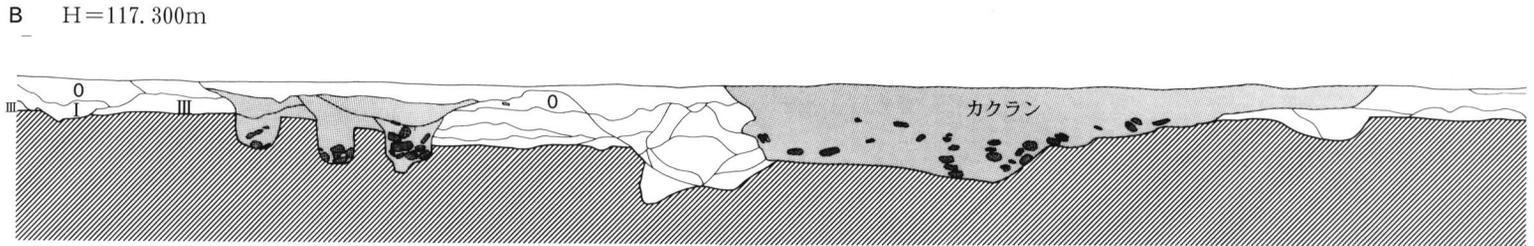
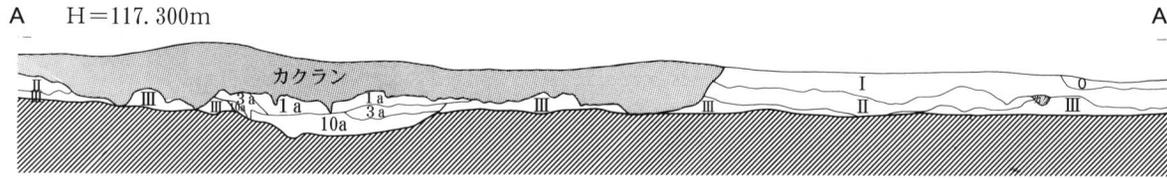
内・外側の、両方向からの流入土で被覆されていた。これらの土層は、堆積の角度が緩やかであること、土層の明確な変換点がみられず、漸移的变化を示すことから、徐々に埋没していったものと考えられる。

検出された周溝の規模は、D-D'ラインにおいて、立ち上がり幅3.5～4m、底部幅2mを測り、内側の立ち上がり角度はやや急であるのに対して、外側は緩やかな傾向が指摘できる。調査区西側の周溝幅はやや狭いものであるが、これは自然傾斜上高位にあたることと、経年の傾斜の均質化と耕作深度の関係から周溝立ち上がり上部が消失したものであり、周溝掘削時においては旧表面との関係において一定の深さを維持したものであったと思われる。

周溝内側立ち上がりの角度は、掘削の後の崩落による安定角度への進行を考慮しても、ある一定角度を意識し、掘削されたものと思われる。この周溝から墳丘規模を推定すると、周溝内側直径約24mに、周溝外縁では直径約30m前後に復元される。

本址は他の古墳周溝との明確な重複関係にはない。しかし、2号古墳址とは、覆土上部で重複していたものと思われる。E-E'ラインにおいて行った土層観察では、明確な重複関係を観察できなかった。しかし、両古墳址の形態に注目すると、第1号址の周溝は、弧を描いて完結している。これに対し、第2号古墳址の周溝は、第1号古墳址周溝の手前で掘削を終了し、円弧として完結していない。このことから、第2号古墳址周溝掘削時には、第1号古墳址周溝は埋没した状態ではなく、視覚的に認知出来る形態を保持した周溝として、すでに存在していたものと推定される。すなわち第1号古墳址周溝は、第2号古墳址に先行して存在していたために、この部分の第2号址周溝掘削はなされなかったものと判断される。また、両古墳址の周溝は、共通した一連の覆土によって被覆されることから、ある期間、共に存在していたものであり、さほど時期をおかずに、順次構築されていったものと思われる。

周溝内からは、数点の普通円筒埴輪片、少量の縄紋土器片および礫石が検出されている。分布の範囲は主に南側を中心に出土した。また、墳丘中央の攪乱部分から、少量の普通円筒埴輪片および形象埴輪片が検出されている。これらの遺物の出土状況からは、樹立されていた埴輪が周溝内に倒れ込んだ状況は認めることはできない。本址墳丘部分が全く遺存せず、また墳丘外縁部の埴輪埋置のための掘り込み等は確認できなかったため、埴輪を伴っていたことを比定しえないが、埴輪が樹立されていた可能性は低いと考えられる。



E H=117.100m

E'

第2号古墳址周溝



第12図 村後地区第1号古墳址周溝セクション図

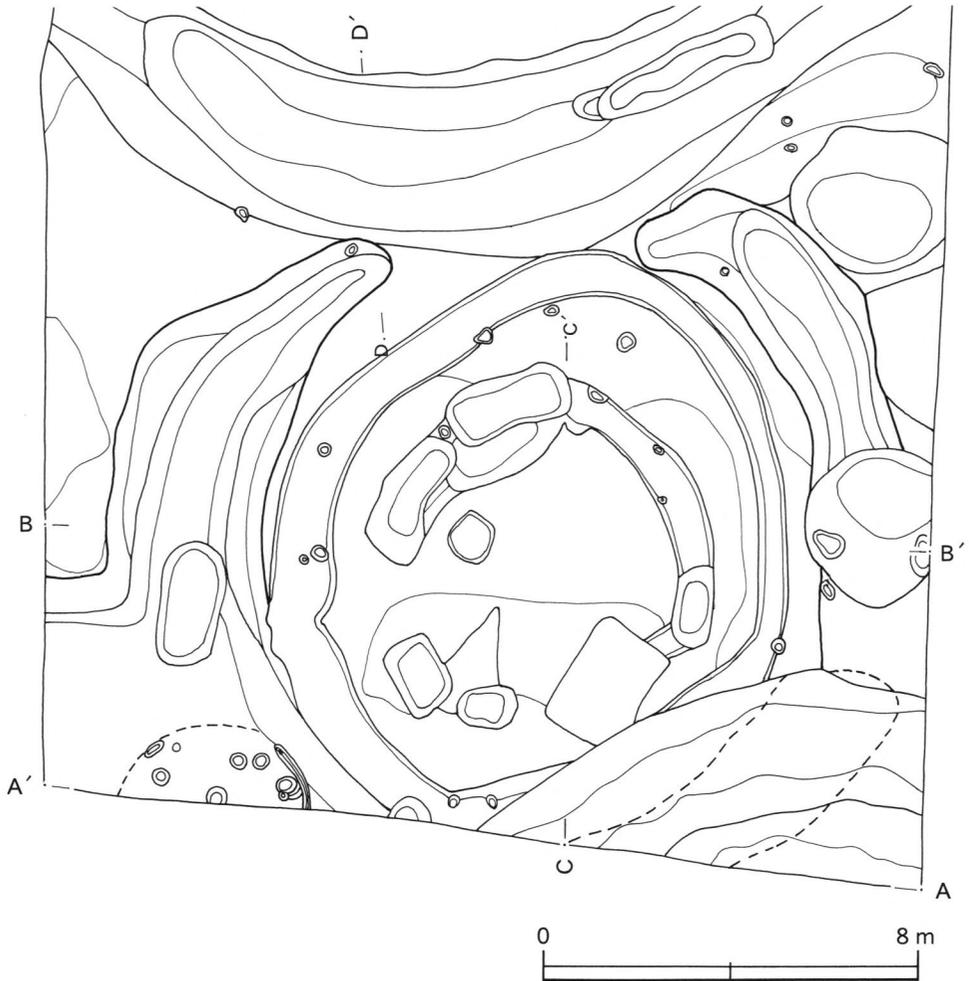
長沖古墳群村後地区 第1号古墳址周溝土層説明

- 第1a層 黒褐色土 黒褐色土を主体にし、ローム粒子(～1mm)を少量含む。黒褐色土中には淡橙褐色粒子(～0.5mm)〈浅間山系B軽石〉が少量含まれる。しまりはやや硬く、粘性は弱い。
- 第1b層 淡黒褐色土 黒褐色土を主体にし、ローム粒子(～3mm)を少量含む。黒褐色土中には淡橙褐色粒子(～0.5mm)〈浅間山系B軽石〉が微量含まれる。しまりはやや硬く、粘性は弱い。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 第2a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土を微量、ローム粒子(～5mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第2b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土を微量、ローム粒子(～5mm)を微量含む。第2層に比べ、色調がやや明るい。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第3a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)・ローム小塊(～3cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 第3b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 第3c層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)・ローム小塊(～2cm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 第3d層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性
- 第4層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム小塊(～1cm)を微量含む。しまりは硬く、粘性は高い。
- 第5層 黄茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.1mm)を多量に、ローム粒(～1mm)を少量含む。しまりは軟かく、粘性は弱い。
- 第6a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第6b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土を微量、ローム粒子(～5mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第7a層 茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土を微量、ローム粒子(～2mm)を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第7b層 暗黄茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒(～1.5cm)・ローム粒子(～2mm)を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第8a層 暗黄茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土を微量、ローム粒子(～2mm)を中量含む。第8層に比べローム小塊がやや多い。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。第9層→第5層に統合
- 第8b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム小塊(～3cm)を少量含む。層中には鉄分凝集粒が観察される。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第9層 黄褐色土 ローム小塊(～6cm)を主体とし、暗黒褐色土を小塊状に微量含む。しまりは硬く、粘性はやや弱い。
- 第10a層 黄茶褐色土 ローム小塊(～3cm)・ローム粒(～3mm)を主体とし、明茶褐色土粒子を少量含む。ローム小塊間には暗赤褐色の鉄分凝集粒の発達が見られる。しまりは硬く、粘性有り。
- 第10b層 黄褐色土 ローム小塊(～6cm)・ローム粒(～3mm)を主体とし、明茶褐色土粒子を微量量含む。しまりは硬く、粘性有り。
- 第11層 黄褐色土 ローム小塊(～5cm)を主体とする。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。
- 第12層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子(～5mm)を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや弱い。

第2号古墳址（第13～16図 図版4-1・2、5-1・2）

本址もまた第1号古墳址と同様に、未周知のものであり、本調査によってその存在が明らかにされたものである。

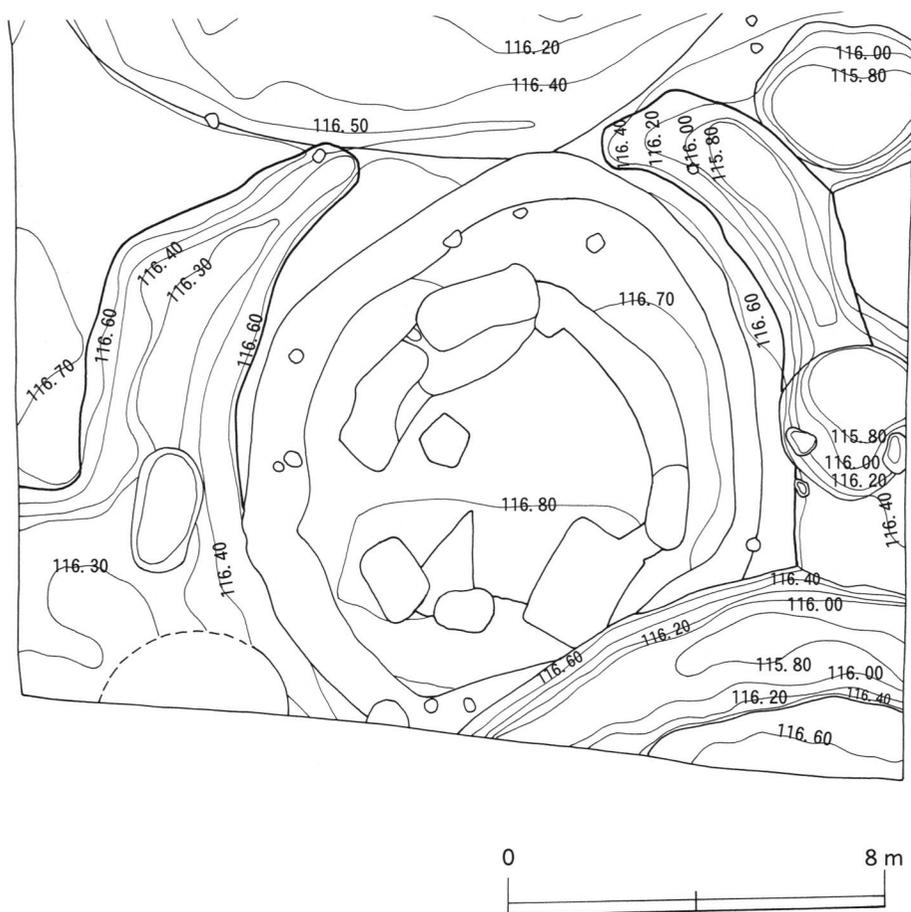
本古墳址は調査区南半に検出された。周溝部分のみ検出され、墳丘部分は完全に削平されていて、石室・羨道および前庭部等の企画を示す根石は遺存しなかった。墳丘部には周溝に沿うように、同心円状の溝が2条巡っている。外側に巡る第2号溝址の覆土は、黒褐色土・暗茶褐色土・ロームブロックが斑状に混在する、浅間山系A軽石を含まないものであった。内側に巡る第1号溝址の覆土はA軽石を多量に含む暗灰褐色土であった（基本層第I層）。このうち第1号溝址は、より新しい土壌が複数重複していた。これらの土壌は平面長方形であり鋤状の工具による掘削痕が観察された。これらの溝址および土壌群は古墳開削に伴って掘削されたものである。



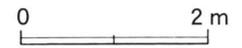
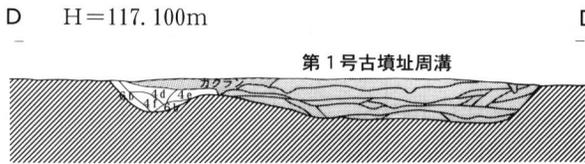
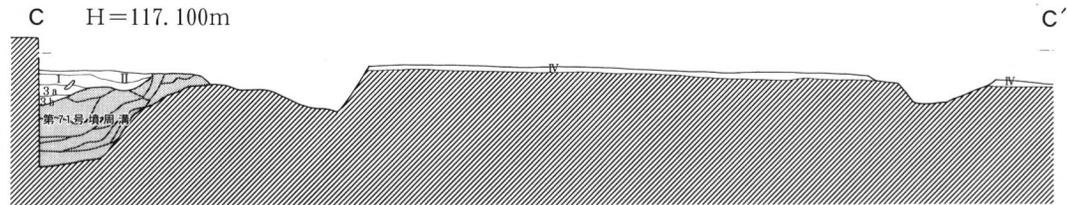
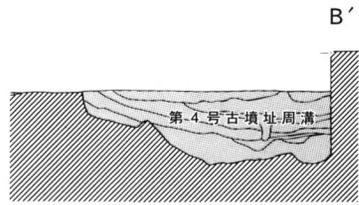
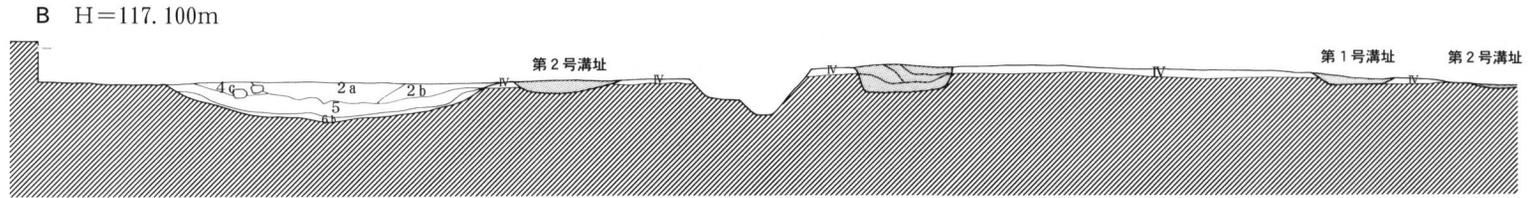
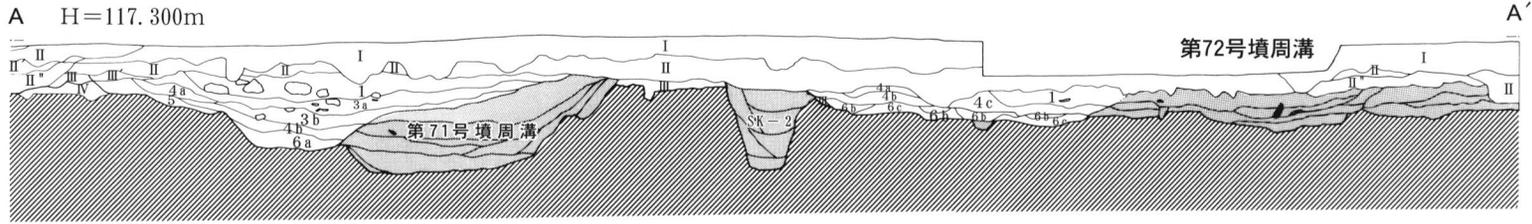
第13図 村後地区第2号古墳址平面図

第2号溝址の覆土には、浅間山系A軽石は含まれまいことから、少なくともA軽石降灰以前には、周溝内側立ち上がりから0.6～1.2mの範囲においては、ある程度平坦な面状を呈していたものと推定される。この部分に墳丘がおよんでいたか、テラス状であったかは、本址では明らかにしえない。しかし、周溝内から検出された多量の礫石に注目すれば、墳丘外縁に巡る葺き石の存在が推定されるものである。

この第2号溝址の覆土は、黒褐色土・暗茶褐色土、ロームブロックから構成される。これらの土層は、墳丘盛土からの流入と、第2号溝址掘削時の掘りあがった土層の再流入とが考えられる。古墳の盛土を覆土の供給源とすれば、盛土の土層構成を示すものとして捉えることができる。そして、本溝址のより内側に、古墳の開削がおよぶにあたり、墳丘盛土によって本址が埋没したものと考えられる。一方、第2号溝址掘削土の再流入とすれば、黒褐色土は墳丘下に遺存していた旧表土と捉えることができ、本址の墳丘盛土が、この付近まで存在していたことを示すものとして捉えることができる。



第14図 村後地区第2号古墳址等高線図



第15図 村後地区第2号古墳址周溝セクション図

村後地区第2号古墳址周溝土層説明

- 第1層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗褐色土を少量含む。層中には浅間山系B軽石（淡橙褐色粒子・～0.5mm）を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性なし。
- 第2a層 暗褐色土 暗茶褐色土を主体とし、暗灰褐色土を中量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 第2b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、暗灰褐色土を少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 第3a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土小塊（～3cm）を少量斑状に、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性なし。
- 第3b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土小塊（～1cm）を微量含む。しまりはやや硬く、粘性なし。
- 第4a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。黒褐色土は含まれず、色調が第3a層土にくらべて暗い。しまりはやや硬く、粘性なし。
- 第4b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性なし。
- 第4c層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とするが、ローム粒子（～0.1mm）・ローム小粒（～8mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性なし。
- 第4d層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム小塊（～4cm）を微量、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。
- 第4e層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム小塊（～3cm）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第4f層 暗灰茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性低い。
- 第5層 明茶褐色土 暗茶褐色土と明褐色土が混在する層。しまりは普通で、粘性なし。
- 第6a層 黄褐色土 ロームブロック（～5cm）・ローム粒子（～2mm）を主体とする。しまりはやや硬く、粘性やや高い。
- 第6b層 明茶褐色土 ロームブロック（～5cm）・ローム粒子（～2mm）を主体とし、明褐色土を少量含む。しまりは硬く、粘性は低い。
- 第6c層 明茶褐色土 ロームブロック（～5cm）・ローム粒子（～2mm）を主体とし、明褐色土を中量含む。しまりは硬く、粘性は低い。

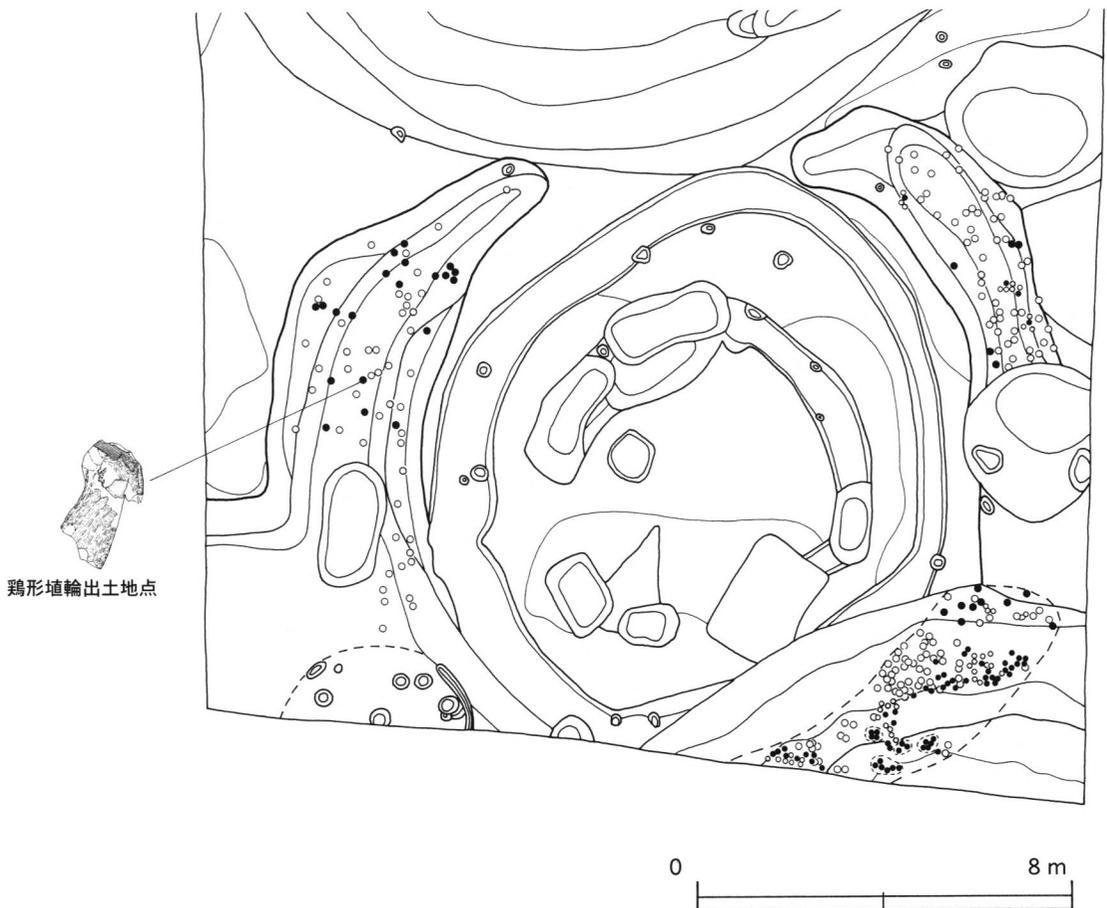
第2号古墳址周溝底面にも、第1号古墳址同様に、ロームブロックを主体とする土層が観察された。この土層中にも他土層の混入が、すべてではないものの認められた。この層の厚さは、A-A'ライン東側が18cm、西側は17cm、D-D'ラインは18cmであった。これらの観察位置における、層の上面での標高は、A-A'ライン東側は116.30m前後、西側は116.50m、D-D'ラインは116.30m前後となる。確認面における標高は、第2号古墳址墳丘下、F-3・4グリッドで116.80m、第1号古墳址墳丘下、C-4グリッドで116.50mを測り、南北方向においては、南から北へと約30cmの比高さをもって緩やかに傾斜している。また、東西方向における確認面標高は西壁F-1グリッドで116.70m、東壁D-6グリッドで116.40mを測り、西から東へと傾斜している。この傾斜方向にあわせ、セクションラインを高位から低位に並べ替えると、A-A'（西側）、A-A'（東側）、D-D'の順となる。各観察地点のローム主体土層上面の標高を、同様の順序で示すと、116.50m、116.30m、116.30mとなり、ほぼ自然の傾斜に沿っていることがわかる。本址においては、ローム主体土層の良好な観察点が少ないものの、やはり第1号古墳址周溝と同様に、一時的に荒掘りし、一定面となるように埋め戻されたものと判断される。

周溝の覆土は、上層の黒褐色土に浅間山系B軽石が観察される。このことから、本址周溝は、天仁元（1108）年頃にはほぼ埋没していたものと思われる。黒褐色土下の暗茶褐色土を主体とする土層は、旧表土、基盤層土およびその風化物により細分されるものである。また各層の堆積状態からも、周溝の人為的な埋め戻しは認められない。

検出された周溝のプランは、他の古墳址・古墳周溝との関係から一連のものではない。西側は、第1号古墳址周溝付近において幅が狭くなっている。B-B'ラインにおける立ち上がり幅3.6m、底部幅1.5mを測る。東側の周溝は、やはり第1号古墳址周溝付近で幅が狭くなるが、西側に対してその規模は小さいことが指摘できよう。周溝立ち上がりの角度は西側においては緩やかに底面へとつづき、明確な変換点を有さない。これに対し東側の立ち上がりは、角度を持ち、底面への変換も明確である。周溝から墳丘規模を推定すると、周溝内側での推定直径12.5m、周溝外縁直径16～19mに復元される。

本址周溝は、第4号古墳址周溝、第71号墳周溝、および第72号墳周溝と重複関係にある。これらの周溝との切り合い関係をみると、本址周溝は第71・72号墳周溝を切って掘削されており、また、第4号古墳址周溝は本址周溝を切って掘削されている。第1号古墳址周溝とは、確認面においては直接の重複関係にない。しかし、第1号古墳址の項で述べたように、本址は、第1号古墳址に後出すると判断されるものである。

周溝内における該期の遺物は、G-4・5、H-4・5グリッドに集中し、普通円筒・朝顔形・形象埴輪片が検出された。出土状態は、破片状のものを主体とし、多量の礫石に混在していた。これらの遺物は、周溝覆土上位第1・3a層に集中し、層中位から下位にかけては検出されなかった。E-5グリッド周辺では、覆土上位の黒褐色土層に、多量の礫石が検出され、少量の埴輪片破片が検出された。E・F-2グリッド周辺から出土した遺物は、礫石と縄紋土器片がほとんどであったが、F-2グリッドでは、鶏形埴輪頭部片が単独で検出されている。また、墳丘内に掘削された第1号溝址からも少量の埴輪片が検出されている。これら多量の礫石は、本址墳丘部から流入したものである。また、G-4・5、H-4・5グリッド出土の埴輪片は、第71号墳周溝部分検出の埴輪片と、胎土、焼成・刷毛目等から、同一固体ないし同工程による製作の一群と判断されるものである。したがって、出土位置および出土状態から、本址には埴輪は樹立されなかった可能性が高く、G-4・5、H-4・5グリッドの遺物は、第71号墳に帰属していたもの、として捉えておきたい。



第16図 村後地区第2号古墳址周溝内遺物出土状況図

第2号古墳址周溝内出土遺物（第17～23図 図版4-2、5-1・2、6、7-1・2）

ここで示す普通円筒埴輪、朝顔形埴輪および形象埴輪は、本址周溝のG-4・5、H-4・5グリッドから検出されたものである。鶏形埴輪は、F-2グリッドから検出されている。この鶏形埴輪は、頭部のみが検出され、胴部および基部の破片は検出されなかった。

検出された遺物のうち、主体を占めているのは普通円筒埴輪である。全容を図示できたものは1点、胴部以下が4点である。拓影図に示したものは、調整・焼成等から、実測遺物と別個体と判断されるものと、底部を中心に掲載した。

これらの資料は、器外面の調整から、縦位刷毛目（第17図1～4、第21図6・7）、条線の見られない板状工具による縦位調整（第17図5、第20図3・4・5、第21図8・9・10・11）、棒状の工具により縦位調整し、のちに縦ナデを施すもの（第19図1・2、）が認められる。ただし、第22図11は、底部付近に横位の刷毛目が施されている。破片点数は、縦位刷毛目のものが大半を占めている。

棒状工具による器外面調整の個体は、底部破片が同定できず判断できないが、底部資料の大半には7～13mmの棒状圧痕が複数観察される。この圧痕は剥離材を兼用する台の役割を果たすものと思われる。圧痕のあり方は、複数の棒状圧痕が平行するものが交差するものと、複数の棒状圧痕が平行に並ぶのものが認められる。交差するものは、少なくとも、一旦は棒状の仮台から離れた後に、角度を異にして据えられたことが推定される。

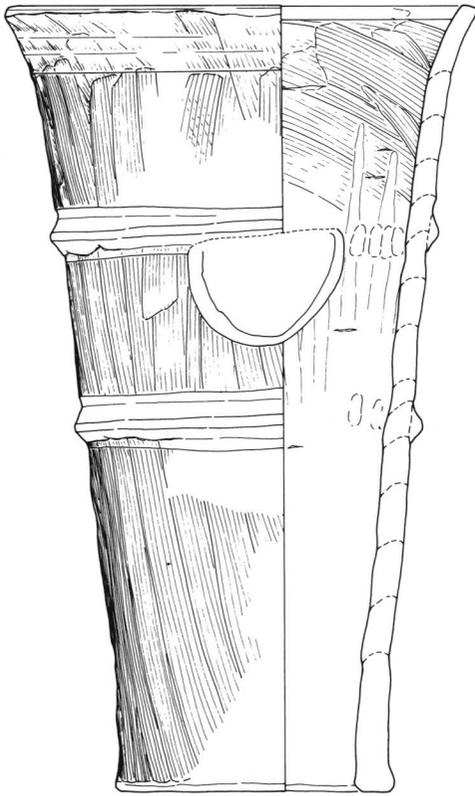
器内面の調整は、第17図2および第21図6は底部まで刷毛を施しているが、他は縦位か、垂直に近い斜位のナデである。第20図3・4のナデ調整は雑であり、輪積み痕が複数箇所において観察される。

凸帯は、第17図2および第22図14は台形状を呈するが、他は断面三角状を呈する。透孔は「□」字状を呈するが、第二凸帯下位を切り込むもの（第17図1・2・4）と、第一凸帯上位にかかるもの（第17図3・5）、両凸帯におよぶもの（第20図5）が認められる。

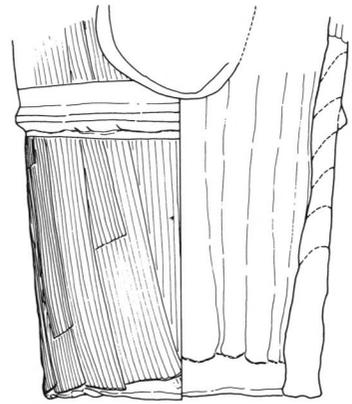
底部調整に関しては、底部器外面板叩き・板押圧調整、器内面板押圧、および刀子・ヘラ削り調整がなされているものは含まれていない。

胎土中には片岩粒、石英粒、鉄斑粒、角閃石粒、雲母粒が観察された。白色針状物質については第21図8、第22図12の破片には観察されなかった。しかし、12については胎土、調整が第22図13と酷似することから、完形個体においては白色針状物質が含まれていた可能性が高いものである。

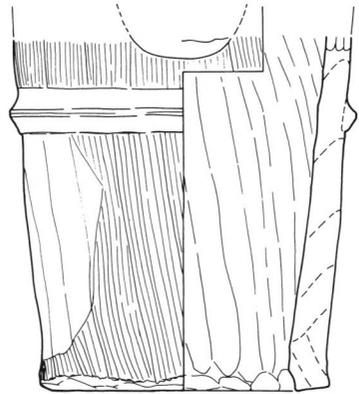
ヘラ描きは「X」字状（第18図6、第22図13）と、「人」字状（第20図3）、「入」字状（第17図1、第19図2）が認められる。特に「入」字状のものは、器外面調整の異なる個体に共通して施されている点で注目される。



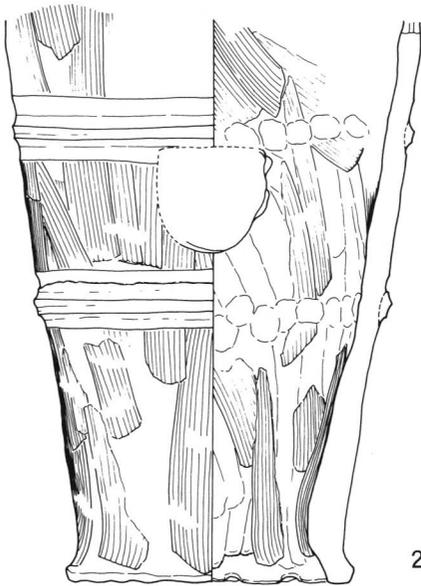
1



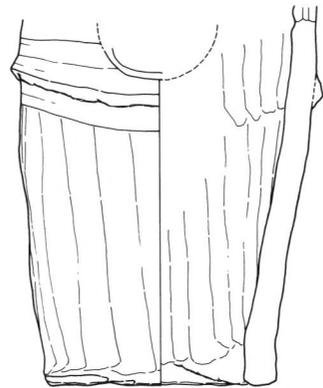
3



4



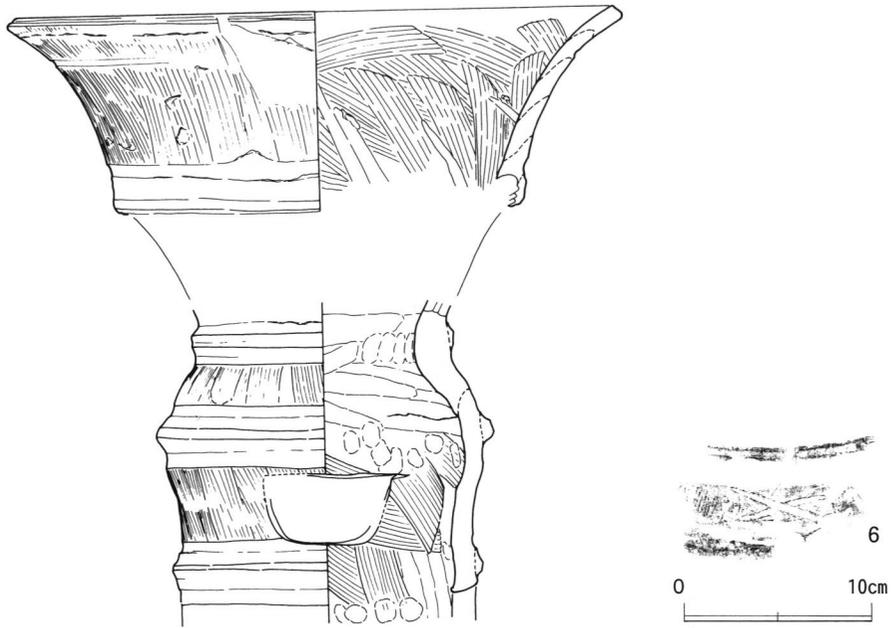
2



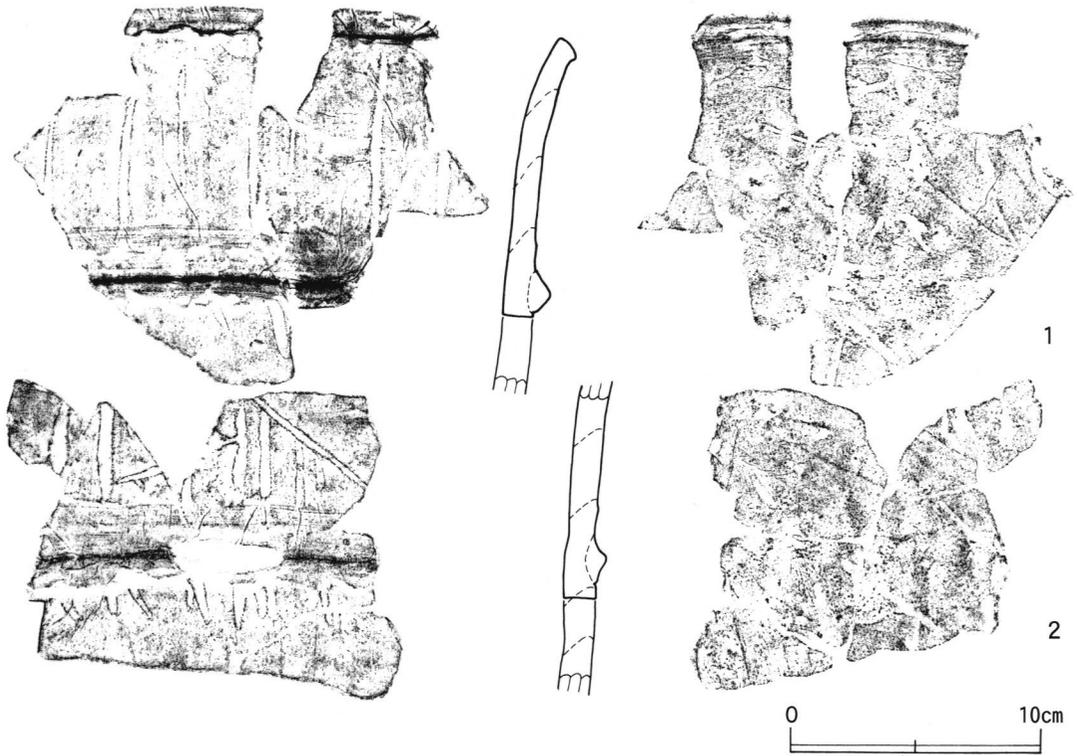
5

0 10cm

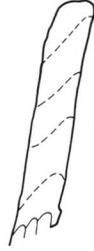
第17图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物実測図(1)



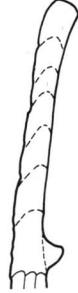
第18图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物実測図(2)



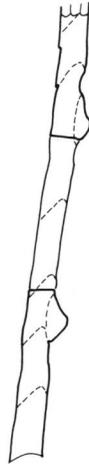
第19图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物拓影図(1)



3



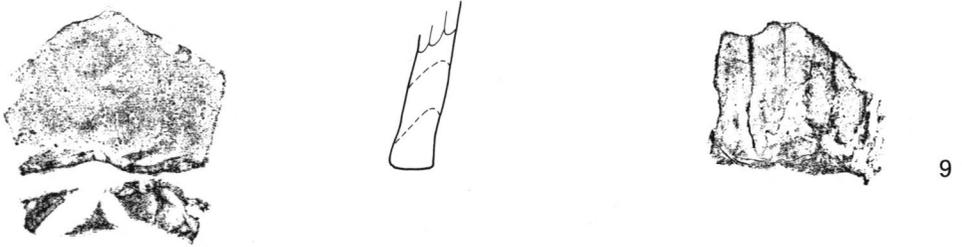
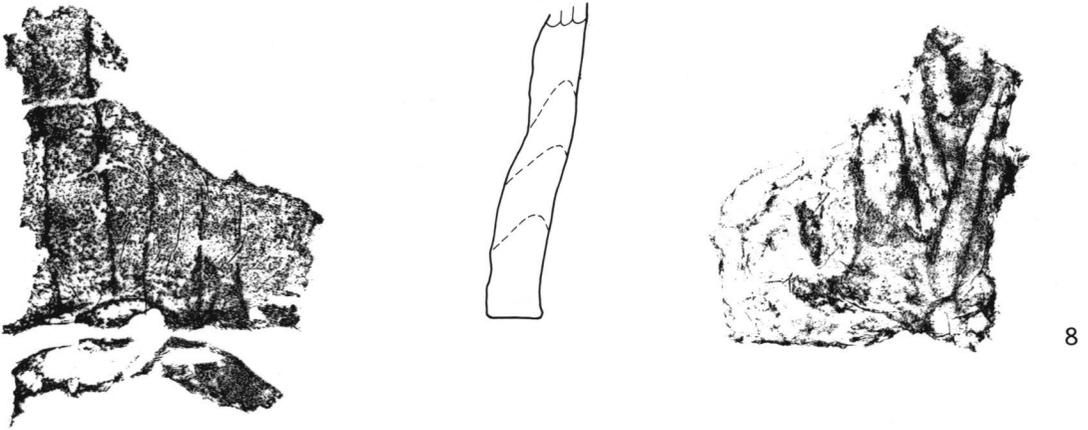
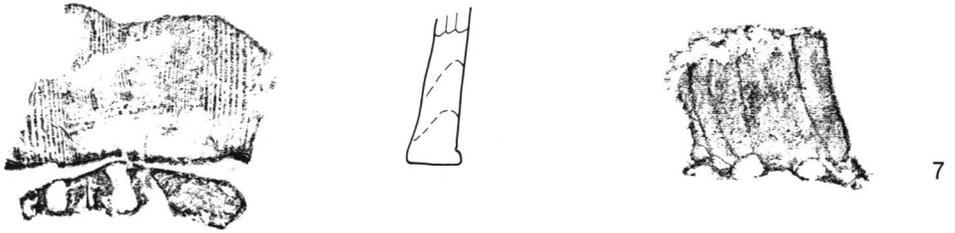
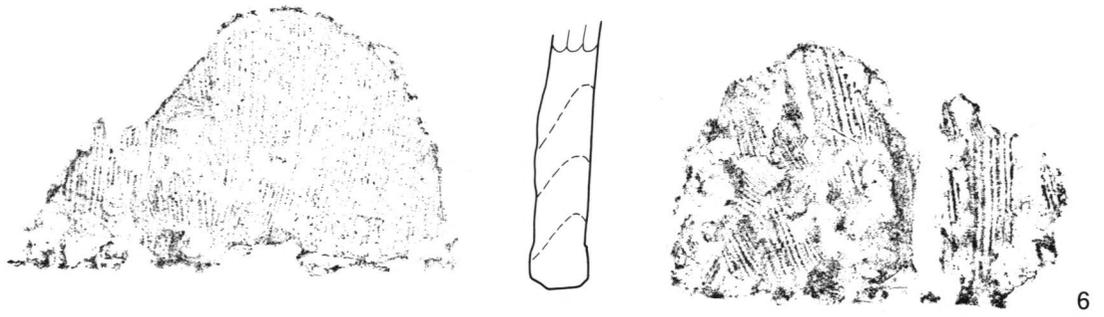
4



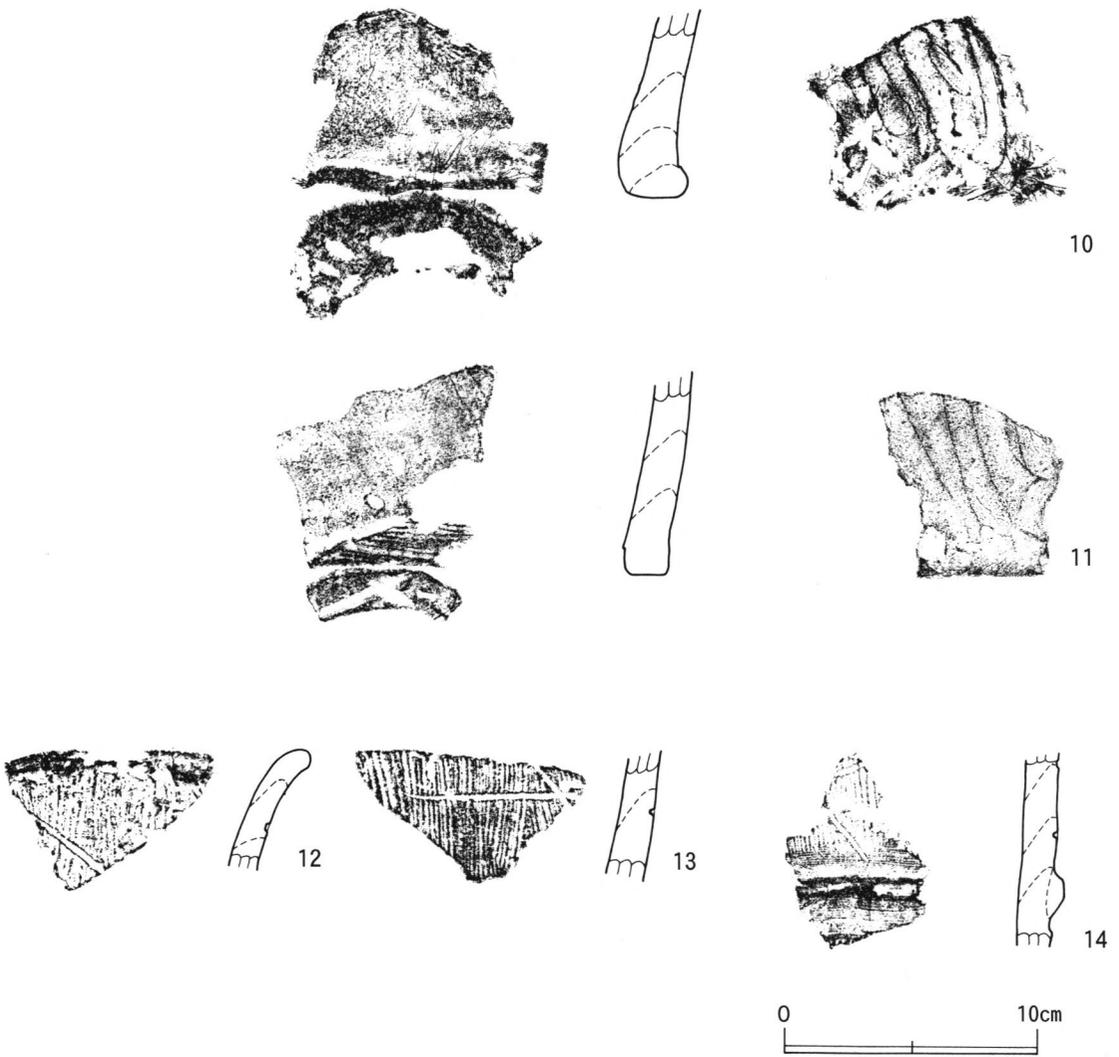
5



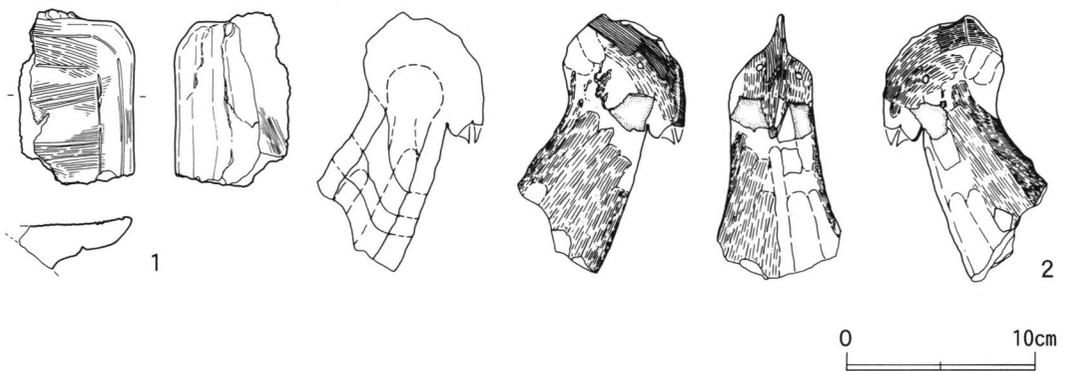
第20图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物拓影图(2)



第21图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物拓影図(3)



第22图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物拓影図(4)



第23图 村後地区第2号古墳址周溝内出土遺物実測図(3)

朝顔形埴輪は、口縁部とくびれ部が同一個体と思われる資料を復元図化した。

口縁部は大きく外反し口唇端部は凹線状に窪んでいる。段を異にする「□」字状の透孔が90°の角度を違えて二孔一对に穿孔されるものか。凸帯断面は台形状を呈する。くびれ部直下の段に「X」字状のヘラ描きがある。器外面調整は、口唇部は横ナデ、口縁部および胴部は縦位刷毛目施されている。器内面調整は、口縁部は斜位刷毛目、くびれ部下位はナデ、胴部は斜位の刷毛目を施している。胎土は普通円筒埴輪と同様であり、白色針状物質も微量観察される。

第23図1は、形象埴輪片である。緩やかな弧を描く方形の板状器体で、裏面に円筒状の剥落痕が認められる。表面は刷毛目調整の後、器体短部に沿って二条の沈線を施している。裏面はナデ調整である。胎土中には片岩粒、石英粒、鉄斑粒、角閃石粒、雲母粒、微量の白色針状物質が観察された。

第23図2は鶏形埴輪である。頸部より上位のみが残存し、残存高は14.1cm、最大幅は6.6cmを測る。頸部は中空で、内面には螺旋状の接合帯が規則的に観察されるため、粘土紐巻き上げにより成形されている。粘土紐は、不正円形を呈し、絞り込み整形がなされている。器内面には指による強いナデが見られる。

鶏冠は、胎土を摘み上げて造形するが、表現は省略されている。鶏冠上部の一部を欠損する。赤彩はなく、両側面には横位のハケメが施されている。

眼は刺突によって表現され、胎土を貫通している。眼部の直径は、0.4~0.5cmを測る。眼の位置は左右非対称に穿たれている。

両目より少し下部に、四角形状の剥落痕が認められ、肉髯が付着していたことが看取できる。

耳孔と耳たぶ、及び鼻孔は表現を省略している。嘴は先端を欠損する。嘴の両側面には沈線が刻まれ、嘴の上下が表現されている。

器外面は、縦方向にハケメを施して表面を調整している。大部分は、弱い押圧を伴うハケメであるが、後頭部（背面）は、ケズリ気味のハケメが施されている。このハケメは、全体的に装飾のためではなく、表面の調整のために施されたものと思われる。ただし、正面右側だけは指ナデによりハケメ調整が消されており、これが頸部に関する最終調整と考えられる。

色調は、やや暗めの橙褐色。胎土は海綿骨針、結晶片岩（雲母）、石英、酸化鉄粒（シャモット）を含む。焼成はおおむね良好である。

本資料は、鶏が首を左側にかしげている様相を模っていると考えられる。鶏冠の誇張された表現、丸みを帯びた顔、肉髯から、かなり写実的であり、弥生時代以来、わが国に渡来していたであろう地鶏のオスをモデルにしたものと考えておきたい。

（西田親史）

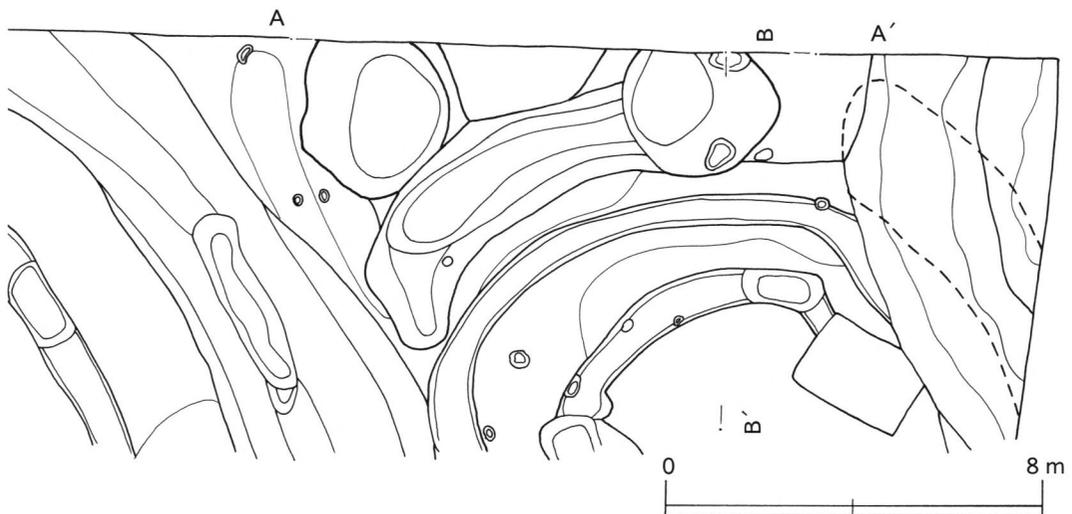
第4号古墳址（第24～28図 図版8-1・2、9-1・2、10-1・2、）

調査当時本址周溝は、調査区南東に近接して遺存している長沖第70号墳のものと考えられ、掘り残された部分は同古墳に付帯する、張り出し状の施設として捉えられていた。本報告に際し、全測図と墳丘測量図とを再検討したところ、掘り残しの部位は、第70号墳に付帯するものとしては、距離および角度等から不自然であることが判明した。このことから第2号古墳址と第70号墳との間に、小規模な円墳がもう1基存在するとの結論に達したものである。

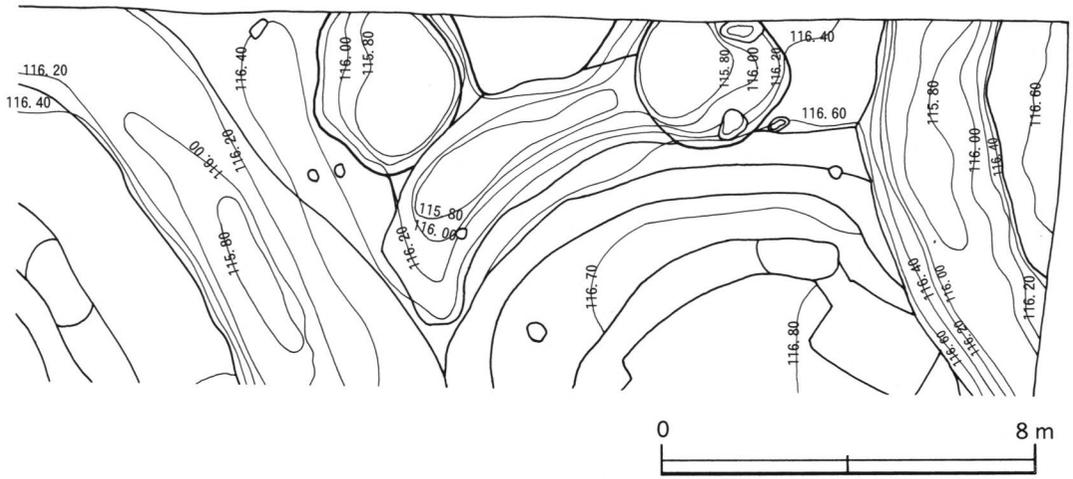
呼称については報告書刊行の都合上、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第234集「長沖古墳群」（大谷他、1999）所載の、村後地区における新規発見古墳址に、すでに村後地区第3号古墳址と付しているため、本址を村後地区第4号古墳址とした。

本址は調査区東側、D-5・E-5・F-5グリッドに検出された。第2号古墳址周溝と、これに重複・接続させた周溝を距離をおいて掘削することにより、張り出し状の掘り残し部分を形成している。この掘り残し部の平面プランは、西側の辺が狭く、東側が広がってゆく、やや不整な台形状を呈している。周溝立ち上がりが角度をもつため、立面的には方台状を呈している。調査区東側に展開すると推定される墳丘部は、現状では平坦面となっている。

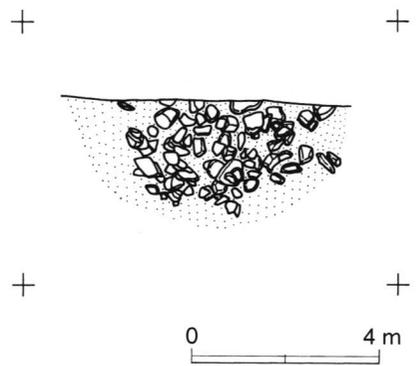
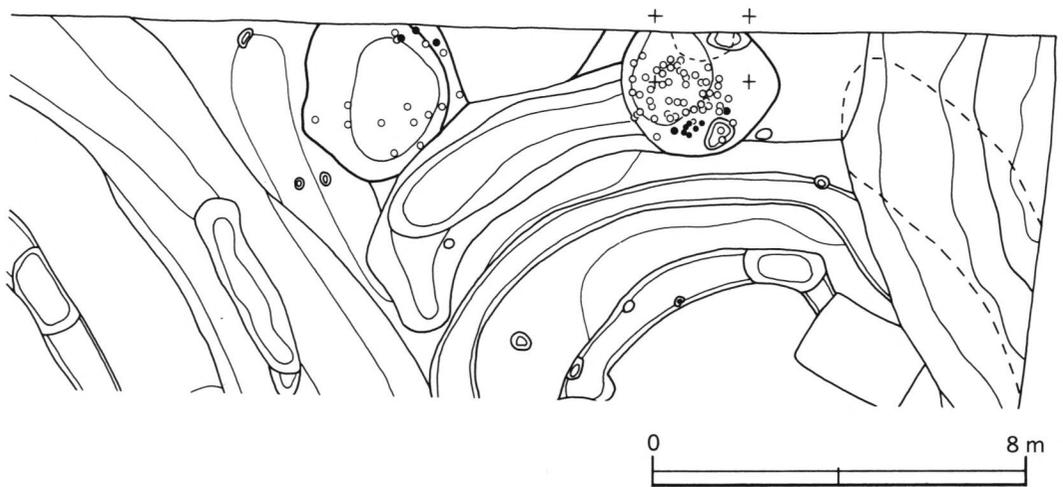
南側周溝の掘削は、第2号址周溝底面を約40cm掘下げており、第2号址周溝の立ち上がりは観察されなかった。北側周溝の上面プランは、第2号古墳址と接続しているが、幅35cmのテラスを介し、さらにそれぞれ約20cm掘削し、底部は独立した形となっている。また第2号址周溝は、この部分のみが深くなっている。これらの底面は、他土層が混在するロームブロック主体土層によって平



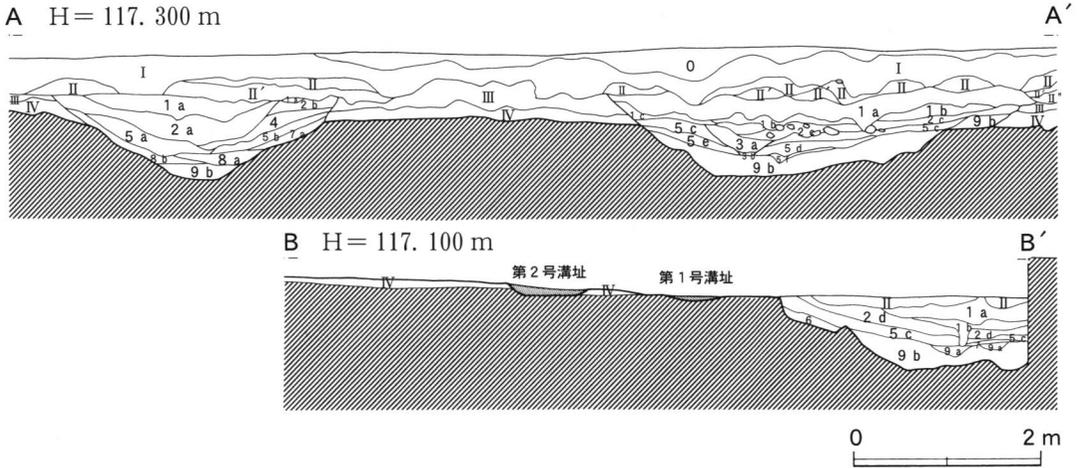
第24図 村後地区第4号古墳址平面図



第25図 村後地区第4号古墳址等高線図



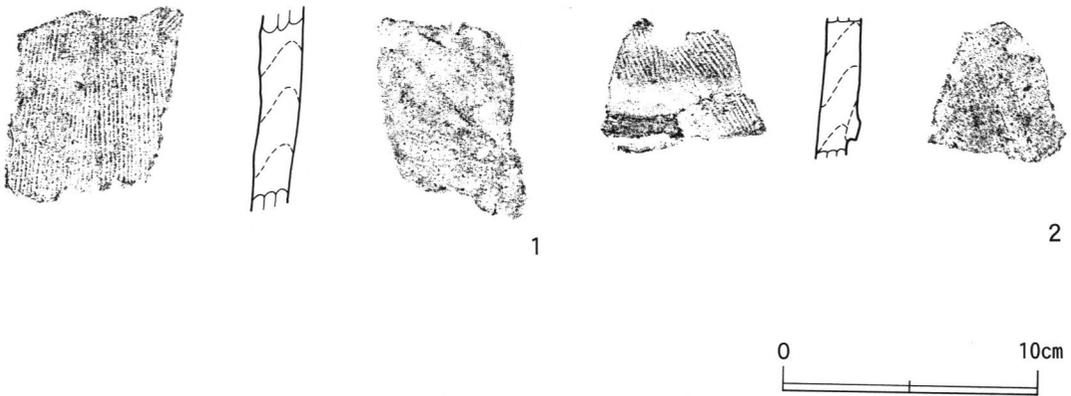
第26図 村後地区第4号古墳址周溝内遺物出土状況図



第27図 村後地区第4号古墳址周溝セクション図

坦になるように被覆されていた。このため、第4号古墳址は第2号址に後続するものと考えられ、第2号址周溝の第4号古墳址に接する部分は、第4号古墳址周溝掘削に際し、再掘削されたものと考えられる。

壁断面の観察から、北側周溝覆土中位には、人為的な掘削か、この時点における未埋没の窪地かの判断をしかねる、落ち込み状の堆積が観察された（第3 a層）。落ち込み部分の覆土は、ローム粒子を多量に含む、暗茶褐色土層であり、下位には旧表土層に相当する黒褐色土の混在が見られた（第3 b層）。南側周溝第2 b層には、多量の礫石とともに、5～15cmの被熱した礫石・焼土粒子および炭化物粒子の集中が見られた。この部分には、明確な被熱面は形成されていないこと、またその堆積状態が周溝外側からの流入した状態を示すことから、周辺からの流入あるいは、投棄されたものと考えられる。また、この層からは、近接する第2号古墳址および第71号墳周溝内出土の普通円筒埴輪とは、調整・胎土から別の個体と判断される普通円筒埴輪の破片が検出されている。



第28図 村後地区第4号古墳址周溝内出土遺物拓影図

長沖古墳群村後地区 第4号古墳址周溝土層説明

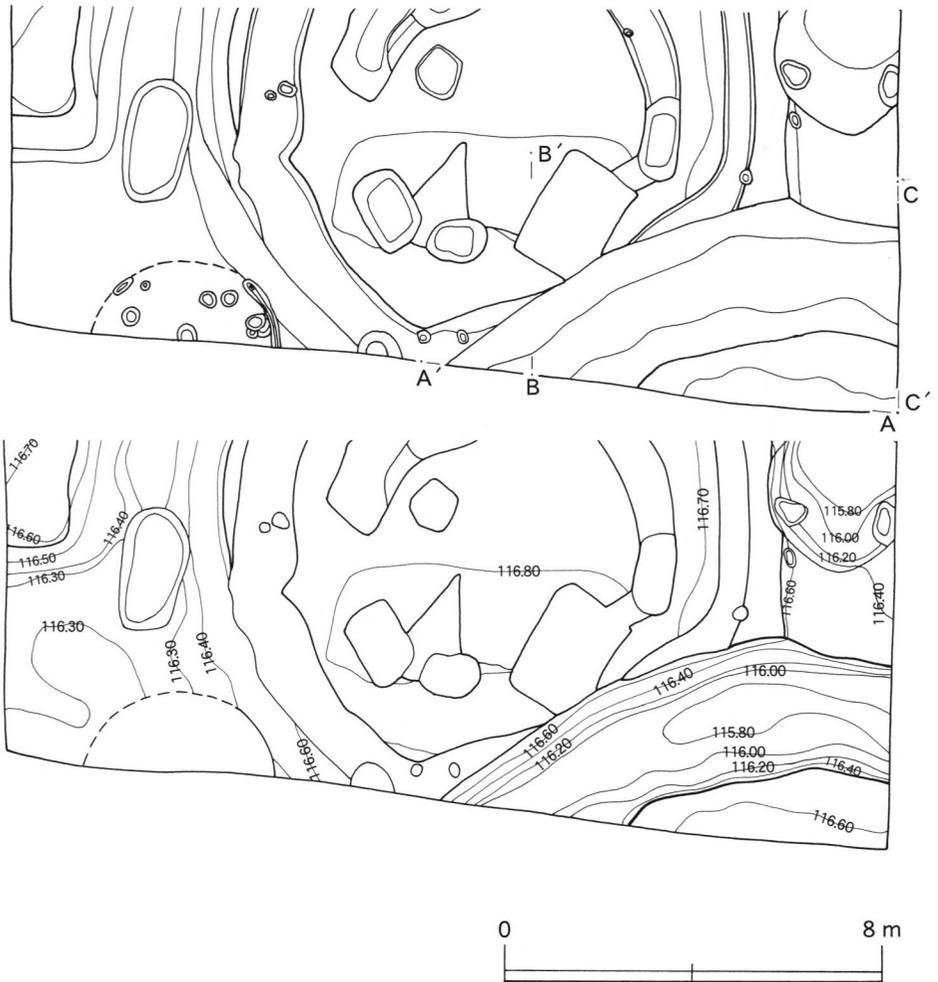
- 第1a層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉を中量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第1b層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土を中量斑状に、淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第1c層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土を少量、淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第2a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、層上位に淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉・ローム粒子（～1mm）を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第2b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、層上位に淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉を微量、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第2c層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子を中量、淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第2d層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子を中量、淡橙褐色粒子（～0.5mm）〈浅間山系B軽石〉を微量（東西ベルト層上位のみ）、焼土粒子・炭化物粒子（～0.5mm）を少量含み、5～15cmの被熱した礫石の集中が観察される。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第3a層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を多量に、ローム粒（～1mm）・鉄分凝集粒（～1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第3b層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土・ローム小塊を斑状に混在する層。しまりはやや軟らかく、粘性弱い。
- 第4層 明褐色土 ローム粒子（～0.1mm）を主体とし、ローム小塊（～1cm）を中量、暗茶褐色土（第2a層土）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 第5a層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性は弱い。
- 第5b層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を中量・風化ローム小塊を少量含む。層中には鉄分凝集粒が微量観察される。しまりはやや硬く、粘性は弱い。
- 第5c層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を多量にローム粒（～1mm）を中量含む。鉄分凝集粒は観察されない。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第5d層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）・ローム粒（～2mm）を多量に含む。第5'層同様鉄分凝集粒は観察されない。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第5e層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）・ローム粒（～1mm）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第5f層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）・ローム粒（～1mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第6層 褐色土 明茶褐色土・黒褐色土が斑状に混在し、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～1.5cm）を微量含む。しまりは硬く、粘性やや有り。
- 第7a層 明黄褐色土 ローム粒子（～1mm）・ローム粒（～5mm）を主体とし、明茶褐色土を微量含む。層中には鉄分凝集粒が微量観察される。しまりは軟らかく、粘性有り。
- 第7b層 明黄褐色土 明茶褐色土・ローム粒子・ローム小塊・ローム塊がほぼ均質に混在する層。しまりは硬く粘性有り。
- 第8a層 暗褐色土 明茶褐色土・暗褐色土・風化ロームが小塊状に斑状に混在する層。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。
- 第8b層 暗褐色土 明茶褐色土・暗褐色土・風化ロームが小塊状に斑状に混在する層。第8層より風化ローム小塊がやや多い。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。
- 第9a層 黄茶褐色土 ローム小塊（～3cm）・ローム粒（～3mm）を主体とし、明茶褐色土粒子（～0.1mm）を微量含む。ローム小塊間には暗赤褐色の鉄分凝集粒の発達が見られる。しまりは硬く、粘性有り。塊がやや多い。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。
- 第9b層 黄茶褐色土 ローム小塊（～3cm）・ローム粒（～3mm）を主体とし、明茶褐色土粒子（～0.1mm）を少量含む。ローム小塊間には暗赤褐色の鉄分凝集粒の発達が見られる。しまりは硬く、粘性有り。

長沖古墳群第71号墳周溝（第29～31図 図版11--1・2、12--1・2、）

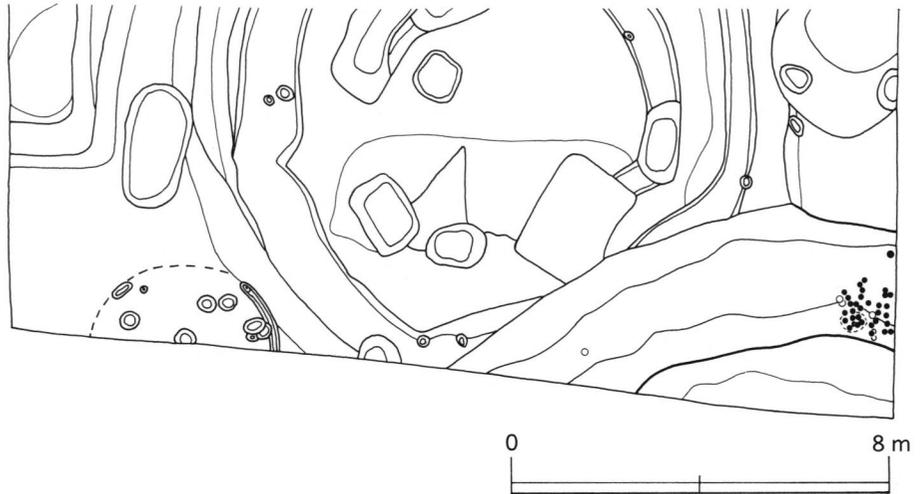
本址は、調査区南東のG-3～6グリッドに検出された。検出された部位は、第71号墳周溝の北西の一部に相当し、弧を描く一連のものである。また、第71号墳墳丘外縁部の一部も検出された。

墳丘外縁部は、幅0.9mのテラス状の段を有するものである。しかし土層観察から、この部位には同心円状の溝址が巡ることが判明した。この溝址の覆土は、微量の浅間山系A軽石を含む暗灰褐色土である。これらのことから、このテラス状の段は、溝址の掘削に伴って形成されたものであり、古墳築造時の形態を示すものではないと判断される。

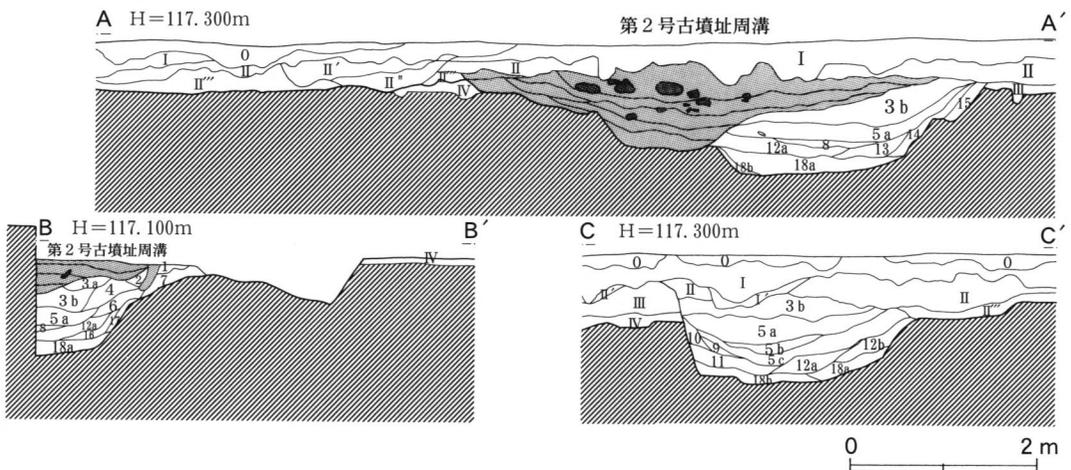
検出された周溝の規模は、確認面における立ち上がり幅2.5m、底部幅2(1.9)mを測る。周溝の断面形は、外側は直線的にやや角度をもって立ち上がり、内側は、張り出した弧を描くように立ち上がる。



第29図 長沖古墳群第71号墳周溝平面・等高線図



第30図 長沖古墳群第71号址周溝遺物出土状況図



第31図 長沖古墳群第71号址周溝セクション図

本址は第2号古墳址と重複関係にある。調査区南壁における土層観察では、本址周溝は大方埋没した後に、第2号古墳址周溝の掘削を受けている。このため第71号墳の築造は第2号古墳址に先行するものである。

周溝底面は、ロームブロックを主体とする層により被覆されていた。この層も他土層を含み、ロームブロックは未風化の状態であったことから、第1・2号古墳址と同様に埋め戻しの可能性が考えられる。

本址周溝部分から出土した埴輪は覆土上層の黒褐色土から検出されている。これら該期の遺物は第2号古墳址周溝部分にも分布していた。

検出された周溝から、第71号墳は周溝内側立ち上がり直径17m、周溝外縁直径22.5mの規模に復元される。

長沖古墳群第71号墳周溝土層説明

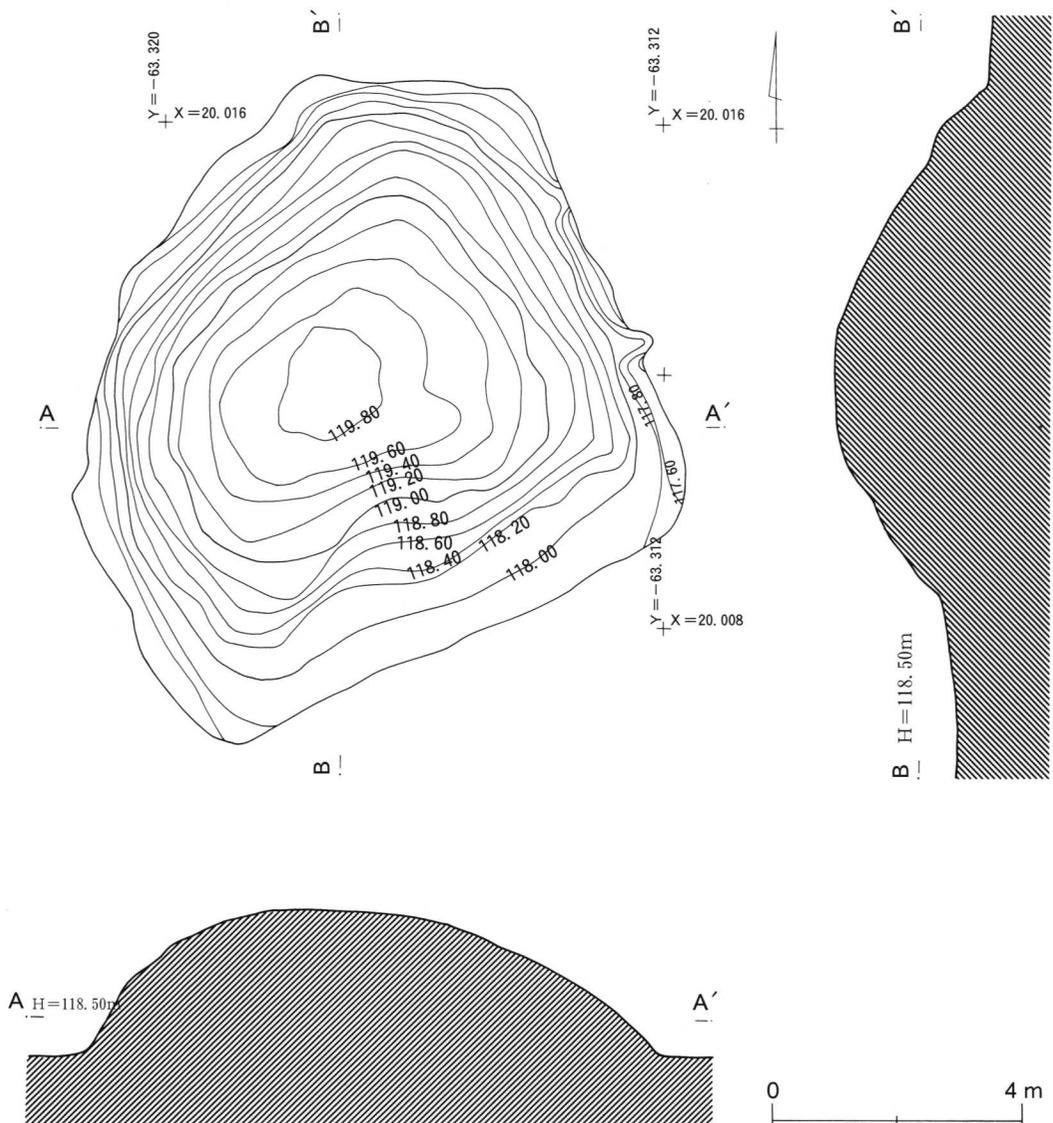
- 第1層 暗灰褐色土 暗灰褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは硬く粘性無し。
- 第2層 暗褐色土 暗灰褐色土を主体とし、風化ローム小塊を斑状に少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや有り。
- 第3a層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒子（～0.1mm）・焼土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 第3b層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、層上位に淡橙褐色粒子（～0.5mm）（浅間山系B軽石）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、灰褐色土粒子（～0.1mm）・ローム粒子（1mm～2mm）を少量含む。しまりは硬く、粘性やや有り。
- 第5a層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、浅間山系B軽石（～0.5mm）を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第5b層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を中量、浅間山系B軽石（～0.5mm）を微量含む。色調が第4層に比較しやや暗い。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第5c層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、浅間山系B軽石（～0.5mm）・風化ローム小塊を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第6層 黄褐色土 ローム粒子（～5mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第7層 黄褐色土 YPを含む風化ロームを主体とする再堆積層。しまりは軟らかく、粘性有り。
- 第8層 灰褐色土 灰褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは普通で、粘性無し。
- 第9層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、浅間山系B軽石（～0.5mm）を微量含む。色調は第5a層に比べやや暗い。しまりはやや硬く、粘性無し。
- 第10層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を多量に、ローム粒（～1mm）・鉄分凝集粒（～1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第11層 暗褐色土 黒褐色土・暗褐色土・風化ローム小塊（～1.5cm）が斑状に混在する。しまりはやや軟らかく、粘性は弱い。
- 第12a層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を多量に、ローム小塊（～1.5mm）を中量、ローム粒（～1mm）・鉄分凝集粒（～1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第12b層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を多量に、ローム粒（～1mm）・鉄分凝集粒（～1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第13層 明茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を多量に、ローム小塊（～1.5cm）・ローム粒（～1mm）を中量、鉄分凝集粒（～1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性は弱い。
- 第14層 明褐色土 明茶褐色土（第12a層土）を主体とし、YP粒子を含む明褐色土・暗褐色土明褐色土（基本層第IV層土）を少量斑状に含む。しまりはやや硬く、粘性弱い。
- 第15層 明褐色土 YP粒子を含む明褐色土・暗褐色土が小塊状に混在する層。基本土層第IV層土が風化したもので、各小塊の構成は粒子状を呈する。しまりは軟らかく、粘性は弱い。
- 第16層 暗茶褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）・黒褐色土粒子（～0.1mm）を多量に含む。しまりは普通で、粘性は弱い。
- 第17層 暗黄褐色土 ローム小塊（～6cm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を中量に含む。しまりは普通で、粘性は弱い。
- 第18a層 黄茶褐色土 ローム小塊（～3cm）・ローム粒（～3mm）を主体とし、明茶褐色土粒子（～0.1mm）を少量含む。ローム小塊間には暗赤褐色の鉄分凝集粒の発達が見られる。しまりは硬く、粘性有り。
- 第18b層 黄茶褐色土 ローム小塊（～3cm）・ローム粒（～3mm）を主体とし、明茶褐色土粒子（～0.1mm）を微量含む。ローム小塊間には暗赤褐色の鉄分凝集粒の発達が見られる。しまりは硬く、粘性有り。

長沖古墳群第71号墳の現況（第32図 図版11-1-2）

第71号墳は、本報告調査区の南東コーナーの南に位置している。

遺存状況は、東西最大幅9.8m、南北最大幅11.1m、現地表面からの高さは1.8mを測る。墳頂部標高は119.800mである。遺存する墳丘の平面形態は、北東および南東部分が直線状を、北西部分は弧状を呈する。南東部分は、隣地との境界となっており、この地籍にそって開削されたものである。弧状を呈する北西部分は、その規模は縮小しているものと予想されるが、本来の墳形を踏襲しているものと考えられる。断面形態は蒲鉾状である。

遺存している墳丘部分は、篠竹や低灌木が繁茂するため、墳丘盛土の崩壊・流失は見られず安定している。また、この墳丘部外縁には石垣状の施設は確認されず、石室の開口部分は確認されない。このため、横穴式石室の場合、墳丘の開削は控積に至っていないことが予想される。



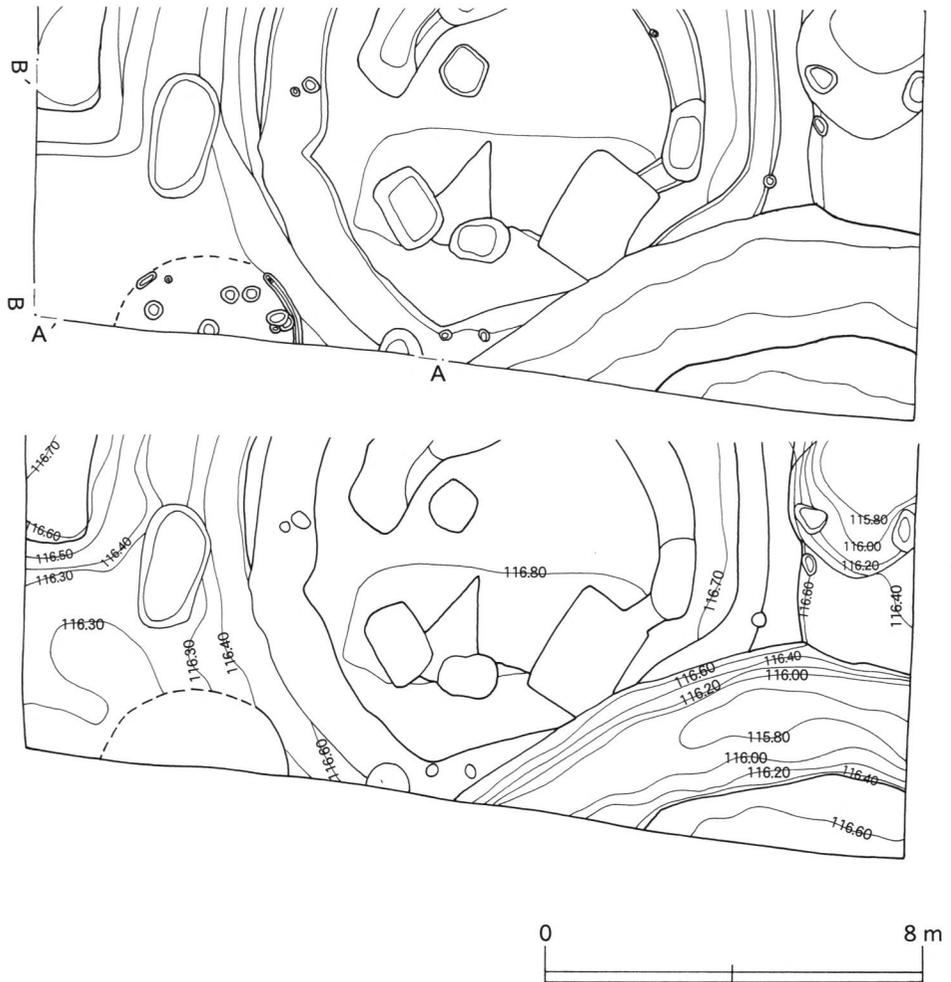
第32図 長沖古墳群第71号墳現況測量図

長沖古墳群第72号墳周溝（第33～35図 図版13-1・2）

本址は、調査区南西のF-1・2グリッドおよびG-1・2・3グリッドにかけて検出された。検出された部位は、第72号墳周溝の北東の一部に相当し、周溝内側の立ち上がりは検出されていない。

第2号古墳址および第71号墳周溝と重複するため、明確なプランとして捉えられるのは、F-1グリッドの周溝外縁の一部である。

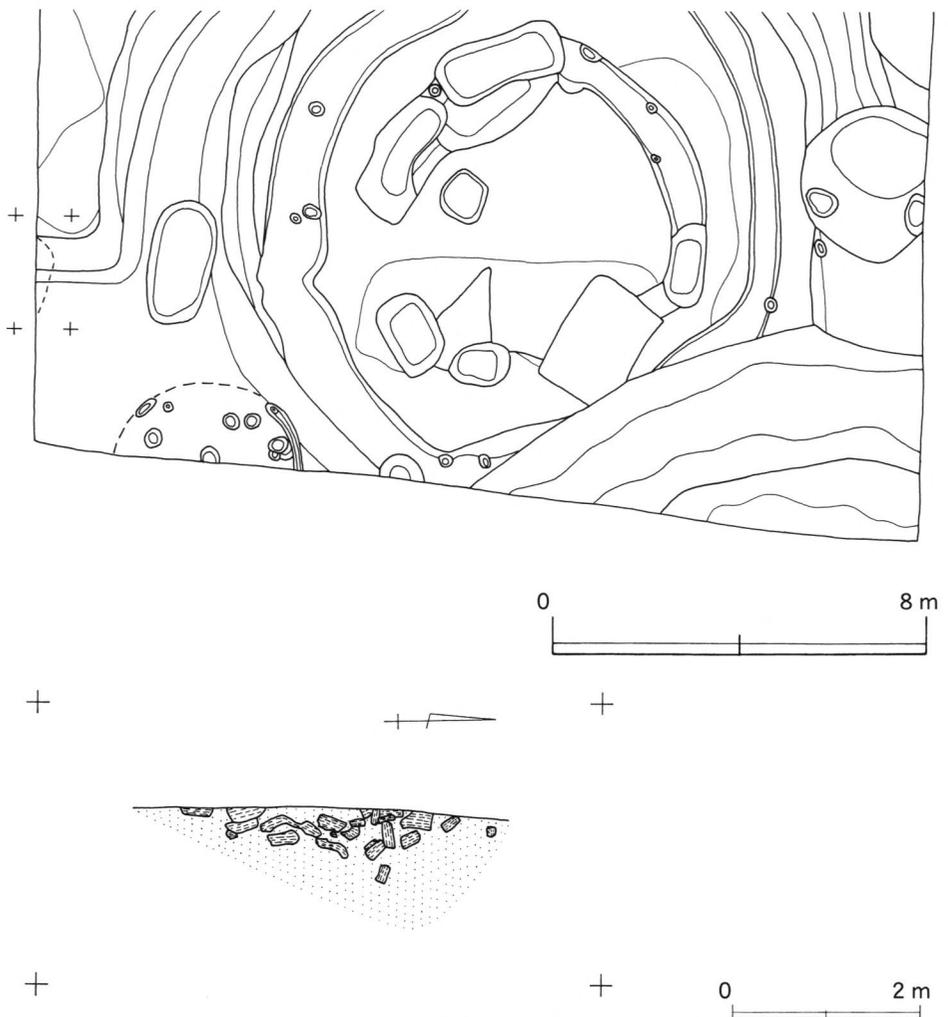
本址と第2号古墳址周溝覆土上位は、黒褐色土によっていずれも被覆されている。したがって両古墳周溝は、ある一定期間ともに存在していたものである。南壁における土層観察では、明確な切り合い関係を確認できなかった。しかし、後述する第72号墳墳丘周辺において、表面採集された埴輪片を考慮すれば、本址は第2号古墳址に先行する可能性が考えられる。



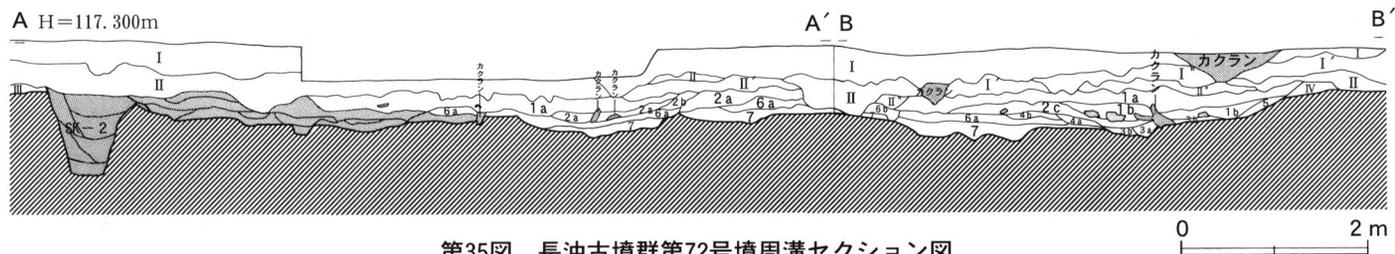
第33図 長沖古墳群第72号墳周溝平面・等高線図

周溝底部は、ロームブロックを主体とし、明茶褐色土を少量含む層が観察されている。この層の下面は、凹凸に富み、一定の平滑な面ではなかった。これに対し、層上面は、凹凸を相殺するように平滑な面をなしていた。このため、本周溝も、ローム主体土層により底面の整形がなされた事が考えられる。

周溝内から検出された遺物は、少量の縄紋土器片と炭化材である。炭化材は、G-1グリッド、調査区東壁にかかり、周溝外側立ち上がり寄りに集中していた。検出層位は、覆土中層の黒褐色土（第1b層）および暗褐色土（第2c層）である。第1b層には、炭化材・炭化物小塊・同粒子、焼土粒子が観察されたが、被熱面の形成は見られなかった。これらの状況から、周溝外側からの流入あるいは投棄が考えられる。火に関わる、周溝の外側からの流入あるいは投棄された遺物の在りかたは、第4号址周溝に共通するものであり、注目されよう。



第34図 長沖古墳群第72号墳周溝遺物出土状況図



第35図 長沖古墳群第72号墳周溝セクション図

長沖古墳群 第72号墳周溝土層説明

第1a層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗灰褐色土（第Ⅱ層）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性なし。

第1b層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、炭化物小塊（～2cm）・炭化物粒子（～1mm）を中量、炭化材（～25cm）・焼土粒子（～0.5mm）・ローム粒子（～2mm）を少量、焼土小粒（～5mm）を微量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。

第2a層 暗褐色土 暗褐色土を主体とするが、黒褐色土粒子（～1mm）・ローム粒子（～0.1mm）を少量含む。

第2b層 暗褐色土 第2a層に準ずるが、ローム小粒を微量含む。しまりは軟らかく、粘性なし。

第2c層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、炭化物小塊（～2cm）・炭化物粒子（～1mm）・ローム小塊（～2cm）・ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。

第3a層 明褐色土 明褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を中量、明茶褐色土を少量含む。しまりは硬く、粘性やや高い。

第3b層 明褐色土 明褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を中量含む。しまりは硬く、粘性やや高い。

第4a層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～2cm）・ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。

第4b層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。

第5層 明褐色土 暗褐色土・粒子状（～0.1mm）のローム土が斑状に混在し、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性なし。

第6a層 明褐色土 明褐色土を主体とし、ローム粒子（～2m）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。

第6b層 明褐色土 明褐色土を主体とし、暗褐色土・ローム粒子（～2m）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性無し。

第7層 明茶褐色土 ロームブロック（～5cm）・ローム粒子（～2mm）を主体とし、明褐色土を少量含む。しまりは硬く、粘性は低い。

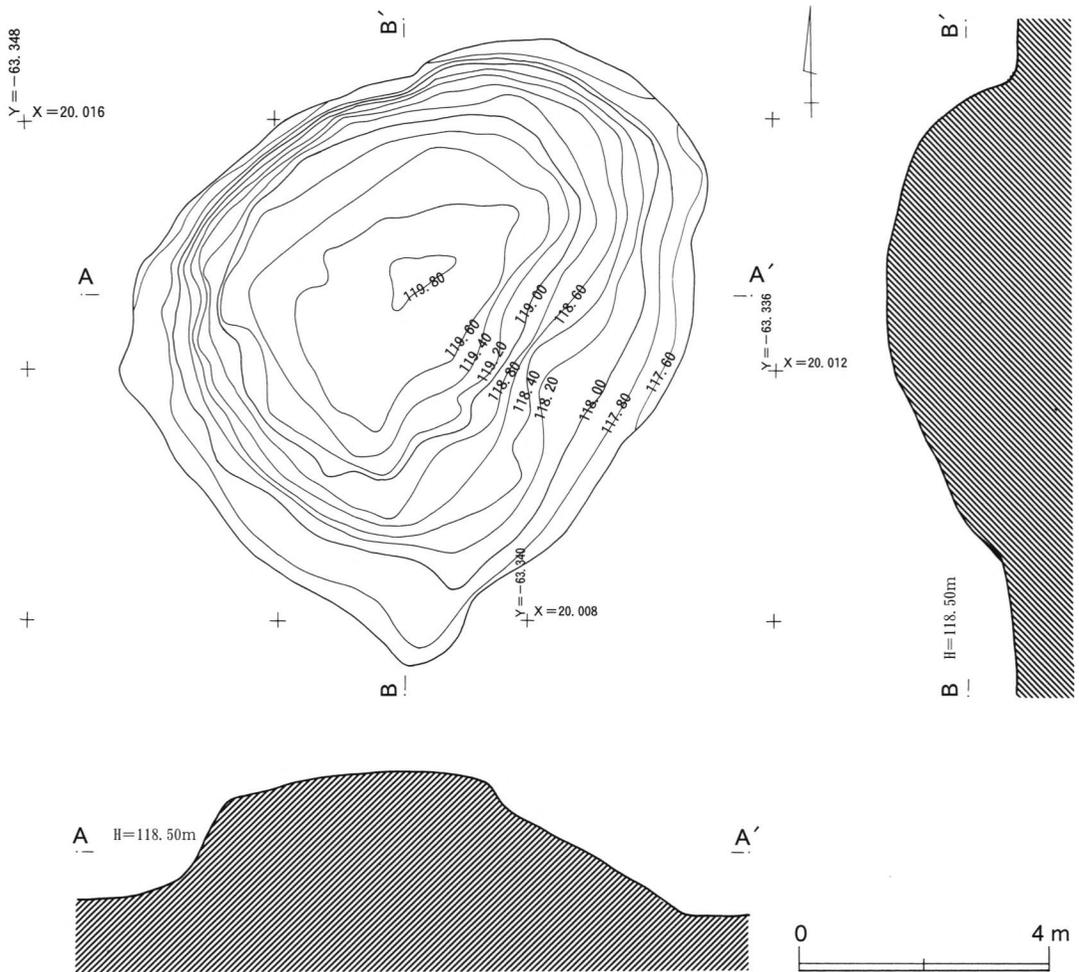
長沖古墳群第72号墳の現況（第36～37図）

本古墳は調査区の南西に位置している。

墳丘部分の現況は、東西最大幅9.5m、南北最大幅9mを測り、現地表面から2.1mほどの高さを保ち、墳頂部標高は118.800mである。

平面形態は、西から北側にかけては弧状を呈し、南西および南東部分は直線的である。この弧状の部分は、墳丘の流失ないし開削のため、その規模が縮小していたとしても、本墳墳形の遺制を留めているものと考えられる。断面形態は、東西方向は台形状、南北方向は蒲鉾状を呈する。

墳丘には篠竹や低灌木が繁茂していたが、墳丘南東部の一部は崩落し、石室内の空洞部が見える状態であった。このため、開口箇所を土嚢を充填・被覆し、現状保全につとめた。本墳丘周辺には、また普通円筒埴輪片の散布がみられた。



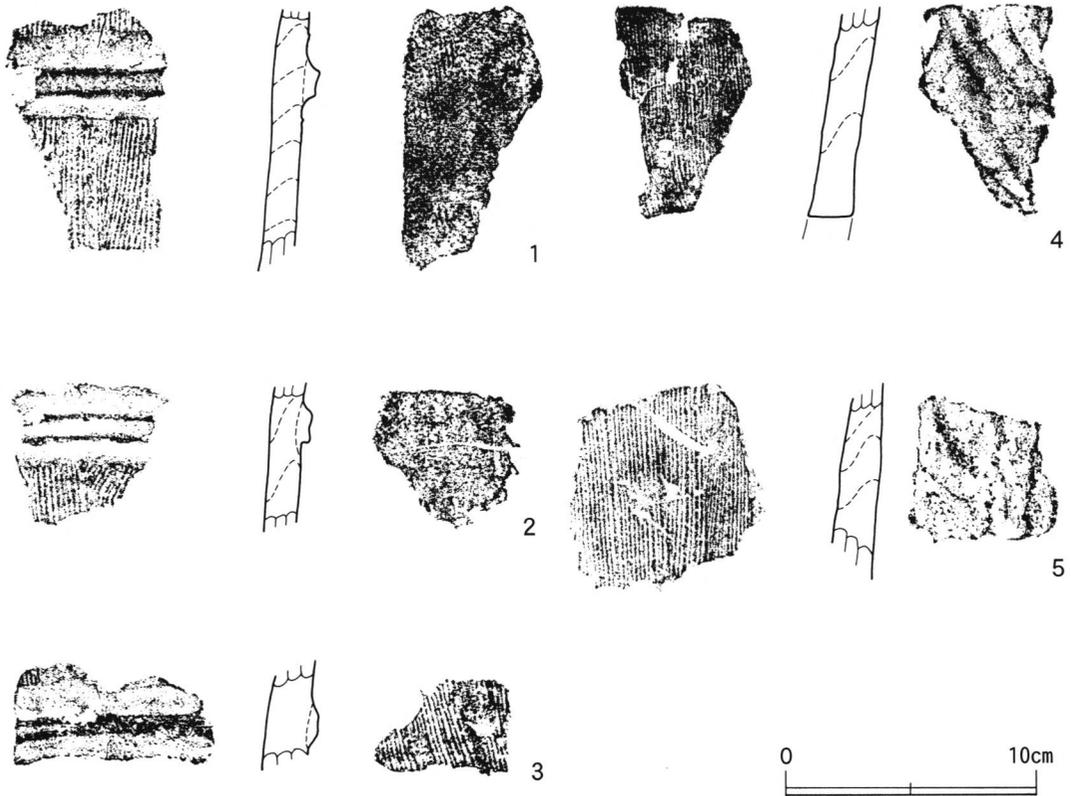
第36図 長沖古墳群第72号墳現況測量図

長沖古墳群第72号墳表採資料（第37図）

ここに示す普通円筒埴輪片は、遺存する第72号墳墳丘部周囲に散布していた資料である。この付近は平坦面であり、かつては畑として利用されていたようである。また、付近の地形や土壌の観察からは、他所からの搬入の可能性は低く、これらの資料は、第72号墳に伴う可能性が高いものと考えられる。

1～3は凸帯を有する部分である。1と2は、接合関係は見られないものの、凸帯の形態、刷毛目、焼成および色調から、同一個体あるいは同工品の可能性が高いものである。器外面調整は、縦位刷毛目を施し、後に凸帯部を横位にナデている。凸帯の断面形態は、凸帯部中央がやや窪み、上・下部が稜状に突出している。器内面は斜位の刷毛目を施した後に、縦位にナデている。このナデはやや荒く、刷毛目の残る箇所が見られる。3は、器内面の刷毛目が残り、ナデ調整は行われていない。また、凸帯の上・下部分の突出は低く、台形に近い。

4は透孔を有するものである。ヘラ切りの角度から、円窓になるものと思われる。5は、段の中間部分の破片である。4・5の器内面は縦位に近い斜方向のナデがほどこされているが、これらのナデは粗く、弧状に窪んでいる。焼成はいずれも良好である。色調は1～3が淡褐色、4が暗灰橙褐色、5が暗橙褐色を呈する。胎土中には、片岩粒、石英粒、鉄斑粒、角閃石粒、雲母粒が観察された。また、1～3は、4・5に比較して、砂粒の含有が高く、ざらついた感じを受けるものである。



第37図 長沖古墳群第72号墳墳丘周辺表面採集資料拓影図

長沖古墳群第70号墳の現況（第38図）

本古墳は、調査区東側に位置している。

遺存している墳丘の規模は、東西最大幅12.8m、南北最大幅11.9mを測る。現地表面からの高さは2.0mを保ち、墳頂部標高は119.600mである。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は頂部がやや平坦な蒲鉾形をしている。

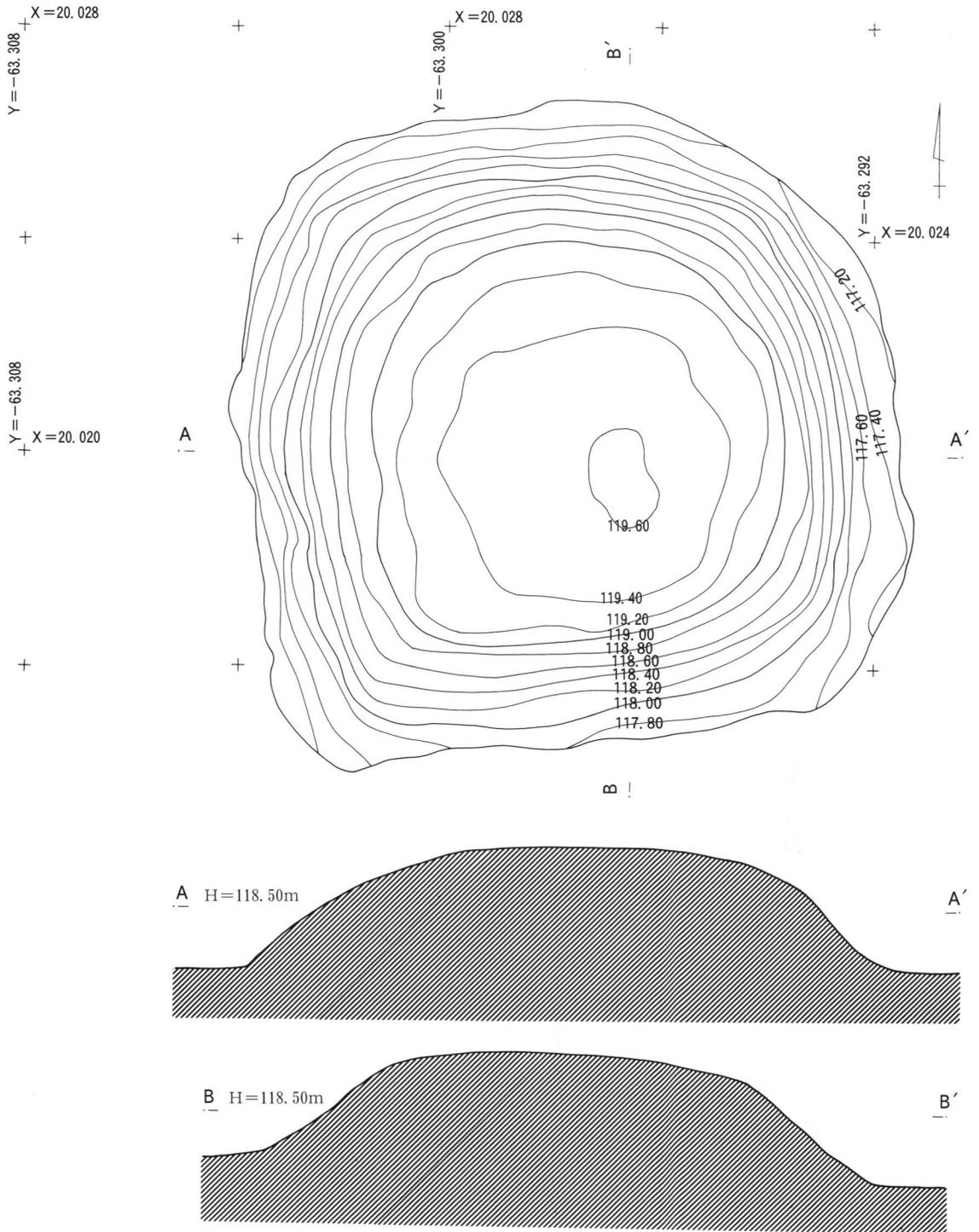
本古墳は、現況で見る限り、方墳状を呈している。しかし、地籍図を参考にすれば、本古墳は直線的な境界に圍繞されていることから、耕作が境界線を目安に継行的に行われた結果、隅丸方形を呈していることも考慮され、にわかには方墳と断ずることはできない。

現状は、低灌木や篠竹が繁茂するため、墳丘盛土の流失や崩落はなく、安定しているといえよう。周囲には石室控積、あるいは後世に積まれた石垣状の施設は見られず、土壤に覆われている。現状の墳形からは、石室前提部に想定される、等高線の落ち込み状の乱れは見られない。

墳丘の周囲は平坦面であり、かつては耕作地として利用されていたようであるが、現況では雑草等が繁茂していた。このため、本古墳の周囲の踏査を行ったが、埴輪片等の散布の有無は確認できなかった。



村後地区 発掘調査作業風景



第38图 長沖古墳群第70号墳現況測量図

2. 縄紋時代の遺構

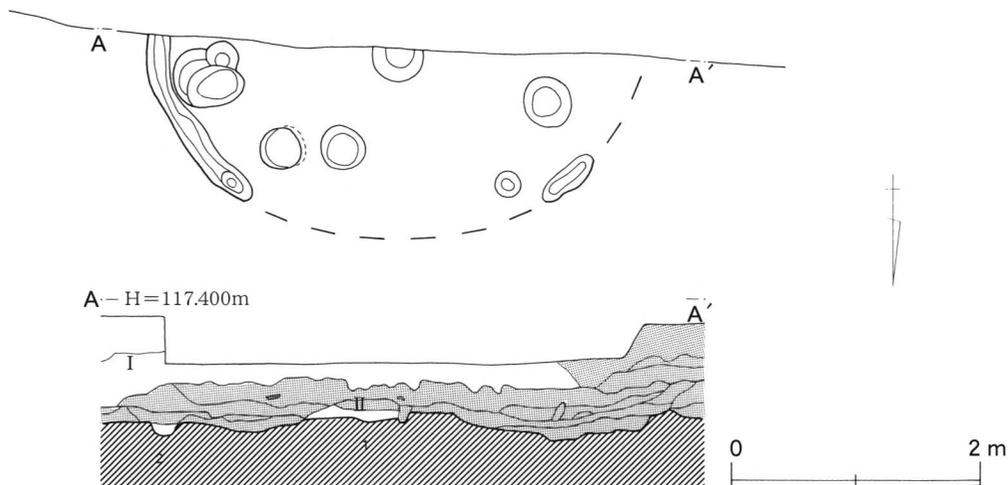
第1号住居址（第39図 図版14-1）

本址は、調査区南東、G-1・2グリッドに検出された。本址は床面部分まで、第72号墳および村後地区第2号古墳址周溝の掘削を受けており、遺存状態は良好であるとはいえない。掘削を免れた周溝および柱穴、および部分的に残った覆土から住居址であることが判明した。

周溝は、調査区壁から約1.4m、弧状に検出され、さらに西側1.6mほどの距離をおいて50cmほど遺存していた。周溝の深さは、調査区壁において10cmを測る。この周溝から、本址の平面プランは円形を呈するものと思われ、調査区壁における直径は、おおよそ4mに復元される。柱穴は、周溝底面より39~52cm掘り込まれていた。

住居中央に相当する、調査区南壁にかかる半円状の落ち込みには、被熱面の形成は見られなかったものの、炭化物粒子および焼土粒子が集中していた。このため、炉あるいは炉に付随するものと考えられる。

遺物は検出されなかったが、平面プランと、周辺から検出されている縄紋期の遺物から縄紋時代中期の所産と考えられる。



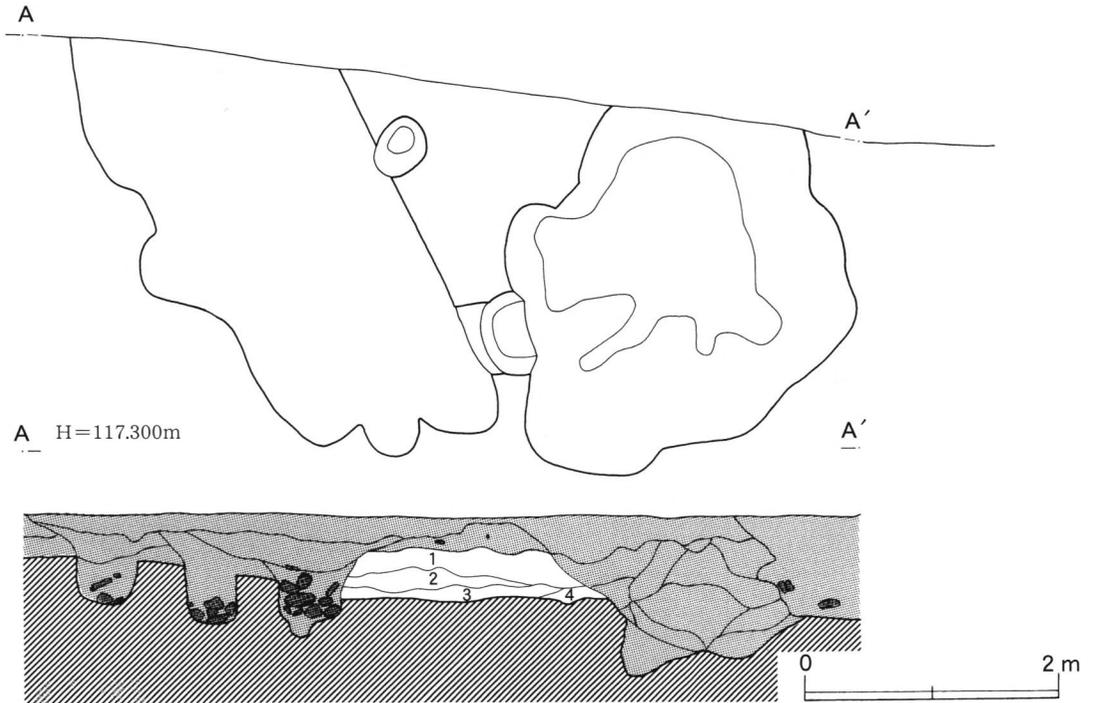
第39図 第1号住居址平面・セクション図

長沖古墳群村後地区 第1号住居址土層説明

- 第1層 明褐色土 明褐色・暗褐色小塊（YPを含む）・ローム小粒（～5mm）が混在する層。層下位には、炭化物粒子（～1mm）を中量、焼土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第2層 明黄褐色土 ローム粒子（～0.1mm）・ローム小粒を主体とし、明褐色土を微量含む。しまりは非常に硬く、粘性は高い。

第2号住居址（第40図 図版14-2）

本址は調査区北側中央の、A-2・3グリッドに検出された。本住居は、西側の攪乱溝、東側の土層捻転址によって破壊されており、遺存状態は不良である。遺存する西側部分には柱穴が1基検出されたのみで、炉址は検出されなかった。確認された床面の範囲も狭いため、規模および平面プランは不明である。遺物は検出されなかったが、覆土から縄紋時代の所産である。



第40図 第2号住居址平面・セクション図

長沖古墳群村後地区 第2号住居址土層説明

- 第1層 明褐色土 明褐色土を主体とし、暗褐色土（YPを含む）を少量含む。しまりは非常に硬く、粘性なし。
- 第2層 明褐色土 明褐色土を主体とし、YP粒子（～0.5mm）を多量に、ローム粒子（～5mm）を微量含む。しまりは非常に硬く、粘性なし。
- 第3層 明褐色土 明褐色土を主体とし、YP粒子（～0.5mm）を多量に、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～3cm）を微量含む。しまりは非常に硬く、粘性なし。
- 第4層 明褐色土 明褐色土を主体とし、YP粒子（～0.5mm）を多量に、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは非常に硬く、粘性なし。

土 塚

第 1 号土塚 (第41図左 図版15-1)

本址はB-4・5グリッドに検出された。第3号溝趾と重複し、覆土上層を掘削されている。平面プランは、東西方向に長軸をもつ不整楕円形を、断面形態は西側底部が一段落ち込む逆台形を呈する。底部中央に小ピットを有する。

詳細な時期は不明であるが、覆土から縄紋時代の所産と考えられる。

第 2 号土塚 (第41図右)

本址は、G-3グリッドに検出された。平面プランは半円形を呈し、調査区外へと続いている。周溝底部からの深さは、85cmを測る。

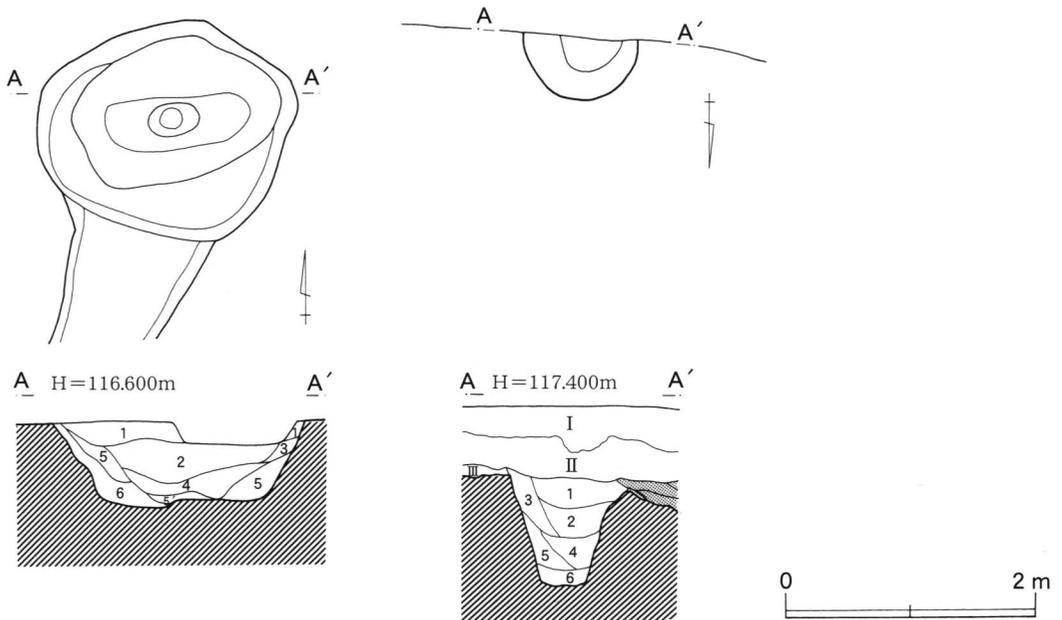
遺物は検出されなかったが、覆土から縄文時代の所産と考えられる。

長沖古墳群村後地区 第 1 号土塚土層説明

- 第 1 層 明褐色土 暗茶褐色土小塊を微量含む。しまりは軟らかく、粘性なし。
- 第 2 層 明褐色土 暗茶褐色土を中量含み、YP (~1mm) を多量に含む。しまりは硬く、粘性は低い。
- 第 3 層 明褐色土 第 2 層に準ずるが、明褐色土がやや多い。
- 第 4 層 暗茶褐色土 YP (~1mm) を多量に含む。しまりは硬く、粘性は低い。
- 第 5 層 明茶褐色土 ローム小塊 (~4cm) を中量、暗茶褐色土小塊 (~3cm) を少量、YP (~1mm) を中量含む。しまりは硬く、粘性は低い。
- 第 6 層 明黄褐色土 ロームを主体とし、明褐色土小塊 (~1cm)・YP (~1mm) を少量含む。しまりは硬く、粘性は低い。

第 2 号土塚土層説明

- 第 1 層 明褐色土 ローム粒子 (~0.5mm)・YP (~1mm) を中量、ローム小粒 (~3mm)・炭化物粒子 (~1mm) を微量含む。しまりは硬く、粘性なし。
- 第 2 層 明茶褐色土 第 1 層に準ずるが、ローム粒子・ローム小粒がやや多い。
- 第 3 層 明茶褐色土 ローム粒子 (~0.5mm)・ローム小粒 (~3mm) を多量、YP (~1mm) を中量、炭化物粒子 (~1mm) を微量含む。しまりは硬く、粘性なし。
- 第 4 層 明褐色土 明褐色土・ローム小塊が混在する層。しまりは硬く、粘性なし。
- 第 5 層 明褐色土 第 4 層に準ずるが、ローム小塊がやや少ない。
- 第 6 層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小塊を少量含む。しまりは硬く粘性なし。



第41図 第 1・2号土塚平面・セクション図

3. 縄紋時代の遺物（第42～43図 図版16-1・2、17-1・2）

本調査区からは縄紋時代の遺構が検出されているが、これらの遺構は、古墳築造に伴う掘削等のため攪乱され、明確な遺物を伴わない状態であった。

ここでは、攪乱内及び古墳周溝等から検出された縄紋時代の遺物を掲載する。第42図は縄紋土器を、第43図には石器を示した。

第42図1は前期前半、黒浜式土器胴部片である。器外面には上段に単節縄紋RL、下段に縄紋LRを施紋し、やや角度の立つ斜位の羽状構成をとっている。器内面はナデにより器表面を整えているが、繊維痕が顕著である。

2から10は前期後半、諸磯C式土器である。2から6は口縁部の破片であり、器外面は横走する集合沈線を、器内面には斜行する集合沈線を施した後に、貼り付け文を施している。4・5は口縁端部に、横位に楕円状の貼り付けを行った後に、横位の沈線を施している。7から9は胴部上位、屈曲部付近の破片である。7は斜位、8は横位の、9は斜位および垂下する集合沈線を施した後に、棒状・ボタン状の貼り付け文を施している。10は胴部下位から底部の破片である。地紋に縦位および斜位の集合沈線を施し、重三角状に結節浮線文を貼り付け、中央にボタン状浮文を貼り付けている。

11から20は中期前半、勝坂式土器である。隆線を基調とした曲線モチーフを描出し、区画内に単沈線、半截竹管による刻み目・陰刻が施されている。11は口縁部の破片である。半截竹管を集合沈線状に3～4条横走させた後に、小さな半截竹管によって、縦位を基調に、接続させるように陰刻している。区画内下位には三角状の陰刻が施されている。15は横走および垂下する隆線上に、18は区画内の垂下する二条の沈線に沿って、綾杉状の刻み目が施されえている。16の弧状の隆線上は幅広の断面U字状に押圧されている。

21から23は中期後半加曾利E式土器である。21から23は口縁部の破片である。21は地紋に横位の撚糸紋Rを、22は地紋に単節縄紋Lを施し、23は区画内を、半截竹管による格子目状紋を充填している。

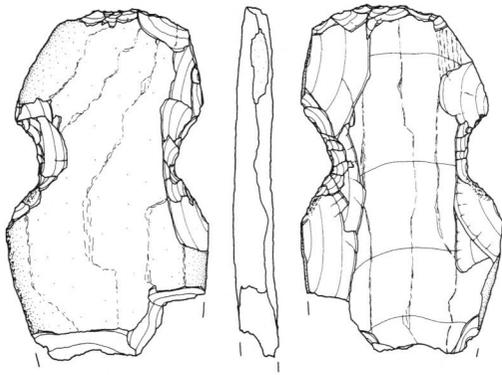
第43図1から5は打製石斧である。1は刃部を欠損している。3の刃部は、使用に伴って形成された平滑面が観察される（網カケ部分）。4の刃部は使用により摩滅・鈍化している。6は磨製石斧の刃部である。7は縦長の石匙である。基部および先端部分が欠失している。8は棒状の礫石を利用した凹石である。表裏両面に凹部を有する。

石材は1・2および8が結晶片岩、4・5は砂岩、3・6・7はホルンフェルスである。

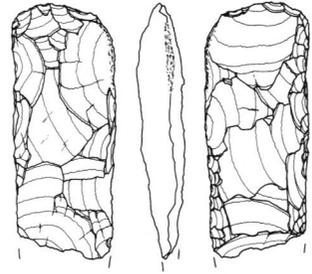
重量は1が²221g、2が²184g、3が²145g、4が²60g、5が²96g、6が²36g、7が²30g、8が²212gである。



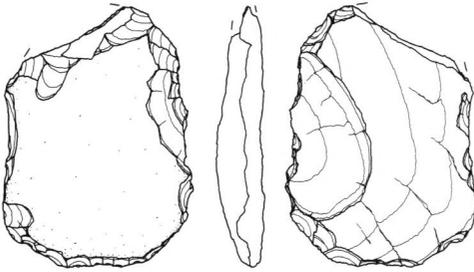
第42图 村後地区出土縄紋土器拓影图



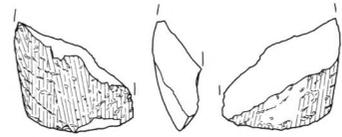
1



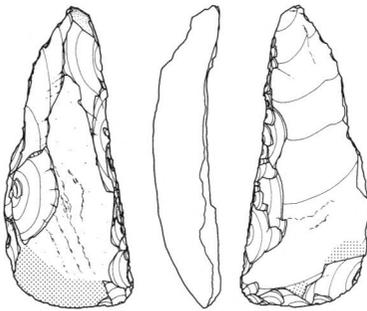
5



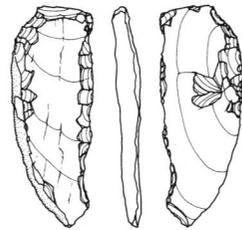
2



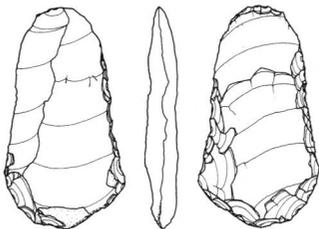
6



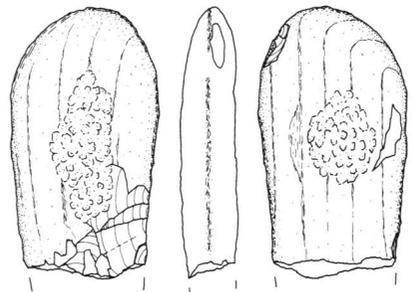
3



7



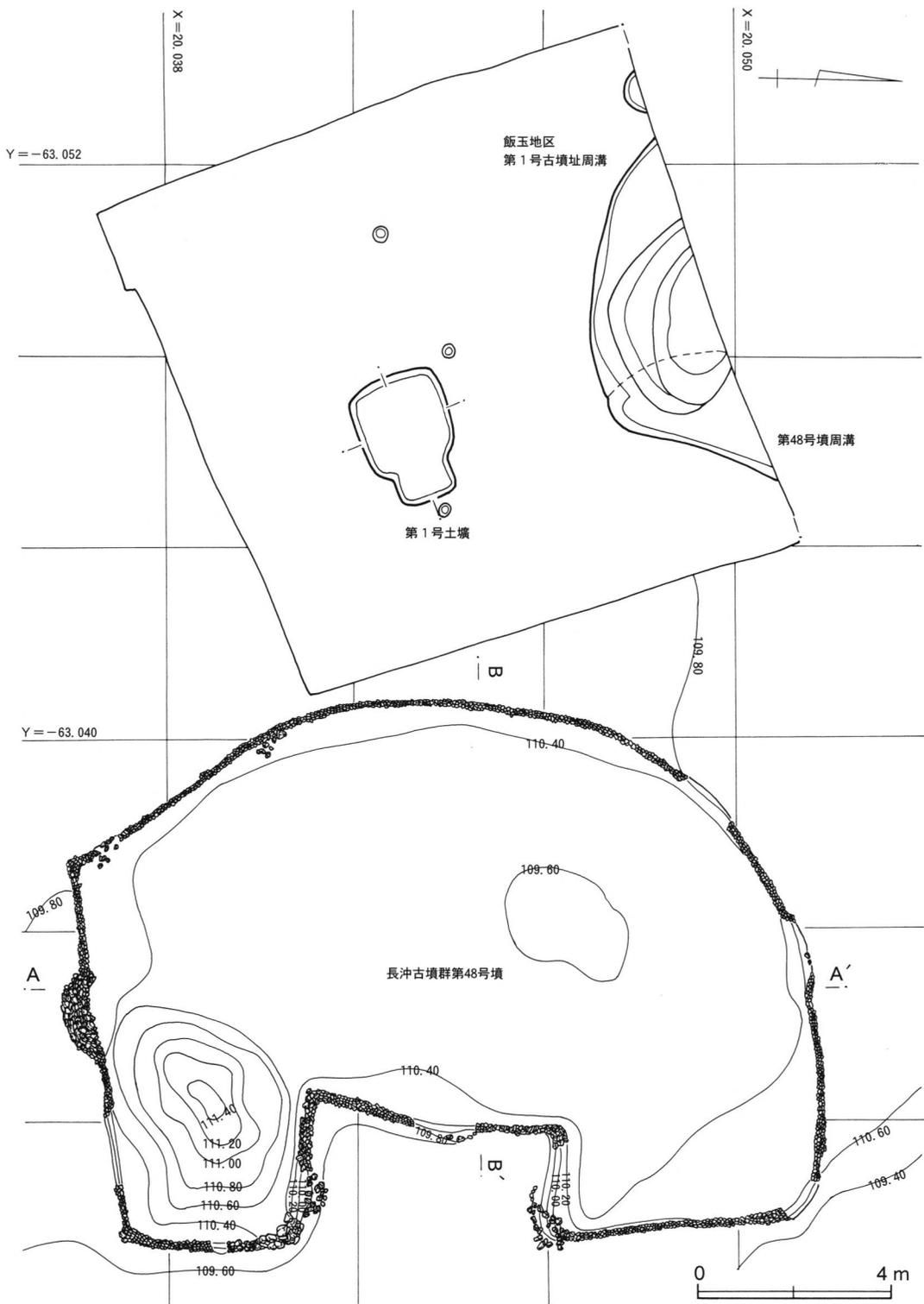
4



8



第43图 村後地区出土石器実測図



第44図 飯玉地区C地点全測図

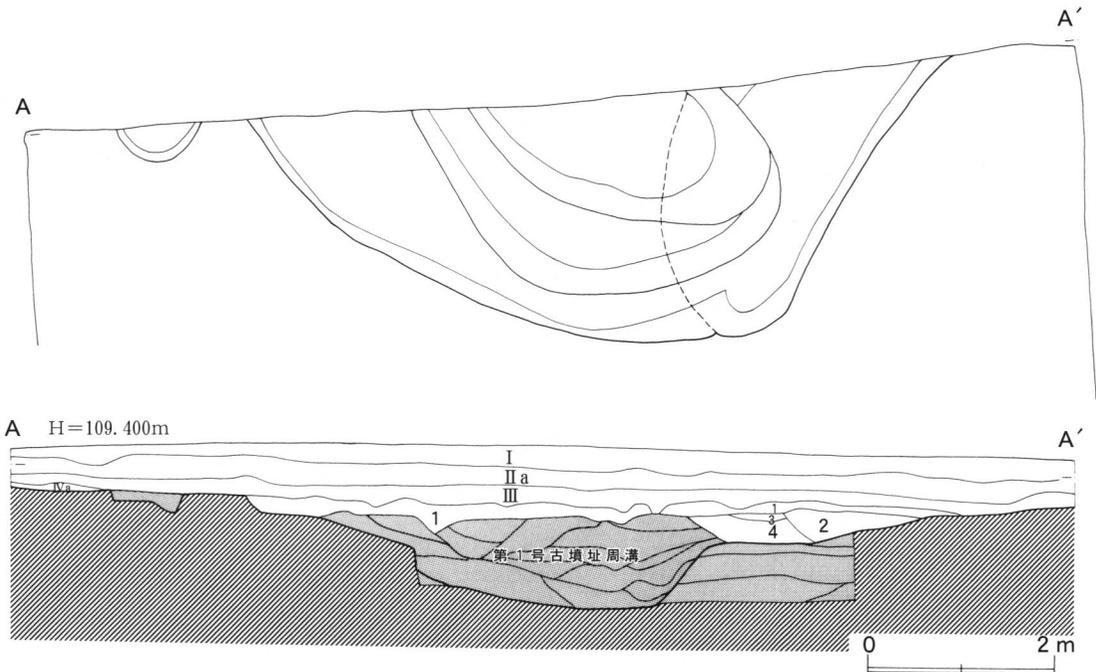
第V章 長沖古墳群飯玉地区C地点の調査

1. 古墳時代の遺構

長沖古墳群第48号墳周溝（第45図 図版19—12）

調査区北東側で検出された。遺構確認面での最大幅は約2m、深さは約40cmを測り、底面は平で壁は緩く立ち上がる。第1号墳址周溝の端部上面壁を切つて構築している。本址は、周溝の端部と思われるが底面が浅くなり確認できなかったことも考えられる。覆土は黒色土主体で非常に砂利が多く混入していた。

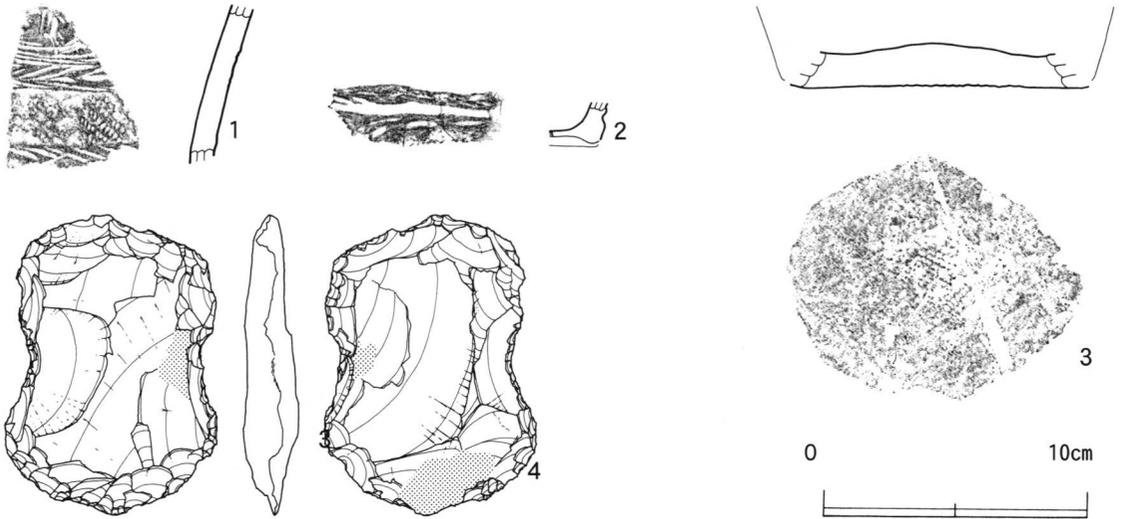
尚、本址は、調査当時「長沖古墳群飯玉地区第1号墳周溝」として発掘調査を行ったが、現地調査の判断及び後の整理作業により長沖古墳群第48号墳の周溝であると判断できたことにより、本報告で遺構名の呼称変更を行った。従つて、調査当時「長沖古墳群飯玉地区第2号墳周溝」と呼称した遺構も「長沖古墳群飯玉地区第1号古墳址周溝」と呼称を改めることとした。



第45図 長沖古墳群第48号墳周溝平面・セクション図

長沖古墳群第48号墳周溝土層説明

- 第1層 暗褐色土 しまり、粘性共に弱い。φ5～10mm程度の小砂利を少量含む。第3層に比べ、砂利多い。
- 第2層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ10～50mmの礫を含む。第4層に比べ、礫多い。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性共に弱い。φ5～10mm程度の小砂利を少量含む。
- 第4層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ10～50mmの礫を含む。

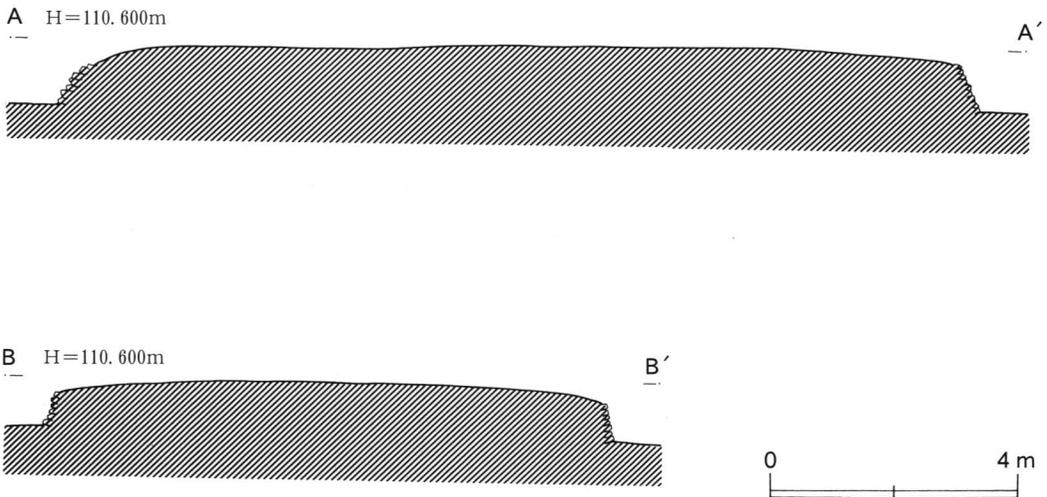


第46図 長沖古墳群第48号墳・飯玉地区第1号古墳址周溝出土遺物

長沖古墳群第48号墳の現状（第47図 図版21-1）

第48号墳（埼玉県遺跡台帳第159号墳）は、本調査区の東側に隣接しており、周溝の一部を調査することができた。しかし、墳丘部については未調査であるため、簡単ではあるが現在の古墳の現況を記述しておく。

本墳は、耕作などにより破壊が進んでいるが、辛うじて台状に墳丘を残している。その残存規模は、東西に約15m南北に約11mであり高さは約1mで平である。またその最高点は、墳丘の南にあり小さなケルン状をなし、その部分の高さは約1.8mである。全体の平面形はC字形であり東側には室状のへこみがある。この他、埴輪などの古墳に帰属すると思われる遺物の散布はみられない。周囲は畑地であるが、宅地化が進んでおり開発の際には、注意を払いたい。

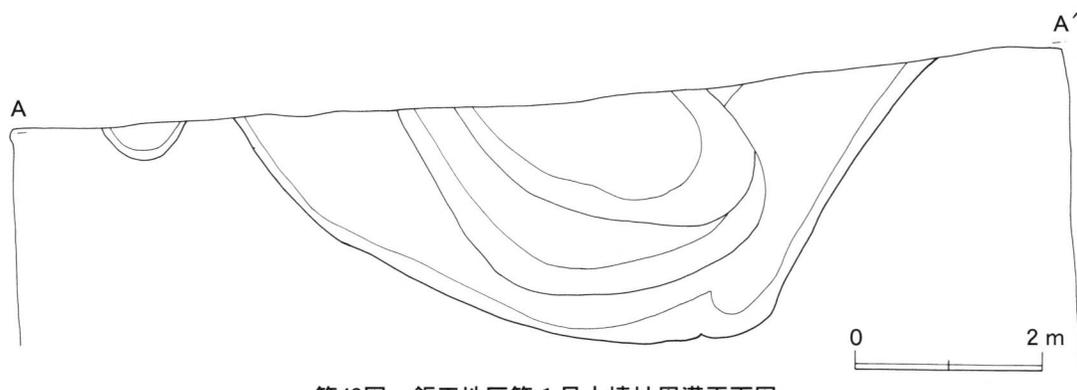


第47図 長沖古墳群第48号墳現況エレベーション図

長沖古墳群飯玉地区第1号古墳址周溝（第48図・図版19-1・2）

調査区北側中央で検出された。遺構確認面での最大幅は約4m深さは約1mを測り、底面は平で壁は急角度で立ち上がる。覆土は、黒色土で砂利が多い。

本址より諸磯b式土器（第46図No.1・No.2、図版21-2 No.1・No.2）、堀之内Ⅱ式土器（第46図No.3、図版21-2 No.3）が出土している。特に前述した縄文時代後期の底部破片は、不明瞭ではあるが一部に網代痕が残っている。そのほか打製石斧（第46図No.4、図版21-2 No.4）が出土しているが、本址に直接伴う遺物は出土していない。

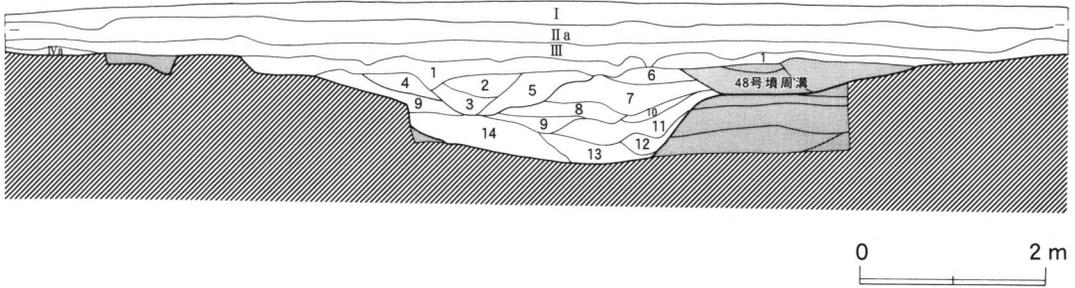


第48図 飯玉地区第1号古墳址周溝平面図



飯玉地区C地点の調査前風景と長沖第48号墳（西から）

H=109.400



第49図 飯玉地区第1号古墳址周溝セクション図

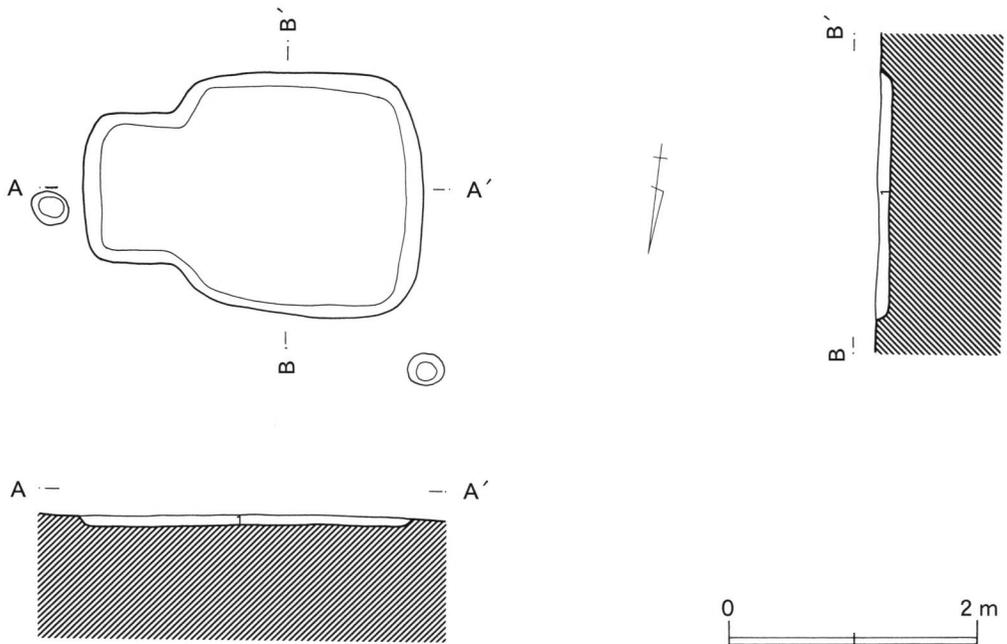
飯玉地区第1号古墳址周溝土層説明

- 第1層 暗褐色土 しまり、粘性共に弱い。φ5～10mm程度の小砂利を少量含む。第4層に比べ、砂利多い。
- 第2層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。φ1～3cmの小砂利を若干含む。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。φ1～3cmの小砂利を若干含む。第2層に比べ、小砂利多い。
- 第4層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。φ1～3cmの小砂利を若干含む。第7層に比べ、小砂利多い。
- 第5層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ1～20mmの小砂利を含む。第6層に比し、小砂利多い。
- 第6層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ1～20mmの小砂利を含む。
- 第7層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ1～20mmの小砂利を含む。第6層に比べ、小砂利少ない。
- 第8層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。黄色っぽく、やや砂質である。
- 第9層 明褐色土 しまり、粘性はない。φ10～30mmの小礫と砂が主体であり、きめ細かい砂質である。
- 第10層 明褐色土 しまり、粘性はない。φ10～30mmの小礫と砂が主体である。第11層に比べ、砂が少ない。
- 第11層 明褐色土 しまり、粘性はない。φ10～30mmの小礫と砂が主体である。
- 第12層 明褐色土 第11層に類似するが、色調がやや暗い。
- 第13層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ10～30mmの砂利を多く含む。
- 第14層 黒色土 しまり、粘性若干あり。φ10～30mmの砂利を若干含む、やや砂質である。

第1 a・b号土壙 (第50図 図版20-2)

調査区の中央よりやや南東よりに検出した。一辺が約2mで平面形が隅丸方形を呈する方を第1 a号土壙、又、確認できた一辺が1.2mで同じく方形を呈する方を第1 b号土壙と呼称した。深さは共に確認面より約10cmを計り、底面は平であり遺構同士が切り合っているにも関わらず両土壙の段差は認められなかった。更に覆土の断面観察においても遺構の切り合い関係は不明瞭であり、新旧は明らかにできなかった。本址は時期性格共に不明であるが、第48号墳周溝の円周上に当たることや、遺構の深さが似ていること、更にa b併せた土壙の長軸が周溝の幅に合うことなどから第48号墳周溝の堀方である可能性も考えることができる。

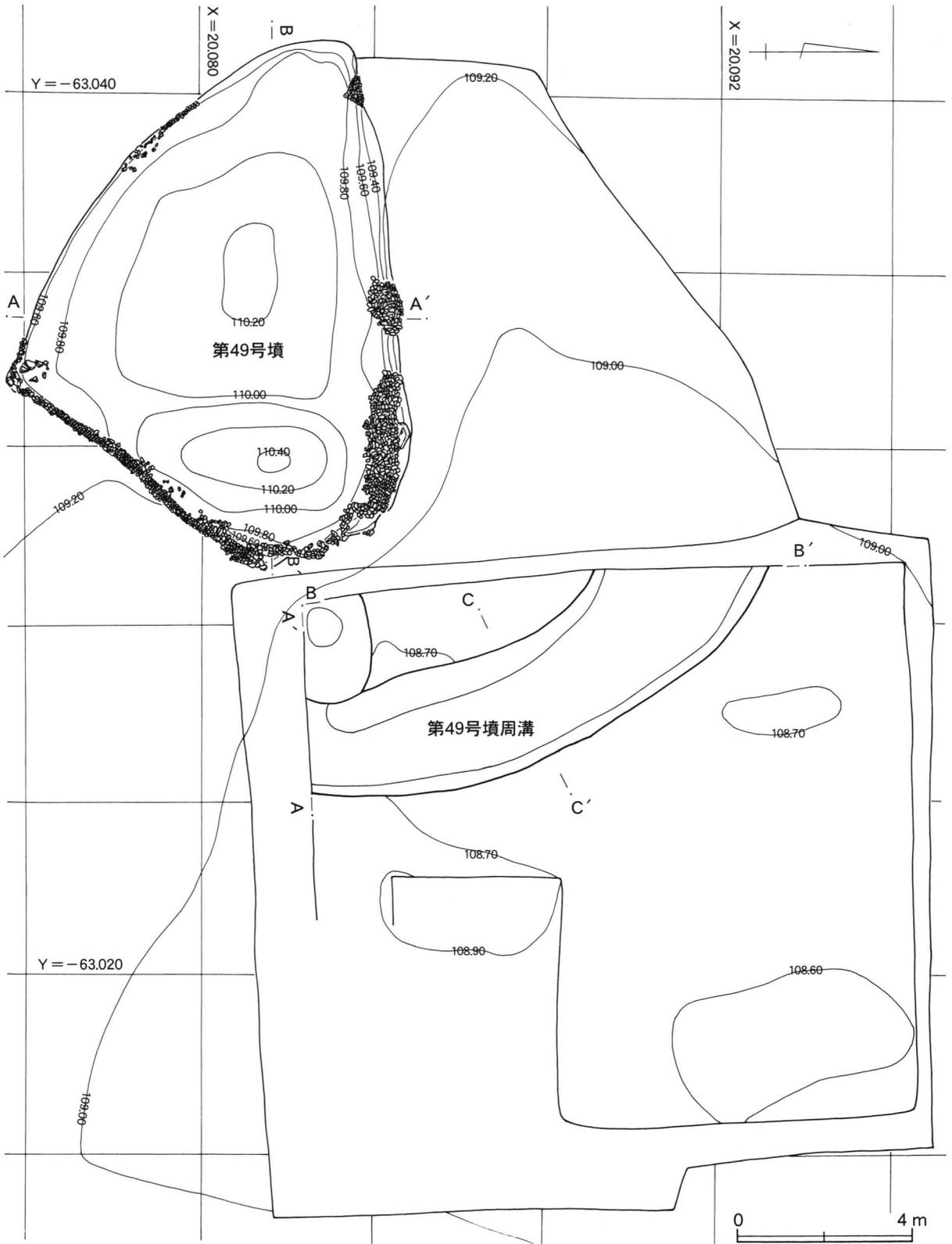
本址より勝坂式土器(新)の破片(第51図 図版21-2、No.5)を一片検出している。しかし、本遺跡周辺には縄紋時代中期の遺跡もあることなどからこの破片が本土壙の時期を認定するのに積極的な根拠はないと思われる。



第50図 第1号土壙平面図



第51図 第1号土壙出土遺物



第52図 飯玉地区D地点全測図・長沖古墳群第49号墳現況測量図

第VI章 飯玉地区D地点の発掘調査

1. 古墳時代の遺構

長沖古墳群第49号墳周溝（第53～54図 図版23-1・2）

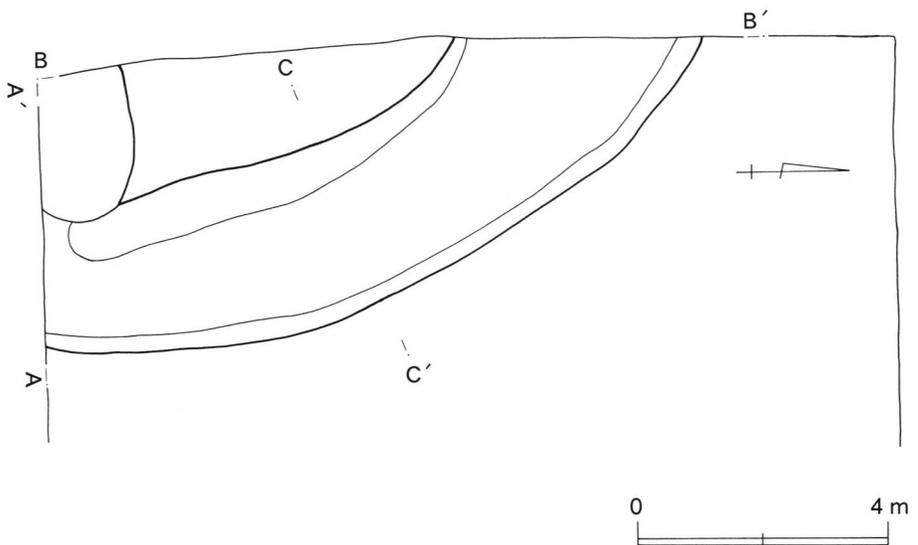
本周溝は、調査区西壁の北寄りから、南壁西寄りにかけて検出された。

平面プランは円弧状を呈し、調査区南西コーナー部の土壌により、内側立ち上がりの一部を掘削されている。この土壌の覆土は、現在の耕作土層である暗灰褐色土を主体とし、30cm大の礫石および小礫（～10cm）が充填されるように多量に含まれるものである。この土壌内からは、時期を比定しうる遺物は検出されなかったため、厳密な掘削時期を限定することは困難である。土壌主体土に注目すると、土層中に含まれる浅間山系A軽石は、純層状ではなく、均質に含まれている。このことから、降灰直後では無く、一定期間の耕作等により攪拌されたことが想定され、掘削の時期は比較的新しいものと考えられる。また、覆土内の礫石は、第49号墳の開削に伴い投棄されたものである。

検出された周溝の規模は、立ち上がり幅1.3～1.4m、底部幅1m前後を測る。周溝立ち上がりは内側・外側ともに緩やかに立ち上がる。周溝底部は基本土層の第Ⅲ層および砂礫層であり、この土層に他土層の混在が観察されなかったことから、粗掘りの後に底面を平滑化することはされていないようである。

周溝内からは、鉄滓および少量の縄紋土器の細片が検出されたが、埴輪片は検出されなかった。

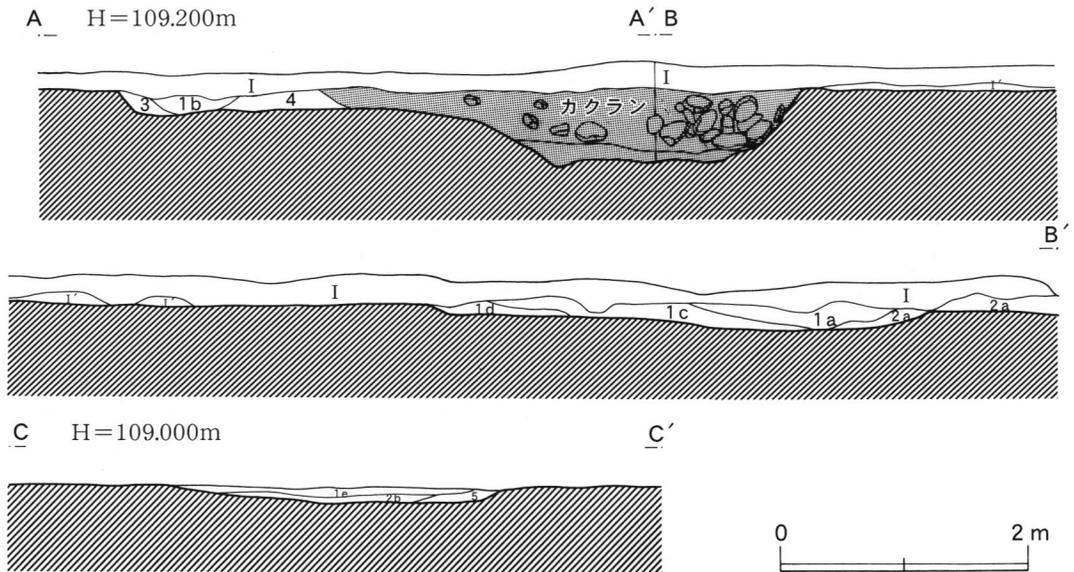
本調査区は、現表土面から確認面までの深さが25cm前後と浅いため、耕作が、確認面直上におよんでいた。しかし、墳丘部分の旧表土である黒褐色土は比較的良好に遺存していた。この旧表土下にはピット状の落ち込みや、埴輪の埋設土壌は検出されなかった。



第53図 長沖古墳群第49号墳周溝平面図

長沖古墳群第49号墳周溝土層説明

- 第1a層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、片岩小礫（～3cm）を少量、片岩小粒（～5mm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
- 第1b層 黒褐色土 第1a層に準ずるが、砂礫がやや多い。
- 第1c層 黒褐色土 黒褐色土を主体とするが、明黄褐色砂質土小塊（～4cm）を少量斑状に含む。片岩小礫（～3cm）を少量、片岩小粒（～5mm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
- 第1d層 黒褐色土 第2層に準ずるが、明黄褐色砂質土が粒子状に含まれる。
- 第1e層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、明褐色砂質土小塊（～2cm）を少量斑状に混在する層。層中には、片岩を主体とする小礫（～3cm）を中量、片岩粒子（～2mm）を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第2a層 暗褐色土 基本土層第Ⅲ層に準ずるが、主体土が粒子状であり、しまりがなく、軟らかい。
- 第2b層 暗褐色土 暗褐色土（基本層第Ⅲ層）を主体とし、黒褐色土を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第3層 黒褐色砂礫土 黒褐色土と砂礫土層の混在層。しまりは軟らかく、粘性なし。
- 第4層 暗褐色砂礫土 暗褐色砂礫土が主体であるが、小礫が層下層に集中する。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 明褐色土 暗褐色土と砂礫の混在層。礫石（～5cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。



第54図 長沖古墳群第49号墳周溝セクション図

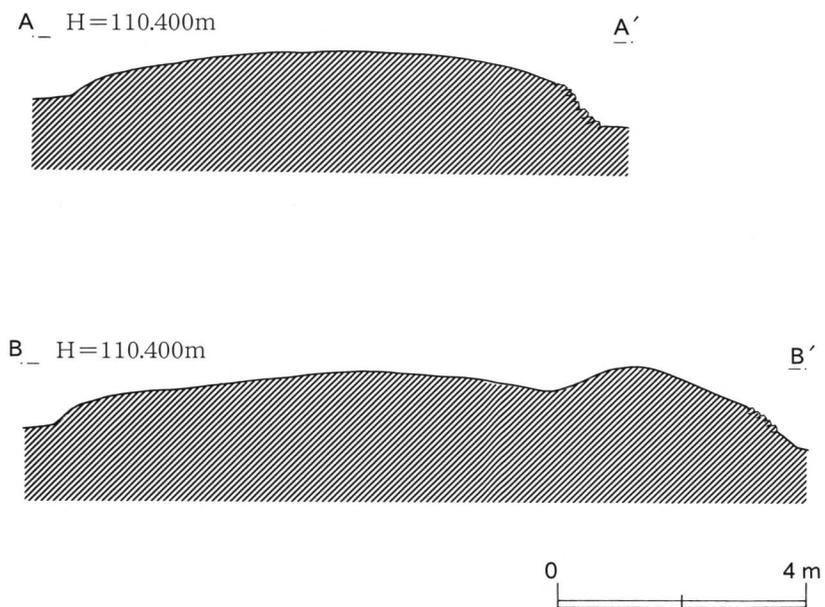
長沖古墳群第49号墳の現況（第55図 図版22-2）

第49号墳は、飯玉地区D地点の南西に位置している。

本古墳の遺存状況は、東西最大幅11.7m、南北最大幅9.0mを測る。平面形態は、北側および南東側が直線状を呈し、南西から西にかけて円弧状を呈している。断面形態は、東西方向は東側に突出部分を有する蒲鉾形、南北方向は蒲鉾形を呈している。墳丘東側の突出部分は、約30cm大の礫石が不規則に集積されたものであった。現地表面からの高さは1.2mを測り、墳頂部標高は110.4mである。

遺存している墳丘の周囲、特に北側および南東側の直線状の部分には、石垣が積まれている。この石垣は、礫石を斜め方向に、交互に積み上げるものであり石室控積とは異なるものである。おそらく後世に、墳丘部分の土砂が耕作地に流入するのを防止する目的で積まれたものであろう。

児玉町地籍集成図（児玉町、1977）では、現存している墳丘南西から西の円弧状の北側は、さらに円弧状を描く地境となっている。このことから、かつて西側は、半円状に遺存していたものと思われる。墳丘の東側については、同一の地籍図の中に包含されているため、この地籍図から遺存状態を窺い知ることはできない。地籍図における半円状の形態は、その規模は縮小している可能性が考えられるものであるが、本来の墳形を踏襲しているものと思われる。上記地籍の形と、飯玉地点D地点の調査における、墳丘北東の弧状の周溝プランから、第49号墳は円墳であるといえよう。



第55図 長沖古墳群第49号墳現況エレベーション図

第Ⅶ章 まとめにかえて

北関東地方出土の鶏形埴輪 —長沖古墳群村後地区出土の鶏形埴輪をめぐって—

はじめに

今回の調査で出土した鶏形埴輪（以下、本資料と呼称する）は、第23図にもあるように、村後地区第2号古墳址（以下、第2号墳址と略称する）の周溝より検出されたものである。しかし、

①第2号古墳址が埴輪を伴わないこと。

②第2号古墳址よりも高所に長沖70～72号墳が所在していたこと。

こうした点から、本資料はたとえば71号墳などからの流れ込みも考えられ、第2号墳に伴う可能性はむしろ低い。そのため、鶏形埴輪に関連してしばしば問題となる埴輪祭祀の諸相、その他について考察することは、現時点では困難と思われる。

そこで本章では、はじめに本資料の物質的な問題についての整理をおこなったのち、次いで北関東地方における祭器具としての鶏形埴輪の配され方についての問題などを中心に焦点を当てて検討を試みる。このことを通して、本資料の長沖古墳群内における位置付けと意義、および今後の課題についての整理を試みることにした。（註1）

1. 本資料の物質的な問題について

a. 本資料の示す年代観

本報告にあるとおり、今回の調査では年代の指標となる明確な共伴遺物は得られなかった。しかし、本資料とともに検出された円筒埴輪の中には、1977年に調査された長沖25号墳出土の円筒埴輪（菅谷浩之、1980）と類似する事例もある。本資料（第23図）が、これらの資料と共伴していたのであれば、その製作の時期は、6世紀前半代を下ることはないだろう。

b. 本資料の生産と供給に関わる問題について

別記にもあるように、本資料にも海綿骨針・結晶片岩（雲母）という群馬県南部域および埼玉県北西域などに分布し、これらの地域で出土する多くの埴輪の胎土に含まれている混入物が確認できた。（前原豊、1995。志村哲、1995。井口泰基、1997）

これらの2つの混入物は本資料および共伴した円筒埴輪の供給元（生産地）の推定を促すことが可能な情報を内包していると言える。

現在、この両者が胎土に含まれている埴輪を製作した埴輪窯跡としては、以

下の3遺跡が知られている。

- ① 埼玉県本庄市宥勝寺北裏埴輪窯跡（本庄市、1976。橋本博文、1980。以下、宥勝寺窯と略称する。
- ② 群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡（柴田常恵、1906。津金澤吉茂他、1980。志村哲、1995。以下、本郷窯と略称する。）
- ③ 同市猿田埴輪窯跡（杉山晋作他、1998。以下、猿田窯と略称する。）

そして、本県児玉郡児玉町（以下、本町と略称する。）に所在した八幡山埴輪窯跡（柳進、1961。以下、八幡山窯と略称する。）も、村後地区を含めた長沖古墳群とは、直線距離で約1.2kmという至近距離にある点から、本資料や伴出した円筒埴輪を製作した窯跡の有力候補の一つと言える。

しかし、八幡山窯出土の埴輪資料の殆どは未公表のため、本資料が確実に八幡山窯産のものであるかは現段階では明言できない。

したがって、現時点では、本資料は前記4カ所の埴輪窯跡一すなわち、本郷窯、猿田窯、宥勝寺窯、そして本町八幡山窯のいずれかの埴輪窯跡で製作された可能性が高いことを指摘するにとどめておく。（註2）

2. 祭器具としての鶏形埴輪

a. 北関東地方における鶏形埴輪の出現と展開

児玉郡市を含めた北関東地方（以下、当該地域と呼称する。）では、群馬県高崎市に所在した御布呂遺跡の弥生期の水田址より鶏の肉塊の出土が報告されており、既にこの時代から人々の生活に関わる動物であったことがわかる。（高崎市教育委員会、1980他）

その後、4世紀代になると、群馬県前橋市公田東遺跡の方形周溝墓からの出土事例にもあるように、土製品として墳墓に伴うようになり（大西雅広、1996。註3）、5世紀代に入ると、以下にみるように埴輪として古墳に配されるようになる。

当該地域では、おおよそ35ほどの事例が知られているが、そのうち県内では13例の出土が確認されている。これら一連の資料は、TK23～MT15段階の須恵器が伴う時期および県内で横穴式石室を導入した時期の古墳、すなわち、5世紀後半代～6世紀前半代の時期にのみ伴っている。分布状況については、大里郡西部域を含めた児玉郡市域と東松山市・鴻巣市域を中心とする県中部の二つの地域に大きく分けることができる。

一方、群馬県域では、16例の出土が知られているが、古墳時代のほぼ全時期にわたって製作されている。分布状況については、太田市や高崎市の周辺域に集中しているが、平野部では一応、幅広く出土している。

b. 当該地域での鶏形埴輪の配置

ここでは、当該地域での出土事例の集成を兼ねて、鶏の古墳での配置のされ方を検討する。鶏には大きく2通りの扱われ方が看取できる。以下、便宜的ではあるが次のように分類してみた。なお、埼玉県内での出土事例については、(山崎武・高田大輔、2000)に集成されているので、この研究成果をも用いることにした。

A類

鶏形埴輪が、家・器材・人物・馬など他の動物の埴輪などとともに形象埴輪群像のひとつ(すなわち、one of them)として配される場合。この場合、鶏が帆立貝式古墳を含めた前方後円墳に配されている場合をAⅠ類、それ意外の場合をAⅡ類とした。

B類

鶏形埴輪一固体のみ、あるいは鶏だけが特に選ばれて、古墳に配されたと考えられる場合。

AⅠ類には以下の事例が該当しよう。

〔1〕 群馬県佐波郡赤堀町赤堀茶白山古墳

帆立貝式古墳。全長59m。5C前半代。鶏は頭部が1個体出土。家・盾などの埴輪と共伴。(後藤守一、1929。註4)

〔2〕 太田市米沢二ツ山古墳

前方後円墳。墳丘長73m。5C中ごろ。鶏は頭部のみが出土。器材埴輪などと共伴。(梅沢重昭、1971)

〔3〕 前橋市舞台1号墳

帆立貝式古墳。墳丘長42m。5C後半代。頭部のみ出土。器台・家・蓋などの埴輪と共伴。人物・猪・鳥などの土製品なども出土。(西田健彦他、1991。西田健彦、1991。)

〔4〕 高崎市高崎情報団地16号墳

帆立貝式古墳。全長44.9m。5C後半～末葉頃。鶏は頭部が2個体出土した。棚形埴輪・土馬と共伴。(長井正欣他、1997)

〔5〕 同21号墳

帆立貝式古墳か?推定全長は約31.9m前後。5C末葉頃。出土資料は鶏冠か?馬形埴輪と共伴。(長井他、1997)

〔6〕 群馬郡群馬町保渡田八幡塚古墳

前方後円墳。墳丘長96m。5C末。鶏は頭部2個体出土。座像女子・王冠をいただく男子・武人男子などの人物、壺・器台、水鳥・馬・猪などの埴輪と共伴。(若狭徹他、1998。若狭徹・内田真澄他、2000。若狭

徹・田辺芳昭他、2001。)

〔7〕 埼玉県児玉郡神川町北塚原9号墳

前方後円墳。墳丘長37m。6 C初頭。人物・器材・馬などの埴輪と共伴した。(増田逸朗・柳田敏司、1971。山崎・高田、2000)

〔8〕 群馬県佐波郡境町剛志天神山古墳

前方後円墳。全長約90m前後。6 C前半～中葉。鶏は完全復元。性器を露出した男子・弹琴男子などの人物、犬などの埴輪と共伴。(平野進一他、1993。橋本博文、1980。若狭徹・内田真澄他、1999。)

〔9〕 新田郡尾島町世良田諏訪下32号墳

帆立貝式古墳。墳丘長不明。6 C前半代。鶏は頭部の破片が出土。鶏冠の表現がある。人物(女子)、家、盾などの埴輪と共伴した。(三浦京子他、1998)

〔10〕 高崎市綿貫観音山古墳

前方後円墳。全長97.5m。6 C後半代。後円部頂付近より頭部が2個体出土。貴人の男女、巫女、三人官女、器材、家、馬などの埴輪と共伴した。(梅沢重昭・徳江秀夫、1998)

AⅡ類には以下の事例が該当しよう。

〔11〕 埼玉県東松山市下道添1号墳

造り出し付き円墳。直径約25m。5 C末～6 C初頭。出土資料はほぼ完存。女子、盾の埴輪と共伴。(坂野和信、1987)

〔12〕 東松山市柏崎25号墳

円墳。直径約26m。5 C末～6 C初頭。古式の馬の埴輪と共伴。(山崎・高田、2000。註5)

〔13〕 児玉郡神川町十二ヶ谷戸15号墳

円墳。全長は16.5m。6 C初頭。出土資料は、ほぼ完存。色調は赤褐色を呈する。人物・器材・帽子・馬などの埴輪と共伴。(増田逸朗・菅谷浩之、1973。山崎・高田、2000。)

〔14〕 大里郡岡部町白山12号墳

円墳。6 C前半代。頭部のみ出土。髻を持つ女子の埴輪と共伴。(柳田敏司・菅谷浩之、1974。坂本和俊、1996。山崎・高田、2000。註6)

B類については以下の資料が該当しよう。

〔15〕 群馬県太田市目塚1号墳

円墳。推定墳長は21m。5 C前半代。頭部のみ出土。(島田孝雄、1987・佐野市郷土博物館、1992)

〔16〕 北群馬郡子持村浅田3号墳

円墳。直径22m。5 C後半代。出土資料はほぼ完存。(石井克己、1998。
若狭徹・内田真澄、1999。註7)

[17] 多野郡吉井町下條5号墳

円墳。全長約15m。5 C後半代。頭部と尾羽の先端を欠損する。(註8)

[18] 埼玉県本庄市御嶽塚古墳

円墳。TK23~47形式の須恵器を伴出。5 C後半代。頭部のみの出土。
(註9)

[19] 群馬県太田市成塚街道北1号墳

円墳。全長約15m。5 C後半~6 C初頭。鶏は3個体が出土。いずれ
も頭部のみ。(野村治男、1996)

[20] 埼玉県鴻巣市新屋敷22号墳

円墳。墳丘径9.9m。6 C前半代。鶏冠か？(大谷徹他、1996。山崎・
高田、2000。註10)

[21] 大里郡岡部町白山2号墳

円墳。6 C前半代。頭部のみの出土。(坂本和俊、1996。山崎・高田、
2000。註11)

[22] 埼玉県児玉郡児玉町長沖古墳群村後地区

本資料。本報告。

上記の分類に該当しないもの

[23] 群馬県太田市石田川遺跡

鶏は頭部のみが残存。(尾崎喜左雄他、1968。若狭・内田、1999など。
註12)

[24] 群馬県藤岡市天王塚古墳

円墳。約24.5m。6 C末。ほぼ完存。いわゆる「ひよこ」の埴輪とし
て有名。俳優の故三船敏郎氏の所有として知られている。(志村哲・長井
正欣、2000。永峯光一・水野正好、1977など。)

[25] 埼玉県大里郡川本町箱崎古墳群

首部以上が残存。5 C後半代~6 C前半代か？(大野雲外・柴田常恵、
1903。山崎・高田、2000)

[26] 鴻巣市生出塚32号埴輪窯跡

頭部のみ。5 C後半代~6 C前半代。(山崎・高田、2000)

[27] 鴻巣市安養寺古墳群

寄贈資料。首部以上。5 C後半代~6 C前半代。(山崎・高田・2000)

[28] 比企郡滑川町月輪古墳群第5号墳

5 C後半代~6 C前半代。現在も調査が進行中。(関口正幸、2001)

〔29〕 伝群馬県出土

頭部のみ。(財長瀬総合博物館所蔵。(註13))

A I類は、その殆どが、当該地域における有力首長の奥津城と考えられる古墳である。築造の時期は5 C前半代から6 C後半代まで継続する。とりわけ、〔10〕綿貫観音山古墳の角閃石安山岩の切石より構成・築造された横穴式石室からは、鋼製水瓶、異形兜、獣帯鏡、金銅製鈴付大帯など朝鮮半島（以下、半島と呼称する。）などに見られる、渡来的色彩の濃厚な副葬品が多量に検出された。このことから、本古墳の被葬者は半島および畿内と密接な関係をもちつつも関東地方北西部（上毛野地方）に強固な政治組織を形成していたことが考えられている。

赤堀茶臼山古墳〔1〕と舞台1号墳〔3〕は、いづれもが竪穴系埋葬施設をも含めた詳細な発掘調査がなされた古墳として知られている。この2つの古墳は、当該地域に所在の帆立貝式古墳としては大規模な部類なものであり、群馬県赤城山南麓域、すなわち今日の群馬県勢多郡域を支配した有力者層の奥津城と考えられており、6 C代の前二子古墳や中二子古墳などの、大室古墳群を形成した被葬者層との系譜的な関わりも考えられている。特に、舞台1号墳〔3〕は、前方部（造り出し部）から、多量の供献用高坏や鎌・刀子・勾玉などの祭祀用石製模造品が出土したこともあり、当該地域にあって、相当の祭祀権をも保有していた被葬者を想起することもできよう。

このように、鶏を含めた各種形象埴輪の組み合わせ・配列の在り方に、畿内とのなにかしらの関わりや影響も考えられ、この点、A I類に該当する古墳の被葬者、ないし築造者集団の元来の埴輪祭祀の伝統を重んじる保守性を看取できよう。(註14)

A II類の古墳は、現時点では4基と数は多くないが、直径が平均20m前後の円墳である点で共通する。出現の時期はA I類・B類の古墳よりも後出し、B類の古墳よりも若干はやく終焉を迎える。古墳への形象埴輪の配され方はA I類に準じた内容を呈している。後にも触れていくが、当該地域での多くの群集墳内の小円墳に配された形象埴輪の主体は、鶏から人物・馬へと移行する。たとえば、十二ヶ谷戸15号墳〔13〕は、その主体部に県内ではいち早く横穴式石室を導入した古墳として知られているが（山崎・高田、2000）、この点に新しい要素と（形象埴輪の配され方から見た）古い要素との混在が看取出来る。この点から、A II類の古墳は当該地域の群集墳における埴輪祭祀の変遷を考える上で過渡的な要素を持つ墳墓と言えよう。

次に、B類に分類した古墳の事例を見てみる。

その結果、たとえば目塚1号墳〔15〕のように5 C前半代の大型古墳である

太田天神山古墳（前方後円墳。墳丘主軸長210m。）に伴う陪冢の可能性が指摘されている事例もある。しかし、概していえば、上記の各当該地域では突出した古墳とはいえるが、現状では直径約20m前後の低墳丘小規模古墳（註11）に集中される傾向が指摘できよう。古墳築造の時期は概して、5C後半代から6C前半代に集中している（限定されている）観がある。

c. 群集墳における形象埴輪の配され方

ともかく、ここに当該地域での（群集墳のなかでの）小円墳における鶏形埴輪の扱われ方が看取でき、しかも、B類に該当する古墳の殆どが竪穴系の主体部（木棺直葬）を持つことが確認ないし推定されていることも注目される。しかし、同時に、群集墳を5C後半代以降に出現普及した古式群集墳（以下、前者と呼称する。）と、6C後半代以降に普及した新式群集墳（以下、後者と呼称する。）とでは、形象埴輪の配され方にも大きな差異も見てとれる。（右島和夫、1998。黒崎淳、2000。註15）

すなわち前者においては、鶏形埴輪を1個体のみ、もしくは鶏形埴輪のみを配するという極端な様相が看取され、後者においては古墳に配される形象埴輪の主体は人物・馬へと変化する。例えば、県内において6C後半代以降に構築された群集墳もが含まれる古墳群として知られている鴻巣市新屋敷古墳群・東松山市三千塚古墳群、大里郡寄居町・花園町にまたがる小前田古墳群、児玉郡児玉町・美里町にまたがる生野山古墳群、児玉郡美里町広木大町古墳群などでは鶏形埴輪の出土の報告はない。（大谷徹他・1996。金井塚良一、1976・1983・1991など。瀧瀬芳之、1986。菅谷浩之・笹森健一、1975。小淵良樹、1980）

このような傾向は、群馬県域の、島崎市少林台遺跡（古墳群）、新田郡尾島町世良田諏訪下遺跡、勢多郡粕川村白藤古墳群など5C後半代から7C代にかけて群集墳が形成された古墳群はもとより、富岡市芝宮古墳群などの6C後半代に新たに築造が開始された群集墳においても同様のことが指摘できる。（飯塚誠・徳江秀夫、1993。三浦京子他、1998。小島純一他、1989。篠原幹夫、1992）

上記の古墳群では、6C後半代以降に築造された古墳の主体部の多くに横穴式石室を採用した点を共通点の一つとして指摘できるが、ともかく多数の小規模な円墳より形成される児玉地域を含めた当該地域の群集墳においては、6C後半を迎えるに当たって形象埴輪を用いる上での認識が告暁の象徴である鶏から人物や生前の権威の象徴とも考えられている馬を配するという人物埴輪・馬形埴輪至上主義へと変化したこと、換言すれば葬送儀礼にともなう信仰観念に何かしらの変化が生じたことが読み取れるのではあるまいか。

この背景として、今回AⅡ類として分類した各古墳の出現が、小規模円墳での埴輪祭式になにかしらの影響を与えた可能性も念頭に置く必要もあるだろう。

d. B類資料の状況とそのあり方

ここで、本資料を含めたB類の資料について検討しよう。B類の属する上記の古墳9基は、墳丘の規模や副葬品などから見て、それぞれの属する古墳群のなかでも、とりわけ当該古墳とほぼ同時期に築造された古墳と比べてみても特に突出した内容を持つ古墳とは言いがたい。大まかにいえば、上記の古墳9基は前節でいう古式群集墳の範疇に含まれるものである。しかし、これらの古墳が属する各々の古墳群では、5C後半代から6C前半代に築造された古墳のすべてに鶏形埴輪が配されていたわけではないこともまた事実である。すなわち、B類の資料はある特定の被葬者に対して、特に選ばれて墳墓に配された埴輪としての位置付けが想起されよう。

畿内を中心とした考察ではあるが、主として5C代以降の古墳の築造に際して、なにかしらの規制の施行の可能性が、以前から小野山節氏などにより提唱されている。(小野山節、1970) また、近年では古墳の築造のみならず、葬送儀礼においても、大和政権による、ある種の葬送儀礼の管理(ある一定の「マニュアル」に基づいた葬送儀礼)がなされていた可能性が福永伸哉氏などによって説かれている。(福永伸哉、1995・1999・2000。註16)

しかし、このような古墳の築造における規制や儀礼の管理が(いわゆる大和政権の影響の下に)、この時期の当該地域の群集墳でも施行されていたとしても、鶏形埴輪ひとつのみが奥津城を飾る形象埴輪として特に選ばれた(許された)ことに、鶏が、この時代に、ある意味で特異な役割を果たしていたことが読み取れる。(註17)

e. 鶏形埴輪についてのこれまでの研究

次いで、鶏形埴輪についてのこれまでの研究の成果について簡潔な整理を試みたい。

鶏形埴輪については、1882年の坪井正五郎氏や1897年の沼田頼輔氏から1999年までの賀来孝代氏や坂本和俊氏などに至るまでの、およそ100年以上の研究の積み重ねがある。(坪井正五郎、1882。沼田頼輔、1897。賀来孝代・坂本和俊、1999。) 研究史の詳細については、(西田親史、1999・2000) に詳しいが、一つの論考のなかで複数の見解を提起する研究者もいる。そこで以下に鶏形埴輪の何が考察の対象・主題となってきたのかを大まかにまとめておく。

A/被葬者(の霊ないし魂)の再生

(たとえば大場磐雄、1960および1969。小畑三秋、1990。亀井正道、1995。橋本博文、1998など。)

B/被葬者の死後の生活の表現

(大場磐雄、1960。澤田文夫、2000など。)

C／被葬者の生前顕彰の一環

(大場磐雄、1960など。)

D／(被葬者に供される)犠牲鳥獣の象徴ないし代替

(江上幹幸、1972。増田精一、1976など。)

E／(前方後円墳での)首長霊継承儀礼が完了し、新首長の誕生を示す「確認」の象徴

(水野正好、1974。清水眞一、1994など。)

F／(大和政権に仕える)職掌集団の一つ、鳥飼部の象徴

(水野正好、1977)

G／(死者を悪霊から守る)辟邪の役割

(甘粕 健・橋本博文他、1996)

H／鳥の儀礼を重視したシャーマンの象徴

(坂本和俊、1999)

以上、提示した8点のうちAの見解を提起する研究者が圧倒的に多く、水野正好氏を中心にEの見解がこれに次いでいる。しかし、従来の研究の多くは、

1. 考察とする資料の対象を特定の地域だけに限定せず、列島全域(全国各地)および全時期からの出土事例にまで及んでいる論考が多いこと。
2. 資料を出土した古墳についての考察が・群集墳のなかの小古墳から大王陵クラスの巨大古墳まで一元的にわたっている傾向が強いこと。
3. 鶏形埴輪の持つ意義についての見解が、B類のような単体で出土するものから、各種形象埴輪のなかの群像のなかのひとつとして出土したものでひとつの解釈だけで説明しようとする傾向が強いこと。

このように、上に記したような点などでまだ多くの課題が残されている。この点、B類に属する事例については今回の村後地区より出土した本資料の持つ意義についても、上記の諸先学の見解を安易に当てはめて理解することには検討を要するであろう。

f. B類資料と本資料にかかわる意義と課題

これまで見てきたように、本資料を含めたB類の形態で鶏形埴輪が配された古墳は、この関東地方北西部では、現時点では5C後半代から6C前半代のおよそ100年間に限られ、その事例も今回確認できた限りでは11例と必ずしも多いとは言えない。しかし、これまで見てきたように、群集墳内の、ある特定の古墳に鶏形埴輪だけが特に選ばれての配置という習慣が約1世紀の間も続いたことは注目に値する。当該地域に限らず、古墳時代の遺跡や墳墓からは、(鶏を含めた)動物遺存体の出土は必ずしも多いとは言えない。(註18)そのため、古墳時代において動物と人間とがいかなる関わりを持っていたかを推察することは

容易とは言えない。

しかし、鶏の持つ最も顕著な特質は、上記の諸先学の記述にもあるように、やはり告暁の習性にある。いずれにせよ、当該地域にあっても、鶏の告暁はこの地域に生きた人々すなわち、上記の群集墳を築造した被葬者層との信仰や生活と同調するところがあったと言えるのではあるまいか。同調するところがなければ、およそ1世紀にもわたって鶏形埴輪が墳墓に配置されつづけることはなかったであろう。

また、今日、アジアの各地域で見られる鶏を用いた民族事例（葬送儀礼）を学ぶことで、群集墳内の鶏形埴輪を配された古墳の被葬者像を考察する上での手がかりが得られる可能性もある。近年、坂本和俊氏は東アジアにおける巫術等のシャーマニズムと鳥の儀礼を重視した上で、鶏形埴輪の意義にも迫った興味ある論考を提起した。これによれば、鶏は、「新たな生命の誕生を象徴し、霊界と俗界を遮断し、時間をも支配する鳥」であり、「首長はこうした鶏を飼うことによって時間や空間の支配者ともなりえた」と解釈された。その上で、鶏形埴輪の墳墓への配置理由を「古墳に埋葬された首長が（鳥の儀礼を重視する）シャーマンとしての属性を持ち、鳥に対する信仰を有していたため」と言及された。（坂本和俊、1999）

また、生物学や民族学の見地からは、東南アジアでは闘鶏に強い鶏や美声で鳴く鶏を持っていればステイタス・シンボルや富の象徴となるという見解が提起されている。（秋篠宮文仁他、2000）

ただし、今回出土の本資料については冒頭にも記したような事情もあり、現時点では当該地域において、5C後半代から6C前半代に主として低墳丘小規模古墳より構成された古式群集墳内の特定の古墳でみられた特異な埴輪祀の慣行が生み出した資料の1つとしての指摘をするにとどめておきたい。

ま と め

今回の調査で出土した本資料は、児玉郡市域における埴輪の生産・供給の問題についての再検討はもとより、当該地域での群集墳での鶏形埴輪の在り方という、これまであまり顧みることがなかった課題をも提起したといえる。以上、本章で述べた内容を要約すると、おおよそ以下の通りである。

- ① 本資料は、その出土状況から判断して、隣接している長沖71号墳に配されていた可能性が考えられる。
- ② 本資料の製作年代観は、共伴した円筒埴輪・県内での鶏形埴輪の製作の動向などから判断して、6世紀前半代と思われる。
- ③ 本資料への混入物、海綿骨針・結晶片岩（雲母）は、その製作地が藤岡・児玉地域に所在した埴輪窯のいずれかでの生産の可能性が考えられ、当該

地域における地域間交流や埴輪製作者集団の在り方を考える上でも、不可欠な情報を提示している。

- ④ 北関東地方における鶏形埴輪の配され方は大きく2通りに分類できる。
A類. 比較的大型の有力首長墳（前方後円墳・帆立貝式古墳）に各種形象埴輪群像の一つとして配される場合。
B類. 低墳丘小規模古墳より構成される群集墳（古墳群）の特定の古墳にのみ単体で配される場合。本資料はB類に属する。
- ⑤ A類の埴輪祭祀は、古墳時代の5世紀から6世紀を通して施行されたのに対して、B類のそれは5世紀後半代から6世紀前半代の事例に限られる現象が見られる。
- ⑥ 当該地域では6世紀半ばを境に、群集墳内に属する古墳に配される形象埴輪の対象が、鶏から人物や馬へと置き換わる現象が見られ、この点に当該地域での葬送儀礼・信仰観念に、なにかしらの変化を看取できる。その背景の一つには、AⅡ類の古墳の影響が考えられる。
- ⑦ ただし、限られた期間とはいえ、本資料も含めて鶏形埴輪だけが特に選ばれて墳墓に配されていたことは当地域においても、馬・猪・鹿など他の動物とは異なり、鶏がある意味で特殊な役割を果たしていたことが読み取れる。

今後の課題

- ① 長沖古墳群はもとより当該地域の各群集墳内において、鶏を配された古墳と配されなかった古墳との差異や特質についての比較検討などを行なう必要がある。鶏形埴輪が配されていた場合は、その古墳の被葬者像についての考察を進める必要もある。
- ② 6世紀半ばを境にして、当該地域の殆どの群集墳では鶏形埴輪が配されなくなるが、その背景となる新たな葬送イデオロギーの流入や政治的規制などについても検討を試みる必要がある。

今回は、既述の事情から長沖古墳群での、鶏形埴輪を中心とした形象埴輪と古墳祭祀に関わる問題までは検討することはできなかった。しかしながら、本町の長沖古墳群には、まだ未調査の古墳が多数現存する。将来、こうした古墳の調査の進展と更なる資料の蓄積を待って、再度この問題を検討したい。

（西田親史）

今回、本資料の実測、観察所見およびこの小文を作成するにあたって以下の方々より御指導、御協力をいただきました。お名前を記して、厚く御礼申し上げます。（敬称を略す）

江原昌俊、太田博之、大谷 徹、賀来孝代、櫻井和哉、鳥羽政之、志村 哲、永井正浩、永井智教、中沢良一、中村岳彦、野口泰宣、増田一裕、山崎 武。

註

- 註1 この小文での北関東地方とは、入間川以北、渡良瀬川以南の地域とした。
- 註2 埼玉県児玉郡美里町に所在する宇佐久保埴輪窯跡も、本町長沖古墳群とは至近距離にある。しかし、永井智教氏の御教示によれば、当窯跡より出土する埴輪類は、海面骨針を含む事例が皆無であるという。このため、今回は本資料の製作の可能性は少ないと判断し、考察の対象からは除外した。なお、当窯に関する報告は以下の文献に詳しい。
(山川守男・金子彰男他、1981)
- 註3 埼玉県内では、志木市西原大塚遺跡の古墳時代前期の方形周溝墓より鳥形土製品1体の出土が知られている。ただし、その形態は鶏とは認めがたい。(佐々木、2001a・2001b)
- 註4 1995年の調査では、鶏形埴輪の胴部が出土している。(松村一昭・1999)後藤氏等が調査した際に出土した資料と同一個体になる可能性も考えられる。
- 註5 柏崎資料は、未報告資料。当資料は、東松山市教育委員会の江原昌俊氏の御厚意により実見した。
- 註6 白山12号資料は、未報告資料。当資料は、岡部町教育委員会の鳥羽政之氏、鴻巣市教育委員会の山崎武氏の御厚意により実見した。
- 註7 浅田資料は、(若狭・内田、1999)などに掲載されているが、原則として未報告資料。
- 註8 下條資料については、永井智教氏の御教示を得た。
- 註9 御嶽塚資料は未報告資料であるが、本庄市歴史民俗資料館の常設展示室にて原資料を実見した。御嶽塚古墳の情報については、本庄市教育委員会の増田一裕氏の懇切丁寧な御教示を得た。
- 註10 山崎武氏の御厚意により実見した。
- 註11 白山2号墳資料は、鳥羽政之氏と山崎武氏の御厚意により実見した。
- 註12 石田川資料は、今日では、当遺跡に伴うものとは考えられず、付近の埋没古墳群からの流れ込みが推定されている。
- 註13 (財)長瀬総合博物館の常設展示室にて実見した。
- 註14 若松良一氏は、鶏を含めた各種形象埴輪の基本的な構成要素の原形はすべて近畿地方—とりわけ、古市古墳群に中心が求められ、河内政権の主導の下に埴輪祭式の整備がなされたものと推察されている。(若松良一、1992)
- 註15 今回は、便宜上、当該地域において形成された群集墳について、主として5世紀後半代から6世紀前半代にかけて、弥生時代以来の方形周溝墓の系譜を引くと考えられる、簡素な竪穴系遺骸埋葬施設(木棺直葬)を持つ

古墳より構成された事例を「古式群集墳」、6世紀後半代以降に主として横穴式石室を有する古墳より構成された事例を「新式群集墳」とした。

なお、群集墳に関する研究成果については、以下の文献を参照した。(石部正志、1979および1992。和田晴吾、1992。右島和夫、1994。瀬川貴文、2001。)

註16 近年、古墳時代の史的展開を考察する上では、大和・河内から地方への一方的思考のみならず、地方独自の論理(地方からの視座)をも重視する必要性が岩崎卓也氏や土生田純之氏によって説かれるようになってきている。(岩崎卓也、1990。土生田純之、1998および2001)当該地域の埴輪祭祀研究についても、こうした視点で研究を進めていく必要があるだろう。

註17 近畿地方では、鶏形埴輪が墳丘長が200m以上のいわゆる巨大古墳はもとより、(大阪府堺市土師ニサンザイ古墳。野上丈助、1982。奈良県御所市室宮山古墳。藤田和尊・木許守、1999)古墳の範疇には含めることのできない、埴輪棺墓にも鶏形埴輪が配されていた(供されていた)ことが、知られている。(大阪府藤井寺市土師の里遺跡。三木弘他・1998)

註18 こうした状況のなか、以下の論考は、当該地域の墳墓(古墳)からの動物遺存体の出土についても論じたものとして知られているものである。(桃崎祐輔、1993)

補 遺

[24] 群馬県藤岡市天王塚古墳は、横穴式石室を有し、6C末代(TK209段階)の築造が推定されている旨を知り得た。この場合、天王塚資料を本文のB類に含めることで、「当該地域の群集墳にあっては、6C末段階まで、鶏形埴輪が供されつづけた」と叙述することも可能ではある。

しかし、天王塚資料は、本文にも記したように、研究者の多くが「ひよこ」と解している事例である。「ひよこ」の埴輪については、「古墳時代後期にいたって、鶏形埴輪の本来の意義が忘れ去られてしまった結果として出現した資料」として解する論考もある。(清水眞一、1994)したがって、天王塚資料は、現時点では、本文で述べてきた内容を特に変更する事例ではないと考えたい。

ただし、今後、当該地域の6世紀後半代に属する群集墳より、「ひよこ」はもとより、鶏形埴輪の出土が増加する傾向が顕著になるようであれば、本文の主旨にも直接、影響することも考えられるので、その際には新たに検討を加えていきたい。

なお、天王塚古墳についての情報は、藤岡市教育委員会の志村哲氏より御教示をいただきました。記して謝意を表します。

引用・参考文献

- 秋篠宮文仁他 (2000) 『鶏と人』 小学館
- 甘粕健・橋本博文他 (1996) 『堂ヶ作山古墳Ⅲ』 堂ヶ作山古墳調査団・会津若松市教育委員会
- 飯塚 誠、徳江秀夫 (1993) 『少林山台遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石井克己 (1998) 「発掘された埋没古墳群—子持村・浅田遺跡—」 『群馬文化』 第255号 群馬県地域文化研究協議会
- 石部正志 (1979) 「群集墳論」 『古墳時代の研究』 12 雄山閣
- 井口泰基 (1997) 「埼玉県北西部における埴輪供給の問題—胎土分析を中心に—」 『土曜考古』 第21号 土曜考古研究会
- 岩崎卓也 (1985) 『古墳の時代』 教育社
- 梅沢重昭他 (1971) 『太田市米沢二ツ山古墳—および墳丘下発見の住居址—』 群馬県教育委員会
- 梅沢重昭・徳江秀夫他 (1998) 『綿貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編』 群馬県教育委員会
- 江上幹幸 (1972) 「古墳時代の『天鳥船』についての若干の考察」 『小田原考古学会報』 5 小田原考古学会
- 大谷徹・金子直行他 (1996) 『新屋敷遺跡C区』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集
- 大西雅広 (1996) 「掘り出された古代の息吹 墓と鶏の不思議な関係—鶏形土製品—」 『埋文群馬』 No.25・26 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大野雲外・柴田常恵 (1903) 「凶版考説」 『東京人類学会雑誌』 第18巻 第175号 東京人類学会
- 大場磐雄 (1960) 「古事記・日本書紀と考古学」 『国文学 解釈と鑑賞』 25-14 至文堂
- 大場磐雄 (1969) 「遺物から見た古代の鶏」 『日本歴史』 248号
- 小野山節 (1970) 「5世紀における古墳の規制」 『考古学研究』 第16巻第3号 (通巻第63号) 考古研究会
- 小畑三秋 (1990) 「埴輪配列の意義」 『平尾城山古墳』 (財) 古代学協會
- 小淵良樹 (1980) 『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査報告第40集
- 賀来孝代 (1999) 「埴輪の鳥はどんな鳥」 『鳥の考古学』 かみつけの里博物館
- 金井塚良一編 (1976) 『北武蔵考古学資料図鑑』 校倉書房
- 金井塚良一 (1983) 「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」 『埼玉県立博物館紀要』 10 埼玉県立博物館
- (1991) 『人物埴輪を語る』 さきたま出版会
- (1994) 『はにわ屋高田儀三郎聴聞帳』 新人物往来社
- 亀井正道他 (1995) 『日本の美術 第346号 人物・動物はにわ』 至文堂
- 川西宏幸 (1997) 「倭人の心性」 『心茶』 第13巻第2号 (通巻第43号)
- 久保和士 (1999) 『動物と人間の考古学』 真陽社
- 黒崎淳他 (1997) 『動物はにわコレクション—関東の動物埴輪—』 栃木県教育委員会
- 黒崎淳他 (2000) 『群集墳の時代—しもつけにおける成立と展開—』 栃木県教育委員会
- 小島純一 (1989) 『白藤古墳群』 粕川村教育委員会
- 後藤守一 (1929) 『上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』 帝室博物館
- 坂本和俊 (1996) 「埼玉古墳群と无耶志国造」 『群馬考古学手帳』 6 群馬県土器観会
- (1999) 「鳥に託された古代人の心—民族・民俗・文献・考古資料から—」 『鳥の考古学』 かみつけの里博物館
- 佐々木保俊 (2001a) 「5. 大型方形周溝墓と鳥形土器」 『さいたま出土品展』 埼玉県立博物館
- (2001b) 「5. 志木市西原大塚遺跡の調査」 『第33回 遺跡調査報告会 発表要旨』 埼玉考古学会
- 篠原幹夫 (1992) 『芝宮古墳群』 富岡市教育委員会
- 杉山晋作他 (1998) 「群馬県猿田埴輪窯生産の埴輪」 『日本考古学協会 第64回 (1998年度) 総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- 佐野市郷土博物館 (1992) 『企画展 佐野八幡古墳とその時代』
- 澤田文夫 (2000) 「古墳上の鶏形埴輪について—古代に鶏は朝告鳥であったか?—」 『動物考古学』 第15号 動物考古学会
- 柴田常恵 (1906) 「埴輪の製造地」 『東京人類学会雑誌』 21-246
- 島田孝雄 (1987) 「目塚1号墳」 『市内遺跡Ⅲ』 太田市教育委員会
- (1996) 「目塚1号墳」 『太田市史 通史編 原始古代』 太田市
- 清水眞一 (1994) 「鶏形埴輪についての一考察—纏向遺跡巻野内坂田地区の鶏形埴輪の持つ意義—」 『樞原考古学研究所論集』 第十一 吉川弘文館
- 志村 哲 (1995) 「本郷埴輪窯とその周辺」 『シンポジウム2 関東における埴輪の生産と供給』 日本考古学協会
- (1999) 「猿田Ⅱ遺跡」 『年報 (14)』 群馬県藤岡市教育委員会
- 志村 哲・長井正欣 (2000) 『F276 滝B遺跡 F32 白石前原遺跡』 群馬県藤岡市教育委員会・山武考古学研究所
- 菅谷浩之 (1976) 「宥勝寺北裏埴輪窯」 『本庄市史 資料編』 本庄市
- (1980) 『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第1集
- 菅谷浩之・駒宮史朗 (1973) 「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」 『第6回 遺跡発掘調査報告会』 発表要旨
- 菅谷浩之・笹森健一 (1975) 『広木大町古墳群発掘調査概観』

- 菅谷浩之・柳田敏司 (1974) 『第7回 遺跡発掘調査報告会』発表要旨
 瀬川貴文 (2001) 『群集墳研究の現状と課題』『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム
 三河大会実行委員会・三河古墳研究会
- 関口正幸 (2001) 『7 滑川町月輪古墳群の調査』『第33回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
 高崎光司・大谷徹 (1992) 『新屋敷遺跡-B区-』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第123集
 高崎教育委員会 (1980) 『御布呂遺跡』
 瀧瀬芳之 (1986) 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第58集
 津金澤吉茂他 (1980) 『群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について』『紀要』1 群馬県立歴史博物館
 坪井正五郎 (1982) 『古墳及び塚穴』『東京考古学会報告』10—3
 長井正欣他 (1997) 『高崎情報団地遺跡』山武考古学研究所
 西田健彦 (1991) 『舞台1号墳の調査』『群馬文化』第227号 群馬県地域文化研究協議会
 西田健彦他 (1991) 『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会
 西田親史 (1999) 『関東地方における鶏形埴輪の諸問題』『動物考古学』第12号 動物考古学研究会
 (2000) 『続・鶏形埴輪の諸問題—中部・東北地方の出土事例を中心に—』『動物考古学』第15号 動物考古学研究会
- 沼田頼輔 (1997) 『鶏の埴輪』『考古学雑誌』第1編第9号
 野上文助 (1982) 『大阪の埴輪』大阪府立泉北考古資料館
 野村治男 (1996) 『成塚街道北古墳群』『新発見考古速報展 96』群馬県地域展示 群馬発掘前線 群馬県教育委員会
 橋本博文 (1980) 『埴輪祭式論』『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
 橋本博文他 (1980) 『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺北裏遺跡調査会
 橋本博文 (1996) 『天神山古墳』『太田市史 通史編 原始古代』太田市
 (1998) 『埋葬祭祀と神話』『古代史研究最前線』新人物往来社
 土生田純之 (1998) 『黄泉の国の成立』学生社
 (2001) 『後期古墳研究の課題』『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会
- 坂野和信 (1987) 『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
 平野新一他 (1993) 『はにわ—秘められた古代の祭祀—』群馬県立歴史博物館
 (1999) 『観音山古墳と東アジアの世界』群馬県立歴史博物館
- 福永伸哉 (1995) 『雪野山古墳と古墳時代の葬送儀礼』『祭(まつり)と政(まつりごと)—古墳時代のまつりとかたち—』滋賀県立安土城考古博物館
 (1999) 『古墳の出現と中央政権の儀礼管理』『考古学研究』第46巻第2号(通巻182号) 考古学研究会
- 藤岡市編さん委員会 (1989) 『藤岡市史 資料編 別巻「白石古墳群調査報告書」』藤岡市
 藤田和尊・木許守 (1999) 『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市教育委員会
 本庄市歴史民俗資料館 (1986) 『埴輪展—本庄付近の埴輪と副葬品—』
 前原 豊他 (1995) 『中二子古墳』前橋市教育委員会
 増田逸朗・菅谷浩之 (1973) 『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡発掘報告書第19集
 増田逸朗・柳田敏司 (1971) 『北塚原古墳群発掘概要』『第4回 埼玉県遺跡発掘報告会』発表要旨
 増田精一 (1976) 『埴輪の古代史』新潮社
 松村一昭 (1999) 『赤堀茶白山古墳』『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社
 三浦京子他 (1999) 『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会
 三木 弘他 (1999) 『土師の里遺跡—土師氏の墓域と集落の調査—』大阪府教育委員会
 右島和夫 (1994) 『上野における群集墳の成立』『東国古墳時代の研究』学生社
 水野正好 (1974) 『埴輪体系の把握』『古代史発掘』第7巻 講談社
 (1977) 『埴輪の世界』『日本原始美術体系3 土偶・埴輪』講談社
 村石眞澄 (1998) 『甲斐の馬生産の起源—塩部遺跡SY3方形周溝墓出土のウマ歯から—』『動物考古学』第10号 動物考古学研究会
 桃崎祐輔 (1993) 『古墳に伴う牛馬供犠の検討—日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して—』『古文化談叢』第31集
 九州古文化研究会
- 柳 進 (1961) 『児玉町八幡山埴輪焼場窯跡発掘調査報告書』埼玉県 児玉高等学校
 山川守男・金子彰男 (1981) 『II 新発見の埴輪窯跡群』『いぶき』12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部
 山崎武・高田大輔 (2000) 『鴻巣市出土の鶏型埴輪』『埴輪研究会誌』第4号埴輪研究会
 若狭徹・内田眞澄 (1999) 『鳥の考古学』かみつけの里博物館
 (2000) 『はにわ群像を読み解く』かみつけの里博物館
 若狭徹・田辺芳昭他 (2001) 『保渡田八幡塚古墳—史跡保渡田八幡塚古墳群保存整備事業報告書—』群馬町教育委員会
 若狭徹他 (1998) 『八幡塚古墳』『群馬町史 資料編1 原始古代中世』群馬町
 若松良一 (1992) 『人物・動物埴輪』『古墳時代の研究』第9巻 雄山閣
 和田晴吾 (1992) 『群集墳と終末期古墳』『新版 日本の古代』第5巻 近畿I 角川書店
 (1998) 『古墳時代は古代国家か』『古代史の論点4—権力と戦争—』小学館

版 圖



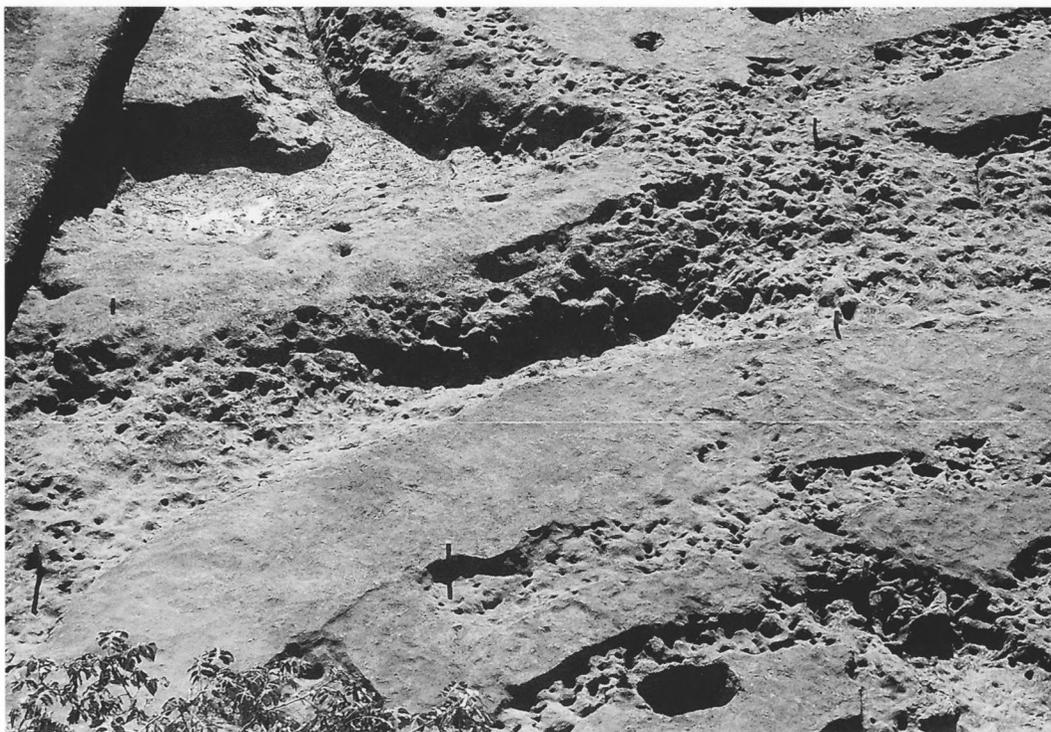
1 村後地区第1号古墳址全景（南から）



1 村後地区第1号古墳址 墳丘部攪乱状況（南から）



2 村後地区第1号古墳址 墳丘中央部攪乱状況（北から）



1 村後地区第1号古墳址 周溝 (北から)



2 村後地区第1号古墳址 完掘状況 (北から)



1 村後地区第2号古墳址 全景（北から）



2 村後地区第2号古墳址 G-5グリッド付近遺物出土状況（北から）



1 村後地区第2号古墳址 鶏形埴輪出土状況（東から）



2 村後地区第2号古墳址 鶏形埴輪出土状況近接（南から）



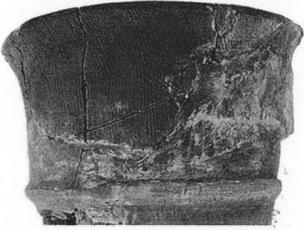
17-1



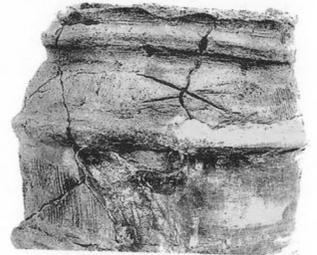
17-3



18-6



17-4



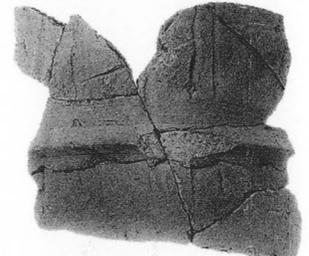
19-1



17-2

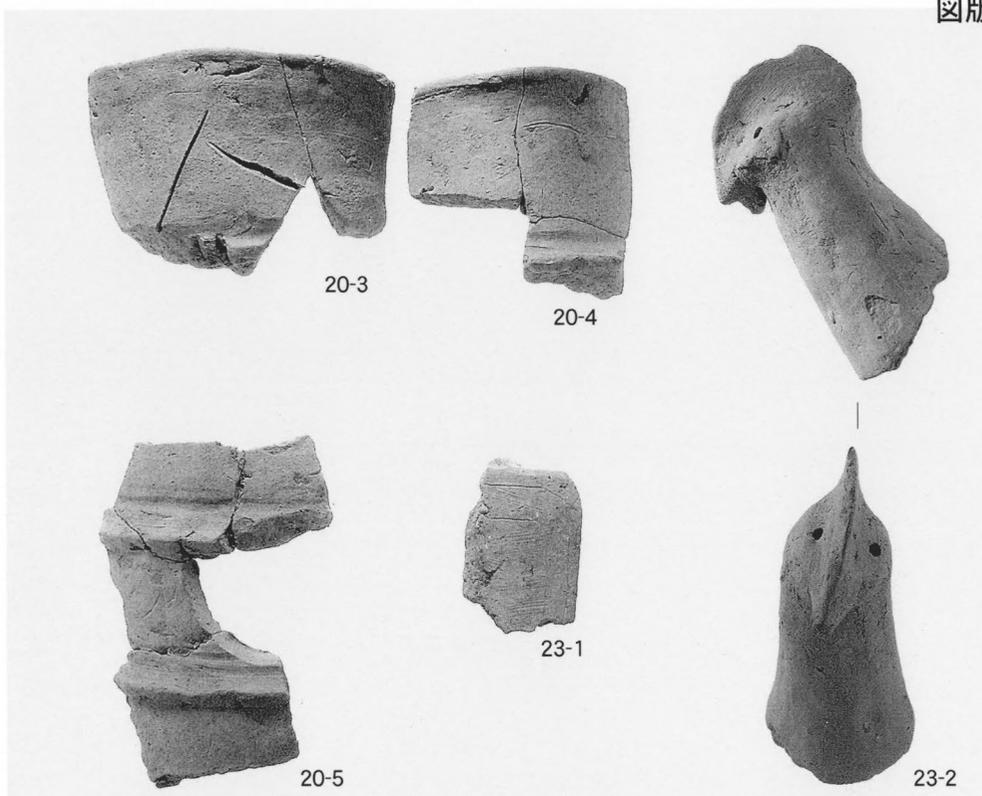


17-5

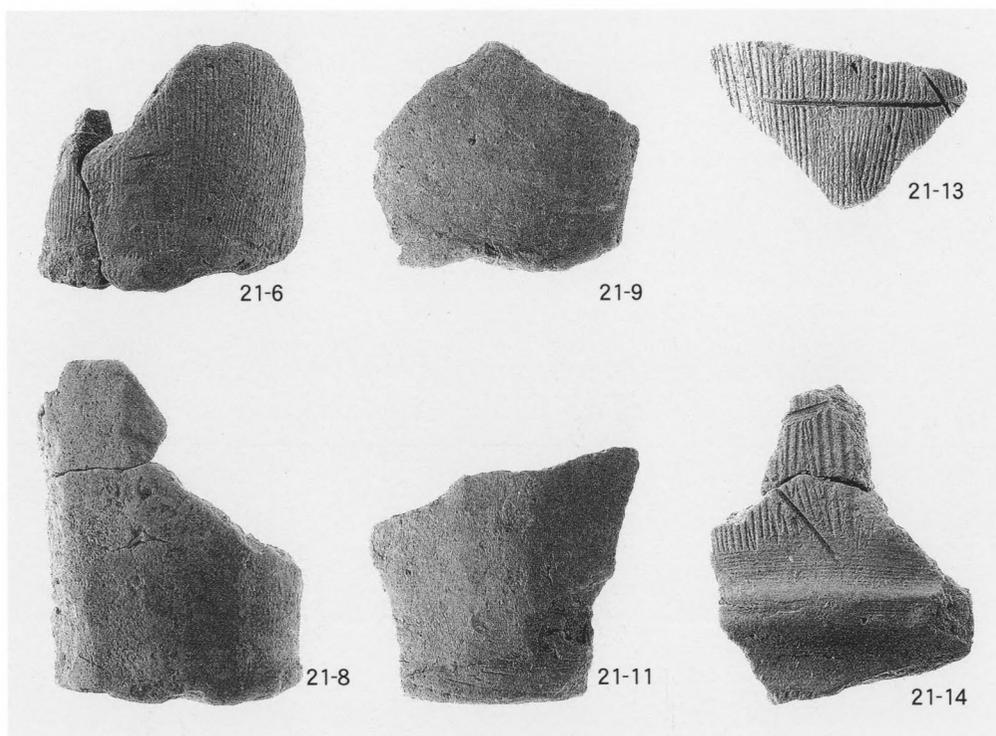


19-2

1 村後地区第2号古墳址 周溝内出土遺物 (1)



1 村後地区第2号古墳址 周溝内出土遺物 (2)



2 村後地区第2号古墳址 周溝内出土遺物 (3)



1 村後地区第4号古墳址 全景（西から）



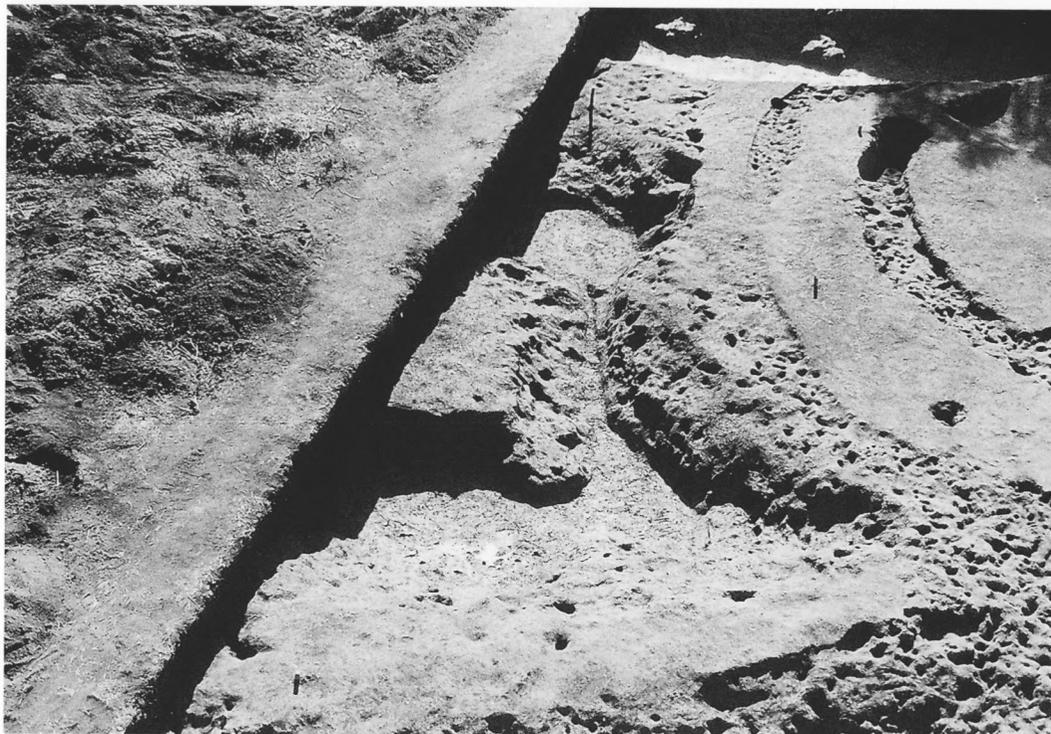
2 村後地区第4号古墳址 全景（南から）



1 村後地区第4号古墳址 周溝内被熱礫検出状況（北西から）



2 村後地区第4号古墳址 周溝内被熱礫検出状況（東から）



1 村後地区第4号古墳址 周溝完掘状況（北から）



2 村後地区第4号古墳址 周溝内出土遺物



1 長沖古墳群第71号墳と周溝（北西から）



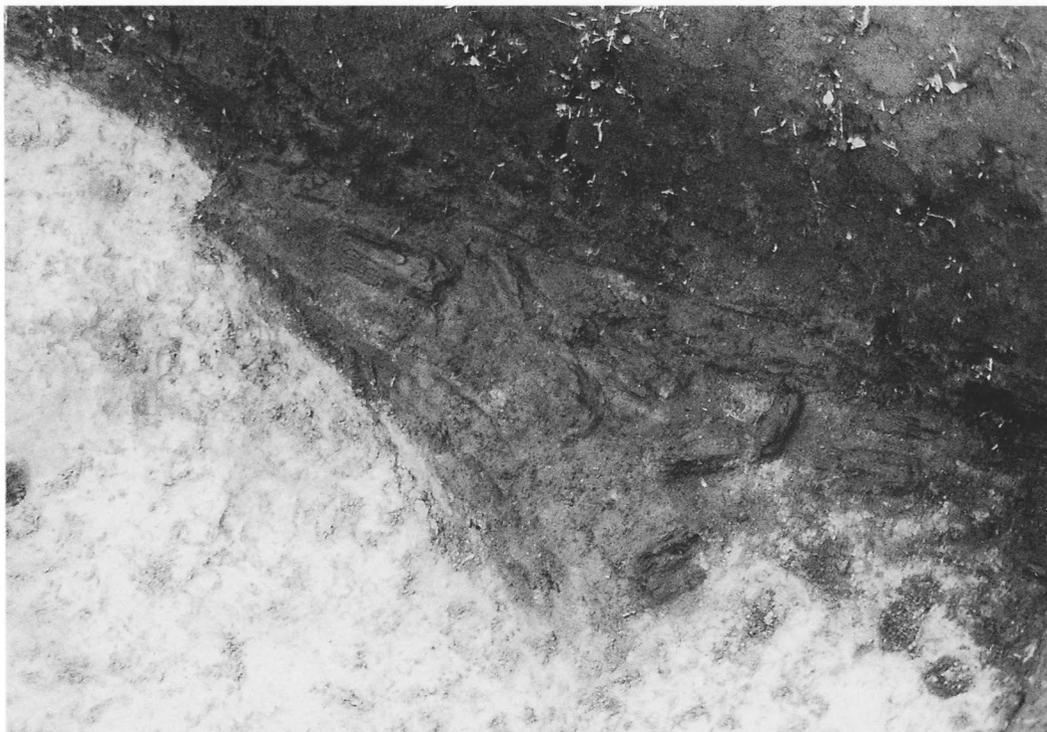
2 長沖古墳群第71号墳と周溝（北から）



1 長沖古墳群第71号墳 周溝東壁セクション (西から)



2 長沖古墳群第71号墳 周溝セクション (北東から)



1 長沖古墳群第72号墳 周溝内炭化材出土状況（東から）



2 長沖古墳群第72号墳周溝と村後地区第1号住居址（北西から）



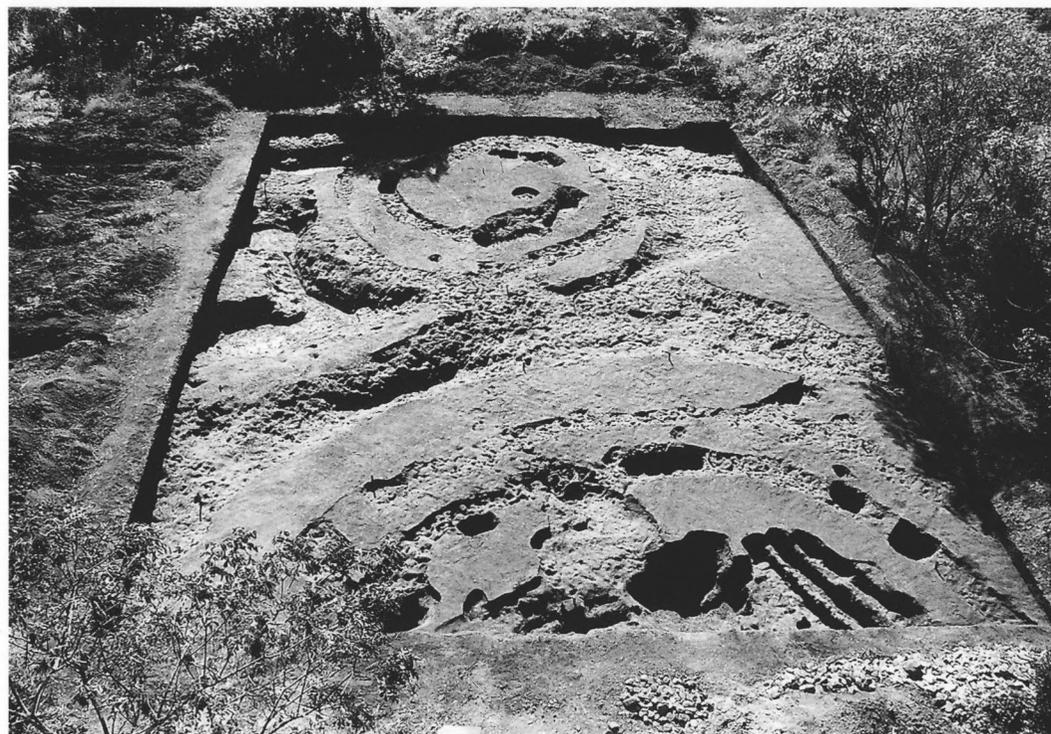
1 村後地区第1号住居址（東から）



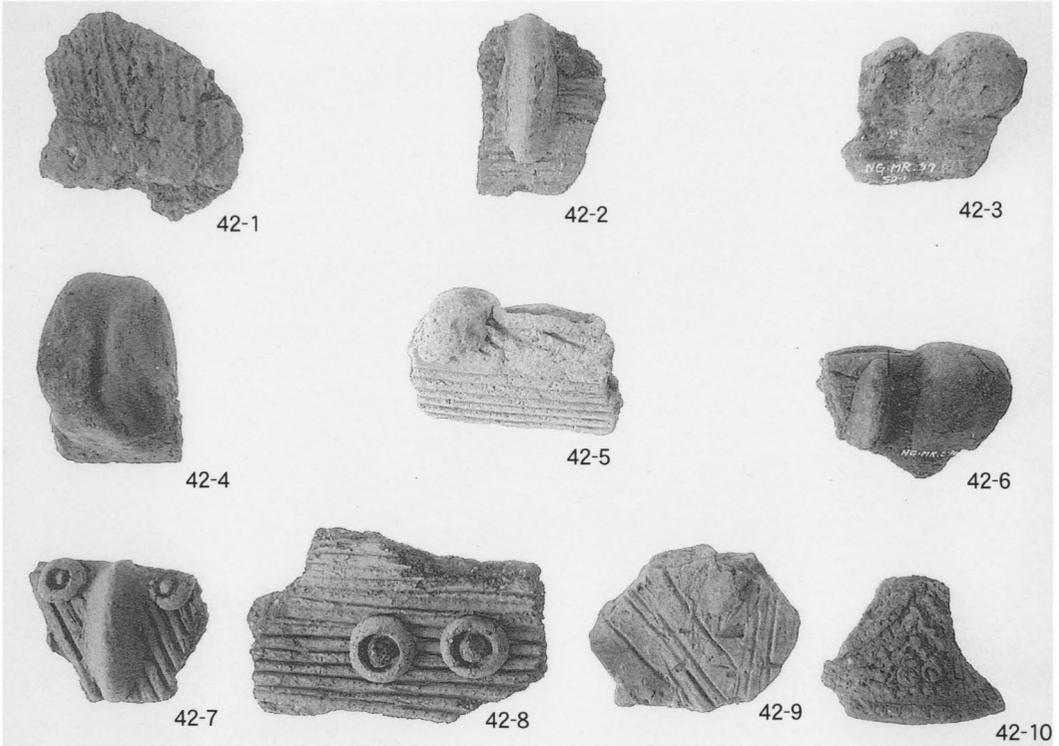
2 土層捻転址と第2号住居址（南東から）



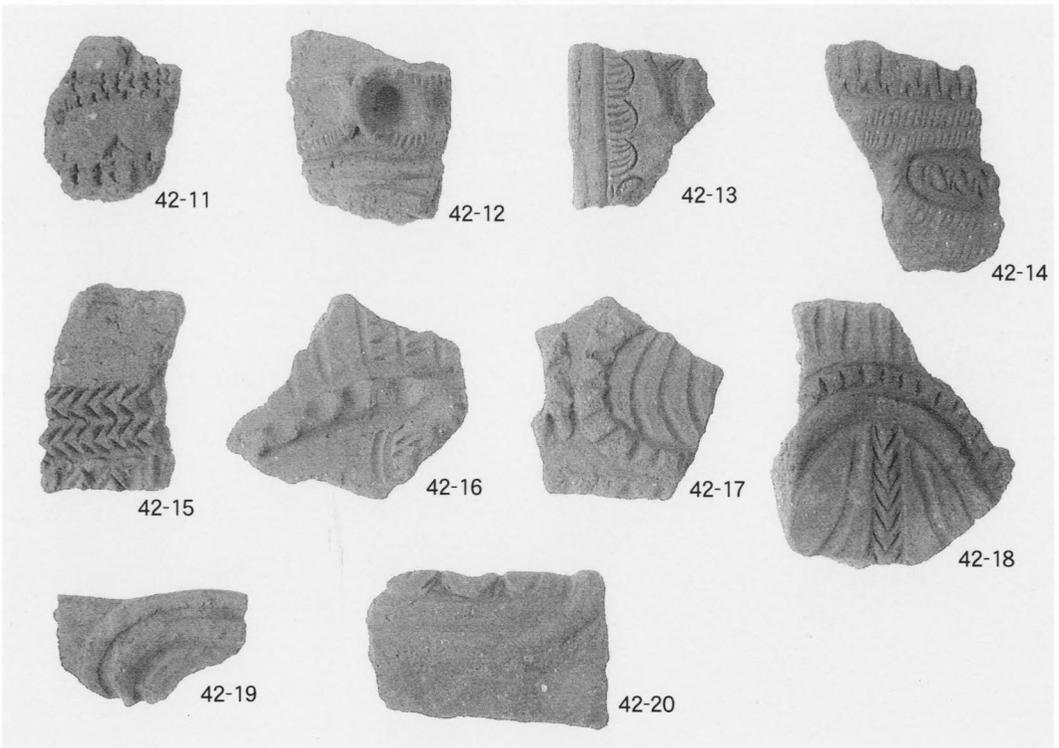
1 村後地区第1号土壙（北西から）



2 村後地区全景（北から）



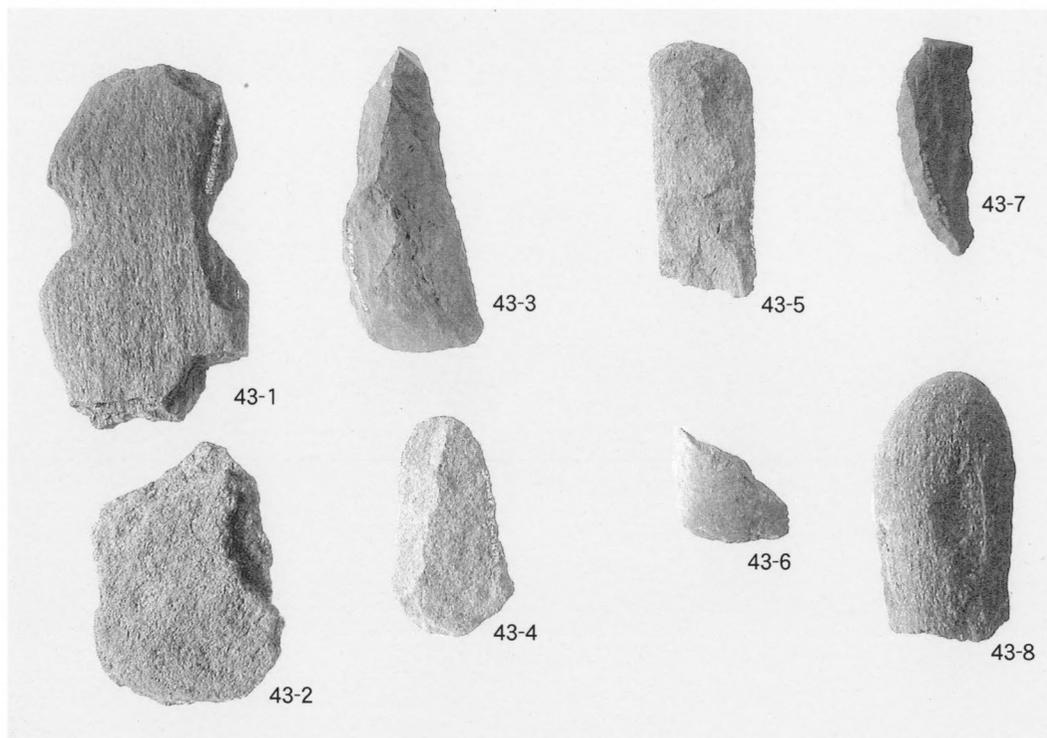
1 村後地区 縄文時代の遺物 (1)



2 村後地区 縄文時代の遺物 (2)



1 村後地区 縄文時代の遺物 (3)



2 村後地区 縄文時代の遺物 (4)



1 飯玉地区C地点 表土除去作業（北西から）



2 飯玉地区C地点 発掘調査風景（北西から）



1 飯玉地区C地点 第1号古墳址周溝・第48号墳周溝内遺物出土状態（北東から）



2 飯玉地区C地点 第1号古墳址周溝・第48号墳周溝セクション（東から）



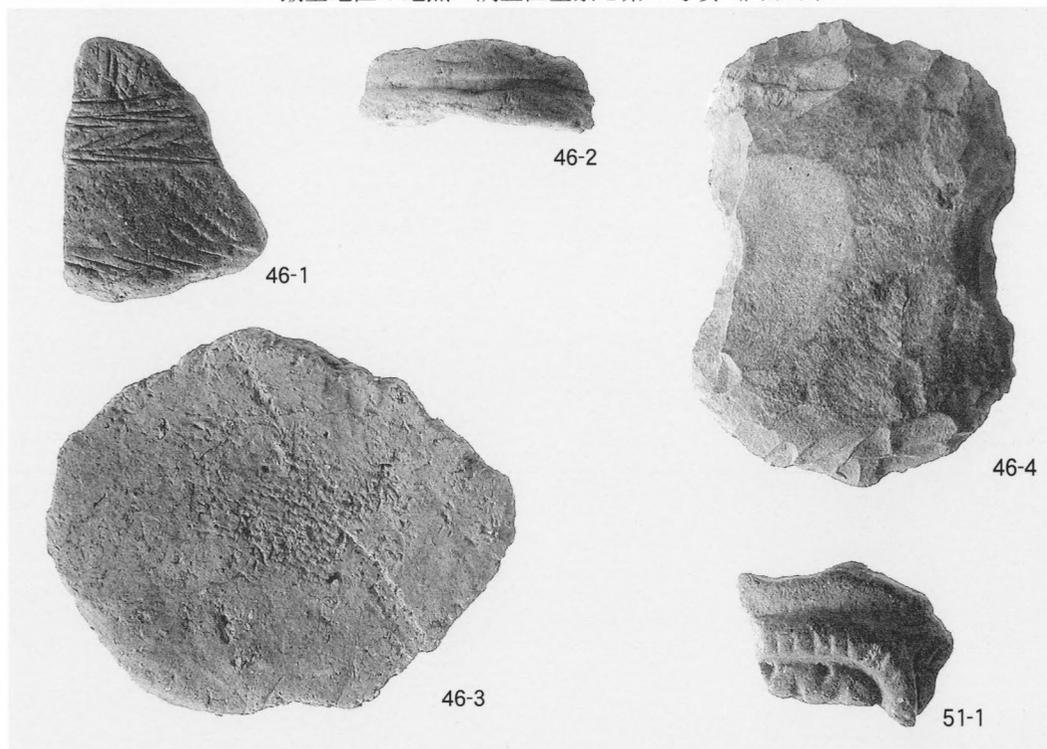
1 飯玉地区C地点 第1号古墳址周溝・第48号墳周溝完掘状態（北東から）



2 飯玉地区C地点 第1 a・b 土壙完掘状態（東から）



1 飯玉地区C地点 調査区全景と第48号墳（西から）



2 飯玉地区C地点 第一号古墳址・第48号墳周溝内出土遺物および第1a・b号土壙出土遺物



1 飯玉地区D地点 表土除去作業（東から）



2 飯玉地区D地点 長沖第49号墳と周溝（北東から）



1 飯玉地区D地点 長沖第49号墳周溝セクション C—C'ライン (東から)



2 飯玉地区D地点 長沖第49号墳周溝セクション B—B'ライン (東から)



1 飯玉地区D地点 調査区全景（東から）



2 飯玉地区D地点 長沖第49号墳現況測量風景（東から）

報告書抄録

フリガナ	ナガオキコフンゲン ムラウシロチク イイダマチクシィ・ディチテン							
書名	長沖古墳群Ⅲ 村後地区 飯玉地区C・D地点							
副書名	一町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 31-							
シリーズ	文化財調査報告書	巻次	第36集					
編集者	徳山寿樹・大熊季広・西田親史							
編集機関	児玉町教育委員会							
所在地	〒367-0217 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地							
発行日	2002年(平成14年)3月25日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
村後地区	児玉郡児玉町大字長沖字村後247-3番地外	113824	300	36° 10' 42"	139° 07' 45"	H. 6. 7. 18 } H. 6. 9. 30	500m ²	個人宅造
飯玉地区 C地点	児玉郡児玉町大字児玉字飯玉412-2	113824	300	36° 10' 43"	139° 07' 56"	H. 8. 7. 23 } H. 8. 8. 30	124m ²	個人宅造
飯玉地区 D地点	児玉郡児玉町大字児玉字飯玉408-6	113824	300	36° 10' 43"	139° 07' 57"	H. 10. 11. 2 } H. 10. 11. 30	226m ²	個人宅造
所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
村後地区	古墳 古墳時代		古墳址	3基		埴輪・土師器、炭化材		
			周溝	5条				
	集落 縄文時代 近・現代	竪穴住居址	2軒					
		土壇	2基					
	溝址	4条						
	土壇	多数						
飯玉地区 C地点	古墳 古墳時代		周溝	2条		土師器片、須恵器片 縄紋前・中期土器片、石器		
			土壇	2基				
飯玉地区	古墳 古墳時代		周溝	1条		鉄滓、縄紋土器片		

発掘調査の組織

発掘調査組織（平成6年度 村後地区）

主体者 児玉町教育委員会
教 育 長 富丘 文雄
事務局 社会教育課
課 長 大塚 勲
課 長 補 佐 関根 安男
" 岩上 高男
社会教育係長 清水 満
主 任 鈴木 徳雄
" 田島 賢二（会計幹事）
主 事 恋河内昭彦
" 倉林美恵子
" 徳山 寿樹（調査担当）
主 事 補 大熊 季広（ " ）

発掘調査組織（平成10年度 飯玉地区D地点）

主体者 児玉町教育委員会
教 育 長 富丘 文雄
事務局 社会教育課
課 長 関根 安男
文化財係長 鈴木 徳雄
社会教育係主任 倉林美恵子（会計幹事）
文化財係兼務主任 杉山 茂俊
文化財係主任 恋河内昭彦
主 事 徳山 寿樹
" 大熊 季広（調査担当）
主 事 補 松澤 浩一

発掘調査組織（平成8年度 飯玉地区C地点）

主体者 児玉町教育委員会
教 育 長 富丘 文雄
事務局 社会教育課
課 長 大塚 勲
課 長 補 佐 関根 安男
社会教育係長 田島 賢二（会計幹事）
主 任 倉林美恵子
文化財係長 鈴木 徳雄
主 事 恋河内昭彦
" 徳山 寿樹（調査担当）
" 大熊 季広

整理・報告書刊行調査組織（平成13年度）

主体者 児玉町教育委員会
教 育 長 富丘 文雄
事務局 社会教育課
課 長 清水 満
課 長 補 佐 永尾 清一
" 根岸 誠
文化財係長 鈴木 徳雄
社会教育係主任 戸矢 芳子（会計幹事）
文化財係主任 恋河内昭彦
主 事 徳山 寿樹（担 当 者）
" 大熊 季広（担 当 者）
" 松澤 浩一

児玉町文化財調査報告書 第36集

長 沖 古 墳 群 III

村後地区・飯玉地区（C・D地点）

一町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 31-

平成14年3月25日印刷

平成14年3月25日発行

発行者 児玉町教育委員会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地

